オレ氏、デウスエクスマキナ的なアラガミになる

真鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死ぬ寸前までプレイしてたゲーム『ゴッドイーター３』。死んだらゲームの敵キャラ、アラガミ『ハバキリ』になっていた。このままでは狩られるだけだと強くなるために奔走する。終末の世界で生き残るために。

目次

1 死にゆく世界 …… 1
2 力を呈せ …… 4
3 潜む恐怖 …… 10
4 威権の調停者 …… 15
5 破壊の主 …… 20
6 刺さる悪意 …… 26
7 災いの足音 …… 31
8 悪魔の視線 …… 38
9 この胸にあるもの …… 43
10 転がる運命 …… 48
11 魂の鼓動 …… 53
12 魔境を超えて …… 59
13 宿命に導かれ …… 65
14 明日へと絆ぐ …… 72
15 蝶の誘い …… 81
16 凱旋 …… 89
17 氷解 …… 95
18 束の間の休息 …… 102
19 炎の舞 ～終わらない旅～ …… 108
20 先陣を斬る …… 114
21 路の先に …… 120
22 来たるその日まで …… 127
23 蠢く坑道 …… 134
24 灰の番人 …… 144

25 脅威の謳歌 ―― 151
26 灰底の都 ―― 161
27 迫る悪夢 ―― 168
28 無垢なる瞳 ―― 176
29 慈悲なき舞台 ―― 183
30 嵐を切り裂いて ～闘志の閃き～ ―― 189
31 黒の一閃 ―― 198

1　死にゆく世界

死んだと思ったら別の世界にいた。
死因は家に某国ロケットの残骸が落下しての圧死。
んで、気が付いたらなんか人間じゃない謎の生き物になってたんだわな、これ。
それにしても妙な身体だ。
機械なのか生物なのか、よう分からんモノになってるオレ。
パワードアーマーぽいメカニカルな身体。下半身は巨大なブースター。侍ぽい武人のような上半身は女性的な曲線のフォルム。両腕はマシンなブレード状になってる。
これ、見たことあるぞ。
アレだ、えーと、ゲームの……ゴッドイーター3に出てくるアラガミ。
『ハバキリ』だ。
ははーん、さては死ぬ直前までＧＥ３プレイしてたからだな。
オレは詳しいんだ。
ちょうど、ハバキリ倒しまくって素材集めてたから。
んで、死んだらそのハバキリに転生だか、憑依したっつうオチか。
あー、なるほど。完全に理解したわ（棒）

……なんでやっ!!?

アカン、アカンやんっ！
普通、転生とか憑依つったら、プレイヤーちゃうのっ!?
オレがじっくりとキャラメイクしたイケメンはどこいったんっ!?

あれっ!? なんで、アラガミになんの!?どうしてっ!? おかしない？ おかしいっ!! ガッデムッ！ジーザスクライシスッ!!
マジかよ神様……勘弁してくれ……
オレは頭を抱えて座り込む。
うごご……ゴッドイーターは昔から好きなゲームだけども、まさかの自分が敵キャララクターのアラガミになってしまうなんて。
ヤバイ、ヤバイ。マズいぞ。
しかもよりにもよってハバキリとはなんの因果だ。親の仇のように憎まれまくられたアラガミじゃん。散々文句言われて弱体化されたし。オレも頭にきて倒しまくったし。
なんてこった。オレ、間違いなくゴッドイーターに狩られる立場じゃん。
ああ……このままだとオレ、神機の材料にされちゃう……

瓦礫の都市群の片隅で、プルプルと縮こまり身を震わせる異形。
灰域が発生した頃から現れた新型種のアラガミ『ハバキリ』。強力な力を持つ女性の形を成した機械型のアラガミで遭遇数は少なく、あまり詳しくは生態は知られていない。
そんな新種のアラガミの周りに翼のような赤いマントを持つ獅子型の巨大なアラガミが数体取り囲む。
『ヴァジュラ』
獅子の四足と外観を持ち、強力な雷撃を操る凶暴なアラガミ。
目の前の珍しい希な餌を捕食するべく、ジリジリとにじり寄る。
……そうだ。『ハバキリ』には上位種の『アメノハバキリ』がいる。
ただ狩られるだけの存在ではならない。強くならねば。
進化だ。
オレは進化して強くなる。
狩られる側から狩る側に。

誰にも脅かされないぐらいに強くなるために。

取り囲むヴァジュラたちが、ビクリと反応してタタラを踏み後退する。

目の前の捕食対象の雰囲気が明らかに変わった。

ゆらり、と機械の身体を持つそれが幽鬼のように身を起こす。

ヴァジュラたちは、唸りを上げ巨軀に雷を纏い一斉に飛び掛かる。

オレは、緩やかに両腕の刃を構えた。

エネルギーの波動が有機物と無機物のメカニカルな肉体に満ち満ちる。

――――オレは、この世界で絶対に生きてやる。

2　力を呈せ

近未来、あらゆるものを「捕喰」する謎の生命体「アラガミ」にその大部分を食い荒らされ、世界は崩壊の危機にあった。

生化学企業フェンリルが開発した生体兵器「神機」を扱うことができる特殊部隊、通称〝ゴッドイーター〟だけがその脅威に抗う唯一の希望となっている時代――。

人類は未知の厄災『灰域（かいいき）』の発生により、未だかつてない危機に陥っていた。

空気中を漂う「灰域」は発生直後よりその領域を拡大し続け、接触する全ての構造物を喰らい、灰へと変えていった。フェンリル各支部は「灰域」の侵攻に為す術なく、フェンリルの統治体制は程なくして崩壊した。

辛うじて生き存えた人々は各地で通称「ミナト」と呼ばれる地下拠点を建造した。

さらに「灰域」への高い耐性を持つ「対抗適応型ゴッドイーター（Ａｄａｐｔｉｖｅ　Ｇｏｄ　Ｅａｔｅｒ）」通称〝ＡＧＥ〟という兵士を造り出し、地表を覆う脅威に抗い続けていた。

振り下ろされる電光の刃が強靭な外骨格を両断する。
ドリル状の腕ごと袈裟懸けに断ち切られたアラガミが断末魔を上げて倒れ伏す。
アラガミを屠るは極東の古代戦士であるサムライを彷彿とさせる異形の存在。
脚部には鎧袴のような機械的なブースターユニット。武者兜のような頭部。
胸元は豊満な双丘。括れた逞ましい腹筋の腰。未だバチバチとエネルギーの余波を燻らせる二対の禍々しい両腕と同化した大剣。
『ふう……バルバルス堕天種も、なんなく倒せるようになったな』
異形の戦乙女を思わせる妖しくも美しさと勇ましさを併せ持つソレが機械的なノイズを発する。人間には到底聞き取れない言語だ。
そして腕と一体化したブレードを構えると、上下に刀身の刃が割れて巨大な生物の生々しい顎門に変形し、倒したアラガミの亡骸に喰らい付かせた。
『……うむ。よしよし、また新たなる形態変化が出来るようになったぜっ！』
アラガミを捕食し、新たなる力を感じたオレはブレードにエネルギーを送り込み、その形状を変化させる。
硬質な刃は瞬く間に変質し、螺旋状の鋭利なフォルムにチェンジした。
『キタ――――ッ！　男のロマンッ！　ドリルッ!!　カッコいいっ!!
これで天元突破出来るっ!!』
オレは変化させた巨大ドリルをギュリンギュリンと回して、そこいらの岩棚を破壊して穴を開けまくる。
『いやぁ、アラガミの身体って凄えな。捕食対象のいろいろな特徴を取り込めるんだからなぁ』
調子に乗っていたオレは油断して、いつもやってる索敵を忘れていた。

普段から気をつけていたことを失念していたんだ。

ゴッドイーターの存在を。

＊＊＊＊＊＊

「……目標のアラガミを捕捉。個体名『ハバキリ変異種』。ターゲットはこちらに気付いていない。指示を仰ぐ」

『……そのままターゲットを討伐しろ。ハバキリ自体、稀有な存在だが、ヤツは中でも特別だ。コアは貴重なサンプルだ。なんとしても入手しろ』

岩棚の影に身を潜めるは両腕に腕輪を装着した武装したゴッドイーター数名。

”ＡＧＥ”

虎視眈々と補足対象のアラガミの動向を伺う。

「……了解。善処する」

彼らは、仲間同士でアイコンタクトすると神機を携え一気に隠れていた場所から躍り出た。

『!!!!?』

ドリルで遊んでいたら、いきなりゴッドイーターたちが襲い掛かってきた。

しまった！　索敵忘れてたあっ！　コイツらこんな距離まで近づ

いていたのか！
ステルススキル持ってやがるな、ちょこざいなっ！
正面から二人、ショート使いとバイティングエッジ使いが斬り込んでくる。
オレはすかさずブレードで薙ぎ払い牽制し、ドリルで地面を穿ち破片を撒き散らす。
遠方からスナイパーでチマチマ狙撃してくるヤツがいる。ウザい。
オレは背中から『クアドリガ』から捕食したミサイルポッドを生やしてミサイルをかましてやると、慌てて逃げる。
連続でばら撒かれるミサイルの雨から逃げる神機使いたち。
ふと、上から重圧感を感じ、両腕をクロスし『ボルグカムラン』の盾を形成した瞬間、ハンマーが降ってきた。
けたたましい重低音と金属音が響く。
ハンマー使いか。めんどくせーなっ！　生意気に真上からブーストかましてオレを押さえつけようとしてくる。
周囲のゴッドイーターどもが、チャンスとばかり足止めされたオレに一斉に群がってくる。
甘い。甘味スイーツ、スイートレーションより甘い。
オレは全身から赤いエネルギーの力場を発生させる。
活性化だ。
赤い波動を咄嗟にガードし耐えるゴッドイーターたち。
さらに追い討ちに背中から蠍の尻尾を生やし突き刺し攻撃、大回転で距離を離し『ネヴァン』の咆哮。
耳をつんざく金切り声が渓谷に谺する。
すると、周囲の岩山を超えて小型のアラガミどもが続々と集まってきた。オウガテイル、ザイゴード、コクーンメイデン、マインスパイダー、アックスレイダー。
たちまちのうちに乱戦状態。誘引成功。中型以上は倒してしまったので雑魚しか呼べなかったが、十分だ。
面食らったのは神機使いたち。
何処からか蟻の群れのごとく出現した雑魚に群がられ対処に翻弄

される。
オレは小型アラガミと揉み合う神機使いもろともに『ヴァジュラ』の雷球と放電フィールドをお見舞いしてやる。
ガードと回避を駆使して凌ぐ神機使いたち。
甘い。甘味スィーツ、アンプルだんごより甘い。
ブースターを加速、間合いを瞬時に詰めて牙突、唐竹割り、居合斬りで小型アラガミごと斬り飛ばす。
吹っ飛んだところで腕を厳つい砲身にフォルムチェンジ。
波動砲。
青白い電磁スパークのエネルギー波が駆け抜けて、直撃した小型アラガミどもは消し飛び、まともに喰らった神機使いたちはピヨピヨと頭に星をぐるぐるさせてスタンする。
『オレをそこらのアラガミと一緒にするんじゃねぇよ』
ブレードを横薙ぎに構えて、エネルギーを集約し溜める。
神機使いたちの顔が青褪め、絶望感に染まるのが解る。
そして無慈悲に解き放たれた刃。
一閃。

＊＊＊＊＊＊

「……ターゲットロスト。補足範囲から離脱。ＡＧＥ各員行動不

能。生命反応は有り。直ちに回収班を出動」
大型トレーラー内でコンソールモニターを忙しなく操作する者たち。
「チッ……また逃げられたか。忌々しいアラガミが。私の研究を邪魔しおって……っ！」
白衣にメガネの痩せた男がモニターを睨み付け愚痴を零す。
「……まあ、いい。戦闘データは収集出来た。次は逃がさん」
メガネを光らせ、犬飼は呟いた。

3　潜む恐怖

すべてが氷に閉ざされた廃虚。
凄まじい咆哮が響き渡る。
蒼い竜麟を幾重にも刀傷で刻まれた巨大なアラガミが地鳴らし、倒れ伏す。
『カリギュラ討伐終了。これで灰域種、灰嵐種以外はだいたい喰らったな』
女武者の姿を持つアラガミが倒したアラガミのコアを捕食する。
『……最近、やたらとゴッドイーターに喧嘩吹っかけられるんだよな。オレから神機使いにちょっかいかけたことなんてないのに』
一応、間違えて殺さないように手加減しながら戦って、隙あらば戦略的撤退している。捕食もしない。人間相手にリアル捕食はヤバいから。
神機使いなんかに恨まれたら厄介だ。ヤツら躍起になって地の果てまで追いかけてくるだろうし。懸賞金かけられて何処その、ひと狩りいこうぜっ！　みたいにハンティングされるのはゴメンだ。
『……だいぶ力を蓄えた。これなら大型灰域種と戦えるだろ。この前、渓谷の深い谷間の水底で沈んでいたプロトタイプオーディンの残骸を偶然発見して捕食出来たのはラッキーだった。槍展開無双攻撃を覚えたし、そろそろイケるだろう』
灰域種とは、『ゴッドイーター3』に登場し、世界を再び危機に陥れた新種のアラガミである。
一般人はおろかゴッドイーター、従来のアラガミでさえその場に居

るだけで死する危険地帯「灰域」と呼ばれる地帯に適応した進化したアラガミ。
攻撃を受ければ掠り傷でも急速に肉体を侵食されて死に至る桁外れの捕喰能力、中型種ですら一般アラガミの大型種を圧倒する戦闘力、そして特異な捕喰攻撃によってゴッドイーターの感応能力を奪い、自らのオラクル細胞を爆発的に活性化させる……つまり、ゴッドイーターに見られる「バースト状態」に近しい状態となることで飛躍的に戦闘力を強化する特性を持つ事などから、その危険性は「即死不可避」と称され、従来のアラガミとは一線を画す脅威となっている。

これらに対抗出来るのは、灰域と灰域種の攻撃に耐性を持つ新型の対抗適応型ゴッドイーター「ＡＧＥ」のみとされており、その脅威は留まるところを知らない。
このゲームの台詞を引用するなら「一個大隊でも小型の灰域種相手に勝率五割以下」とされており（ただし、小型の灰域種は劇中未登場）、基本は生息地を避けて通るか逃げるかしか手はなかったが、主人公たちＡＧＥのチーム「ハウンド」がラーをはじめとする灰域種の小隊での討伐に成功。決して勝てない相手ではなくなった。
ただし、現状ハウンド以外で灰域種と戦える部隊はほぼ存在せず、そういった部隊はハウンドが戦闘で集めた灰域種の情報をもとになんとか対応している模様。
すると、凍り付く施設に尚、凍えるような冷気と殺気を持つ気配がもの凄い速さでこっちに向かってくるのを感知した。
きたきた。ヤツの縄張りで散々に餌のアラガミを横取りしまくってやったから相当ブチ切れてるな、これ。
ズッドオオオンと壁を破壊して突貫してきたのは、真っ白なホワイトライオン。灰域種バルムンク。
真っ赤な眼光を光らせ、ゾイドっぽいアラガミが真っ直ぐにオレに向かって駆けて来る。
さあて、先ずはコイツを喰って肩慣らししますかね。

＊＊＊＊＊＊

「……なんだこのアラガミのデータは？　何処で手に入れた？」
片目に傷のある白髪の偉丈夫が資料を訝しげに見やる。
「ふふ、グレイプニルの研究データからちょっと拝借しましてね。実に興味深い案件だったもので、貴方にお知らせしようかと思いまして」
ローブを深く被った怪しげな人物。長い銀糸の髪、若い女の声だ。
「ハッキングか。相当腕の立つ、もしくは命知らずか。幾らだ？」
「いえいえ、お代は結構です。ただ私は貴方ならその研究データを役に立てると見込んでお渡ししたに過ぎません」
ローブの人物はさも当然ばかり、謝礼を要らないという。
「……何を企んでいる？　このデータが外部に流出したならば少なからずも影響を与えることだろう」
ギロリと剣呑な眼差しで睨む白髪の男。
「……ふふふ、貴方の「例の研究」に役立つと良いのですが――

―」
男はいきなりローブを掴み取り引き剥がす。
「なんだと……？」
だが、ローブの中身は何者も存在していなかった。
「……あの声、聞き覚えのある……嫌な感じがしやがる……」
ソーマ・シックザール、今はアインと名乗る男は抜け殻のローブを握り締めて、渡された資料を見て、そして夜空に浮かぶ白く丸い月を見上げた。
「……また、何か起きるというのか？」

＊＊＊＊＊＊

「まんまるお月様♪　まんまるお月様♪　美味しそうなまんまる形♪」

瓦礫の鉄塔の切っ先に真っ白な幼い少女が腰掛ける。
廃虚の足元には無数の大小のアラガミたちが伏せている。
まるで主人に頭を垂れる従者のように。

「月も美味しそうだけど、コッチを綺麗に片付けてからだね♪」

獅子の鬣のような銀髪の少女がニヤリと無邪気に獰猛に笑った。

4　威権の調停者

炎を身に纏う半身が球体の巨体を持つ赤いアラガミが吠え、両手から紅蓮の火焔の塊を敵対者に投げ放つ。
真っ赤な大口を開け歯向かう輩を喰らわんと。
だが、目にも留まらぬ速さで繰り出された剣刃が文字通り真っ二つに両断してしまう。
驚愕する灰域種アラガミ、ラー。
あり得ない。この自分がここまで追い詰められるとは。
眼前の太々しく両手の大剣をかざす余裕綽々気なアラガミを憎々しげに睨み付ける。
黒塗りの重厚な三日月鎧兜に刺々しい鋭利な段平甲冑袴姿。
人間のメスを模した流線型の華奢な肉体。
己れの餌場を尽く荒らす不届きな厄介者。
許せん。許すものか。その肉片、一片足りとも残らず食ろうてくれる。
噴炎を迸らせ、激昂するラー。
『……おー、おー、めちゃくちゃ激おこやんけ。マジ切れプンプン丸ですかあ？　ラーさんや』
オレはダブルブレードをかかげて嗤う。
正直言って、灰域種はもうオレには役不足だ。
あれからオレは灰域種を喰らい続け、ついに念願の進化をした。
今のオレは『アメノハバキリ』だ。
それも特別なヤツだ。様々なアラガミを捕食してきたオレはそんじょそこらのアラガミとは一線を画す存在だと自負出来る。
昔、ゴッドイーターシリーズのゲームにいたアラガミ、ヴィーナス

みたいなものかな。アイツもいろいろなアラガミ喰って進化した特別なアラガミだ。
ちょうど女同士だし、似ているかも。
まあ、オッパイもデカさを増してバルンバルン派手に揺れまくるから、胸部装甲で押さえてる。
ラーが狂おしい雄叫びを上げ、瞬間移動しながら突っ込んでくる。
『はいはい。今すぐ喰ってやるからイキって騒ぐなよ。弱く見えるぞ』
オレは両手の大剣を構えて、まるで料理のカトラリー、フォークやナイフを扱うように優雅に軽やかに振るった。

＊＊＊＊＊

「……ヤベエな。ありゃ絶対に手を出したら駄目なヤツだ」
「ユウゴもやっぱそう思うか？　オレもさっきから身体の震えが止まらねーんだよ……！」
「アレは危険過ぎるアラガミだな。見た目はアメノハバキリだが、生態は全く異なるイレギュラータイプだ。とても興味深い」
黒髪の赤ジャンパーの青年、金髪の青いノースリーブの青年、赤緑のチェック柄の長い黒髪の女性が廃虚となって久しい教会の物陰から様子を見る。
「……アイツはこちらから手を出さない限り攻撃はしてこない。

もっとも交戦したとしても命までは取らないだろうがな」
片目に傷のある年長者の青年が付け加える。
「……それにとっくにコチラに気付いてる」
青年が言うように『アメノハバキリ変異種』が倒した灰域種を捕食しながらもコチラにジッと視線を送っている。
「マジかよ。じゃあ居場所バレてんじゃん！　隠れてても意味なくねえっ!?」
「落ち着けジーク。アインさんの話聞いてたか？　こっちが手を出さなければ奴さんは大丈夫、らしい」
「つまりアレは理性と自主性を併せ持つ知的生命体なのだな。益々以って興味深い存在だ。詳しく生態を調べたい」
「ルルの言う通りだ。アイツは普通のアラガミじゃない。コンタクトが取れるかもしれない。フィムのようにな」
アインと呼ばれた青年が真っ白なノコ刃状の大剣を担ぎ、教会の物陰から姿を現す。
「……正気か？　いくらなんでも危険じゃないか」
「なにかあったら援護は頼む。ま、恐らく大丈夫だと思うが」
片目に傷のある青年はゆっくりと対象のアラガミに近づいていく。
「……こんなときに相棒がいないのが堪えるな」
ユウゴは未知のアラガミに接触しようとする仲間を見守りつつここにはいない信頼たる心強い相方を想う。

＊＊＊＊＊＊

なんかコッチをさっきからチラチラ見てくる人間たちがいる。
闘う気配は今のところ感じ取れないからほっといてるけども。
三人はＡＧＥ。一人はノーマルゴッドイーター。
ん？　あれ？　なんだこの感じは……
なんか既視感がある妙な気配が……
人間なのに自分らアラガミと同じような感覚。
オレが奇妙な気配に訝しんでいると、廃教会からひとり此方に向かって歩いてくる人物がいる。
白髪に白いコートに白いノコギリのバスターブレードを肩に担いだ褐色肌の人間。
あれ？　この人、何処かで見たことあるような……
「お前、俺の言葉が理解出来るか？　こちらに攻撃する意思はない」
そう言って神機を傍らに突き刺し手放す。
正気か？　アラガミ相手に生身で立ち向かうつもりか？
片目に傷あるイケメン過ぎる兄ちゃん。
あっ、この人、ソー……いや、アインさんだっ！
『アラヤダっ！　無印時代からお世話になってる推しメンっ！　まさか本物に出逢えるなんてっ！　どーするっ？　どーしよっ！　あわわわ……』
オレはこのゴッドイーターシリーズの中核を担うキーキャラクターの登場に感情が昂りオロオロしてしまう。
「……どうした？　怖がってるのか？　オレは何もしない。落ち着いてくれ」
機械的なノイズをギーギー鳴らすオレ。アインさんがアラガミのオレを心配してくれてるうっ！　はあ～、やっぱメインキャラは貫禄が違うぜっ！
このとき、オレは変なテンションで舞い上がっていたせいでまたやっちまったんだ。
索敵を怠った。
「待て。貴様ら。クリサンセマムのゴッドイーターだな？　そのアラ

ガミは我々の獲物だ。大人しく引っ込んでいろ」

唐突に現れた別のゴッドイーターたちが神機を携え現れた。

5　破壊の主

「そのアラガミ『アメノハバキリ変異種』は我々グレイプニルが責任を持って対応する。お前たちミナトに属するゴッドイーターは速やかに撤退しろ。これは命令である」
突如現れたグレイプニルを名乗るゴッドイーターの集団が一個師団ズラリ。
軍隊染みた統制を伴ない神機を手に命令してくる。
なんだコイツら。何かワケワカラン理不尽極まりない頭悪いこと抜かしてやがる。
ん？　コイツらの軍服見たことある。
あっ、思い出した。いつもちょっかいかけてくるヤツらだ。なるほど。コイツらグレイプニルだったのか。
「グレイプニル所属のゴッドイーターだと？　そのグレイプニルがただのアラガミ一匹だけにこれだけ大所帯とはな」
アインが鼻で笑い皮肉げに答える。
「ふん。ソイツはただのアラガミではない。貴様らのような凡雑な神機使いには手に余る相手だと言っている。生命を粗末にしたくなければ、大人しく引き下がるがいい」
隊長だろうガタイがいい軍服の厳つい神機使いが高圧的に見下す。
「誰が凡雑だっ！　テメエらよりよっぽど場数踏んでるつーのっ!!」
ブーストハンマーを引っ提げてジークが鼻息荒く走ってやってくる。
「ああ、確かにこの人数でアラガミ一匹相手するとはキナ臭い。何かあるとしか思えないな」
ロングソードを担ぎ、ユウゴが訝しみながら、駆け寄る。

「こんな貴重なアラガミをどうするつもりだ？　また良からぬ実験でも企んでいるのだろう」
　ルルがバイティングエッジを構えて胡乱げにグレイプニルの集団を睨む。
「ウチは少数精鋭なんでな。クリサンセマムの鬼神を知らないわけじゃないだろう。あんたら」
　アインが意地悪く口をにやりと歪ませる。
　クリサンセマムの鬼神。
　そう聞いて、たじろぐグレイプニルの神機使いたち。
　クリサンセマムの鬼神って主人公のことじゃんっ！　いるのか、主人公っ！　アインさんいるからもしかしてユウゴたちもいるのかと思ったらいたし。生の主人公とフィム、クレアちゃんやイルダさんに逢えるかも？　テンション上がるうっ！
「くっ……だが、鬼神の姿は見えないぞっ！　この場にいない英雄など痛くも痒くもないわっ！　構わん、作戦を開始しろっ!!　ターゲット『アメノハバキリ変異種』鹵獲せよっ!!」
　グレイプニルのゴッドイーターたちが勝手に戦闘を開始する。
　そしてオレに向かい神機をそれぞれ構える。
　なんだなんだ？　結局は闘うのか？　主人公はいないの？　アインさんたちはどないするの？
　キョロキョロするオレを取り囲み、陣形を組むグレイプニル勢。
「コイツらマジで戦闘おっ始めやがったっ！　どーするよっ!?」
「……どうせ、はなからそのつもりだったんだろうぜ。アイン、ヤツらの言う通り撤退するか？　それとも……」
　ジークが慌てるが、ユウゴは冷静に状況を見据える。
「撤退はしない。だが、ヤツらの自信満々さが引っかかる。あの変異種の強さはヤツらも見ていたはずだ。灰域種を安易と駆逐する様をな」
「なるほど。一旦アイツらをけしかけて出方を見るのだな。手の内を探るのと漁夫の利も合わせた狡猾な作戦だ」
　アインの言葉に頷くルル。

アインたちは距離を取り、グレイプニルのゴッドイーターたちと渦中のアラガミとの成り行きを見守ることにした。
『はぁ～～～。アラガミってだけで目の敵されんの勘弁して欲しいなぁ～～～。毎回毎回。こっちは人間襲ったことなんて一度もないのに』
ため息を吐くオレ。人畜無害１００％アラガミ印なオレをハントするべく神機使いたちが次々に攻撃してくる。
仕方ないな。とりあえず軽くコイツら蹴散らしてアインさんたちと話の続きしたい。
まずは、この無礼な有象無象の神機使いどもに進化したオレの力を見せつけて”わからせ”る必要がある。
オレは半機械の肉体をフル駆動させ、戦闘態勢に移行する。

＊＊＊＊＊＊

『アメノハバキリ変異種』
それが確認されたのはごく近年。それまでのハバキリ変異種とは一線を画す存在。接触禁忌種指定アラガミ。
進化したアメノハバキリの亜種、あるいは変異体と思われる。まるで闇色の鋭角な甲冑をその身に纏ったような妖艶な女性体の半身を持った戦士、騎士の姿を模す。
ハバキリ変異種が数多の灰域種アラガミを捕喰し昇華したという情報があるが、真偽は不明。自然災害などの外的要因によって変異したとの見方が現在は有力である。

攻撃力、機動力ともにアメノハバキリを大きく上回り、神出鬼没の鋭い斬撃は正に迅雷を想起させる。一瞬の油断が命取りとなるため常に警戒が必要。
またあらゆるアラガミを捕食したためか、様々な特徴的かつ多彩な戦闘方法を用いるため思わぬ攻撃に要注意。
その異能性は驚嘆の一言であり、さらに信じられないことにまだ進化途中であると一部の研究者は提言している。
しかしながら積極的に人間を襲うことはなく、これまで被害は報告されていない。これは偏食志向の対象が人間以外と推測されるが定かではない。
だが、襲われた場合はその限りではなく、絶望をその身に刻むだろうことは難くない。

＊＊＊＊＊＊

「各自散開しろっ！　一箇所に固まるなっ！　狙い撃ちされるぞっ!!」
「なんだコイツっ!?　情報とまるで違うぞっ!!　デタラメな強さだっ!!」
「オペレーターッ！　状況をっぐわあああああッッッ!!!」
阿鼻叫喚。

戦場はまさに地獄さながらの有り様を呈す。
凄まじい衝撃を伴ない、空中から高速で滑空するアメノハバキリ変異種。
背中のウィングブースターを加速させ、幾重にもミサイルと雷球の機雷を雨あられとバラ巻き絨毯爆撃する。
劣勢の中、果敢に挑む神機使いたち。
『……戦いに敗れ、欲するものが手に入らなかった場合、挫折感と敗北感を味わい傷つき…そして次なる戦いのとき「恐怖」を感じることになる……オレは「恐怖」を克服することが「生きる」ことだと思う……』
スパークする雷撃と爆撃と熱波の応酬。逃げ惑い、戦い、飛来するブレードが薙ぎ払われ、ひとり、またひとりと戦闘不能に追い込まれる。
『世界の頂点に立つ者はッ！ほんのちっぽけな「恐怖」をも持たぬ者ッ！わかるかっ神機使いどもッ!?オレはッ！安心を得るためにッ！生きるッ!!!』
オレは『バルムンク』のキャノンの砲身を肩から生やし、電光弾と『ラー』の炎熱球をバカスカぶっ放して神機使いで射撃シューティングを行う。
『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァーーーーッ!!!!』
縁日の的当て景品のように喰らった端から神機使いたちは面白いようにスタンしまくるので、すかさず『アヌビス』の鉤爪ブレードでぶった斬りまくり無双し、舐めプする。
『ちょっと前にアラガミの身体になったが、これほどまでにっ！なじむ、実によくなじむぞっ！最高に「ハイ！」ってやつだアアアアアアハハハハハハハハハハーッ!!!』
這いつくばりなんとか逃げようとした神機使いを『ヌァザ』の触手でぐるぐる絡めとり、『ドローミー』の醜悪な顎門を形作ってたっぷり威嚇してやる。
『「勝利して支配する」！それだけが…それだけが満足感（ゲス顔）っ！』

悲鳴を上げて泣き叫ぶ拘束された神機使い。食われるとでも思ってるのか？　オレは人間は喰わない。まったく実に哀れで情けない。死なない程度にこっちは加減して遊んでやっているのにこの程度か。

ぎゃーぎゃーうるさいからキュッと締め落とし静かにしてポイっと捨てる。

ビカッビカッと閃光がオレを包む。眩しい。またスタングレネードか。バカのひとつ覚えにも程がある。トラップとか状態異常はあんまりオレには効かないけどね。

ドリルで穴掘って潜り、ウザいトラップごと神機使いたちをドッカンドッカン纏めて地面ごと吹き飛ばし蹂躙する。

『ＷＲＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹーーーッッッッ!!!!!』

遠距離から銃撃してくるヤツらとレーザーピットの光線でチュィンチュィンと撃ち合う。

いやしかし、腐ってもコイツらもゴッドイーターだね。半数以上壊滅してるのにしぶとく喰らい付いてきてるのは感心した。まあ、向こうはリンクエイドやエンゲージとかあるし。真にチートとはまさにプレイヤーであろう。

だけども、いい加減相手するのが面倒くさくなってきた。

キリがないので、ここいらで終わらせるか。

オレは、大規模なエネルギーの波動を空気中に集約させる。周囲に鋭い槍状の物質が旋回しながら次々と展開される。

そして、迸る炎柱ーーーー

ーーーー極衝撃の津波がすべてを飲み込んだ。

6　刺さる悪意

大気を揺るがす強烈な振動が怒涛のごとく押し寄せる。
「くっ……！」
アインたちクリサンセマムのメンバーはシールドを展開して衝撃の余波に耐える。
白塵が舞い上がる。凪いだ静寂とキンと痛む鼓膜は、轟音によるものだろう。
荒粒の砂煙（さえん）散り撒く視界と、唸り耳鳴る惑音が止み、徐々に正常さが取り戻される。
そして、垣間見た光景は、筆舌に尽くし難いものであった。
『はははははっ。見たまえ、ラピュタの雷だ。旧約聖書にあるソドムとゴモラを滅ぼした神の火だ。ラーナマーヤではインドラの矢とも記されているがね』

ノイズ交じりの甲高いアラガミの機械的な声が鳴り響く。
中央に憮然と佇むアメノハバキリ変異種。その周囲にグレイプニルのゴッドイーターたちが軒並みボロボロになって倒れ、地に伏していた。
死屍累々。
そう形容するのが相応しい惨状。
「マジか……あれだけの神機使い、ほとんど一体で倒しちまったのかよ……っ!?」
「……ヤバイやつだと思ってたが、コイツは想像以上にとんでも

ないバケモノらしいな」
「まだみんな息はあるようだが……まさか、あのアメノハバキリ変異種は、神機使いたちを殺さないようにわざわざ手加減していた？　というのか……っ」
ジーク、ユウゴ、ルルが肝を冷やす。戦っていたら自分たちがこうなっていただろうことは明白だ。
それに死者を出すことなく、結果はご覧の甚大な有り様だが、戦闘不能状態に陥れるパワー、テクニック、ポテンシャル、どれをとっても普通のアラガミには出来ない所業だ。
「……理不尽を体現したようなヤツだ。コイツの存在を知ったら、サカキのおっさんが泣いて喜ぶな」
アインは苦笑いする。理不尽なシチュエーションなど過去にいくらでも体験済みだ。これぐらいなんてことはない。
『はっはっはっ。どこに行こうというのかね？　まるで人がゴミのようだっ』
アメノハバキリ変異種が、まだ何とか立っている瀕死に等しい神機使いたちをゴミを掃くように軽く蹴散らす。
流石にここまで戦力差を見せつけられコテンパンにやられたグレイプニルのゴッドイーターたちが可哀そうになってくる。
戦闘を止めようかとアインたちが思ったとき、アメノハバキリ変異種の背後の砂塵の中から神機使いが現れた。恐らくドリルで抉った土砂に紛れ隠れていたのだろう。
『あ？』
鋭利なロングブレードの刃がアメノハバキリの背中を貫き、腹部から突出した。
「馬鹿めっ！　アラガミのくせに人間のように油断したなっ!!　喰らえ、化け物がぁッッッ!!!」
グレイプニルの軍人神機使いの隊長の男が吠える。刀身を捻り入れ、深々と突き刺した。
だが、
アメノハバキリ変異種の身体から、おどろおどろしい触手の群れが

一気に伸び上がり、グレイプニル隊長に身体に巻き付き中空に絡めとる。
「う、うわあああああっ!?　は、離せっ！　化け物っ!!」
『やれやれ……まあ、不意打ちも立派な戦術だ。命を遣り取る戦いに卑怯もクソもないからな』
触手を巻き付かせたグレイプニル隊長を少し強めに締めながら、オレは腹から貫通したロングブレードを見る。
『あーあ、乙女？　の柔い肌を傷モノにしやがって……お前ら人間には、オレの声は聴こえないと思うけど、これぐらい致命傷でも何でもないからな？』
腹を通過したロングブレードの神機がメキメキと音を立てて歪み、ひしゃげ始める。
「なっ!?」
驚愕する一同。
まるで咀嚼するように腹部に刺さった神機はたちまち砕かれ吸収されていく。
『オレは遺された神機も喰ってるからな。探せば割りと落ちてるんだよ、のこじん。要するにオレ自身が『神機＋』みたいなもんだ。それと、落ちてる神機なら誰のものでないだろ？　遠慮なく頂くわ』
刺さった神機も落ちてると同じだ（暴論）。神機を失った神機使いの末路？　んなこと知らん。
自分の神機を喰われたグレイプニル隊長が茫然自失となっていたが、突然に大声で笑い出した。
んん？　ショックで頭がおかしくなったか？
「くっくっく……お前が廃棄された神機を捕食しているのは調査済みだ。お前が今しがた喰らった神機は本来の私の神機ではない……それは、お前専用に調整された特別な神機だ……」
なに？　オレ専用？
グレイプニル隊長はしたり顔で笑いながらガックリと項垂れた。失神したようだ。
『なんだ……？　この食った、取り込んだ神機が……なんだって

――――』

　ドックゥウンッッッ

『ぐギぃっ!?』

　ドッグゥッ！　ドッグゥウンンッ!!　ドッグウウウンンンッッッ!!!

『ッッッ!!!?!!!』

　身体の真ん中から喩えがたい悍ましい感覚が襲う。

　歯を食いしばり、無いはずの心臓を掻き毟る。

　そこには『コア』がある。

　胸元のさらに奥にある厳重に格納されたブラックボックス。

　オレのオレたるアラガミとしての本体の部分。

　そこに何か得体の知れない異物が侵入してくる。

『ガァアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!?』

＊＊＊＊＊

　隠れるようにカモフラージュされたトレーラー。

　様々な複雑な機材が並ぶ車内。

「ターゲット侵食成功。偏食領域拡大。尚も侵攻中」

「パターンレッド。抗体細胞因子中和。オールクリア」
「……素晴らしい。やはり私は天才だ。散々手を焼かせてくれたな、アラガミめ」
犬飼はモニター画面に映るアメノハバキリ変異種を忌々しそうに見る。
「……天才たる私を更迭し、あまつさえ研究資金を打ち切り、研究施設すら放棄させられるなどあり得んっ！　なんたる愚の骨頂っ！　人類の宝であるこの頭脳の価値と偉大さを理解出来ないグレイプニル総統など私の方から見限る下賤な輩だっ！」
狂気。憤怒。自意識過剰。凡ゆる負の側面に呑まれ、それでいて自身すら見失った天才科学者の成れの果て。
「……はぁ、はあ、は、はははは……だが、私は返り咲く。すべての愚かにも私を見下した低脳どもに知らしめてやるのだっ！　この天才科学者、犬飼の名をッッッ」
「犬飼博士。まだ対象にさしたる変化は表れてはいません。観察経過を続けましょう」
犬飼の背後から場にそぐわない可憐な女性の声が聞こえた。
「お、おっと、失礼。これもすべて貴女のご助力のおかげですよ。ミス・ラケル博士」
犬飼が恭しく礼をする。
喪服の黒いサバランのドレス、薔薇のコサージュが添えられた鍔長のベルベットの帽子を被る車椅子の女に向かって。
「では、犬飼博士。私と一緒に見届けましょう。新たなる歴史の1ページが刻まれる瞬間を」
編み垂れから血のように濡れ光る真紅の瞳を覗かせて。

7　災いの足音

突然に苦しみ出したアメノハバキリ変異種。
一体何事か？
それまで斬られようが、撃たれようが屁でもないとばかり超然としていたはずなのに。
「あの神機のせいかっ……？」
アインは先程のグレイプニルの神機使いが突き刺した神機によるものだと予測し、それを確信に変える。
何故なら己れの中の荒ぶる神も騒めき暴れているから。

……クルシイ……ツライ……ニゲタイ……ラクニナリタイ……

オレは生前、特筆するほどの人間じゃなかった。
出不精で面倒くさがりで、ぶっきらぼうで。
それでいて外面は愛想良く、頬笑み、得意先の客におべっかを使う、しがない会社員の営業マンだった。
毎日毎日働いて、生活のため、家族のため、生きるためと自分を騙

し騙し日々を繋いできた。
平凡な何処にでもいる社会を構築するひとつの歯車。
不平不満、内に秘めた怒り、形容しがたい不安を燃料にただ生きていく。
機械だ。
オレたちは、オレはマシーンだ。
壊れてもいくらでも換えが利く安いローカルな。
そんなオレはある日唐突に、たいしたこともない人生はリセットされ、メタリックなボディに成り変わった。
たまにやる好きなゲームの1キャラクターに。夢でもいい。喜ばしい限りだ。
だが夢は夢。ゲームはゲーム。現実は現実。
嬉しかった。
毎日が命のやりとり。
哀しかった。
食うか喰われるか。
嬉しかった。
弱いものは生き残れない。
苦しかった。
死んだら終わり。
楽しかった。
何が違う？
辛かった。
何が変わった？
結局変わらない。変わらないんだ。
何もかも。
――――ダッタラ、壊セバイイヨ。
えっ？

――壊ワシチャエバ、イイヨ。

壊す？　何を？

――ゼンブ、ダヨ。

全部？

――ソウ、ゼンブ。『ヒト』も『アラガミ』モ。

ゼンブ。

ゼンブ。

ゼンブ。ゼンブ。ゼンブ。ゼンブ。ゼンブ。ゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ

ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼンブゼ
ンブゼンブゼンブゼンブ。

——壊シチャエ。

頭を抱えて胸を押さえて苦しんでいたアメノハバキリ変異種が、ガックリと項垂れた。

両腕を垂らし、まるで電池が切れた玩具のように。

アインは膝を着いて自身の胸を押さえる。

「ぐうウウううっ!?」

「アインっ!?　どうしたっ!?」

ユウゴがアインに駆け寄る。
アインの頭の中にイメージが流れ込む。
真っ白な獅子の鬣を持つ少女。
紅い血の滴を塗り込めた瞳を輝かせ、微笑う。

項垂れていたアメノハバキリ変異種の身体がピクリと震えた。
プルプルと全身が小刻みに振動を始める。
ピシリと何かがヒビ割れるような亀裂の音が大きく響く。
――――アメノハバキリ変異種の背中から黒い泥状のナニカが噴き出した。

「……なんだよ、アレ……」

空を呆然と見上げるジーク。
「……灰嵐のときもヤバイとおもったが……アレはもっとヤバイ……」
ユウゴがアインを支えながら空をジッと見上げる。
「……アレは何という現象だ……？　空が、空が黒く染まっていく……？」
ルルもただ変わりゆく空を見上げるしか出来ない。
「ぐっ……！　だ、ダメだっ！　や、ヤツを、ヤツを止めない、と……っ!!」
アインはバスタードブレードのグリップを握り締める。
アレは危険だ。この世界に絶対に在ってはならない。
すべてを塗り潰す異なるモノ。

「!?」
振り返る、頭に天使の輪のような髪型の幼い少女。
遠く、空の彼方を見上げる。
「フィム？　どうしたの？」

呼びかける白いポニーテールの前髪で片目が隠れた女性。
「お母さん、私行かなくちゃ」
フィムと呼ばれた少女は強く決意した視線で母と呼ぶ女性を見詰める。
「……そう。ユウゴたちに何かあったのね？」
「うん。お空がね、泣いてるの。悲しい、痛い、辛いって。だから……」
女性はスッと少女の髪を優しく撫でる。
そして立ち上がり少女と同じく強い瞳で空を見上げる。
「……行こう、フィムっ！みんなのもとへ!!」
「うんっ！　お母さんっ!!」
それぞれ肩に三日月型の巨大な神機を担ぐ。
その出で立ちは、まさに親子。ふたりともそっくりだった。

8　悪魔の視線

「いったい全体何事なのっ!?　エイミーっ！　キースっ！」
　イルダ・エンリケスは焦燥を顔に浮かべる。
「わ、分かりませんっ！　ですが、強力な異常な密度の偏食場パルスが急発生して……こ、こんな、ありえない……っ!?」
　エイミーが忙しなくコンソールを操作しつつ、たじろぐ。
「……何が起きてるのか全然ワケ分かんないけど、とんでもないことが起きてるのは確かだよっ！　灰嵐発生時のエネルギー力場によく似てるけど、それとは全く別の、あ～～～～っ！　と、に、か、く、めちゃくちゃ凄いヤバイッッッ!!!」
　キースがモニター前で妙なハイテンションで混乱しながら叫んでいる。
「……こりゃ厄介だな。新たな灰嵐が発生したってことかねえ。ん？　この発生場所……おい、ここって、ユウゴたちとアインが一緒に調査に行ってる所じゃないのか？」
　リカルドがしかめ面し、腕組みしてモニターを見て、今いないメンバーたちの所在地に気付いたふうに言う。
「……まさか、彼らに何か……っ」
　イルダは過去に起きた世界を揺るがした事変の時と、似たような嫌な予感が拭えなかった。
　大災害。

＊＊＊＊＊＊

「各自、速やかに帰投しろっ！　ミナトの防衛に当たれっ!!」
「くそっ！　なんでこんな時に……っ！」
「動ける神機使いは詳細を調べて報告しろっ!!」
「何度も言っているっ！これは訓練などではないっ!!」
グレイプニルの施設会議室。
慌しく、貴族たちの間に情報がひっきりなしに行き交う。
「……大規模な灰嵐？　いったい何が……」
「クレアお嬢様、ここはフェンリル本部施設です。ここにいればなにが起きても安全でしょう」
ヴィクトリア家の執事が混乱の渦中にあるクレアに話す。
「……ええ」
ヴィクトリア家当主として取り乱すわけにはいかない。
でも、ゾワゾワするこの感覚は？　自分がゴッドイーターだからだろうか。
戦いに赴くような緊張感が身体から滲む。
「……みんな、無事かな……」
クレアの中にどうしようもないもどかしさが募る。

＊＊＊＊＊＊

「なんだ、この感じ……？　とてもイヤな気配だ……」

ニールは後進の指導のために、元朱の女王の構成員たちに実地訓練を行なっていた。

遥か遠方からドス黒いナニカが迫るのが解る。

これは、やり場のない怒りや不安や、憎しみ……？

かつての自分が内に秘めた暗い感情ともいうべき負のスパイラル。

自然とヴァリアントサイズのポールを握る手に力が籠もった。

闇。

その一言に尽きる。

空を覆う黒いナニカ。

地表の裂け目からあふれる間欠泉のごとく噴き上がるそれは、一匹のアラガミの身体から大量に漏れ出している。

まるで煮固められた血の溶岩流。

すすり泣くような怖気立つ濁流音。ゆらめくドロドロしたそれらは、うかつに触れたら一瞬で死をもたらすような途方もない深淵さと、狂気と、おぞましさを担って。

絡み合う樹木のように、乾き切った曇天を彷徨い枝を這わし、やがて空深く澱む流れる川は八つの巨大な大河となり、黒々とした影を伸び上がらせ、日を翳らせた。

空が割れた――――

その日、それを見たものはそう言うだろう。

立ち上がる瘴気は黒々と渦巻き、地上より伸び上がるは、長い八頭の首をもたげる黒い龍。

ゆるやかにのたうつ巨影に光は囚われ、陽は遮り、日蝕となり、死の匂いが満ちた天蓋を埋め尽くす。

昏い淀みから覗く、見るものを凍りつかせる、血の色に燃える巨大な眼。

十六の連なる紅蓮の瞳のどれひとつとして、慈悲を宿すものはない。

”憤怒”

この魔竜は世界を、すべてを憎んでいる。

誰もが言い知れぬ恐怖に立ちすくんだ。

人も、アラガミさえも、小石のひとつ、花の一輪に至るまで。

彼らは知った。

自分たちがちっぽけな取るに足りない矮小な存在であることを。

八つの首からけたたましい咆哮が暗闇の空に鳴り轟いた。

それは恐ろしくも物哀しい響きだった。

9　この胸にあるもの

ナガルルチシオハイノチノヒカリ

ヤミヨニトモルハイノチノヒカリ

空を縫うようにのたくる黒を塗り込め覆う八頭の龍。

赤き眼差しで地上の生きとし生けるものを睨(ね)めつける。

「は、はははははは……す、素晴らしい……なんだ、あれは……私は夢を、悪夢を見ているのか……？」

引きつった渇いた笑いを浮かべる犬飼。

「……我想う故に我有り……この世界が胡蝶の夢というのもあながち間違いではないのかもしれませんね」

車椅子の、ラケルを自称する美女がモニターに映る8本の首をくねらせる禍々しい魔竜を見詰める。

その瞳にモニターに映る魔竜と同じく赤色を燈らせて。

＊＊＊＊＊＊

「気のせいかな……オレ、さっきからずっと見られてるような視線を感じるんだけど……」
黒い八頭の巨大な龍をボンヤリ見上げるジーク。
「奇遇だな……オレも同じだ。熱いどころか薄ら寒い視線を感じるぜ」
ユウゴもジークと同様に禍々しい魔竜を見上げる。
「……アラガミを観察するのは好きだが、逆に観察されるというのは、妙な気分だ……」
紅い双眸に射竦められ微動だにしようもないルルの額に汗が流れる。
震えが止まらない。
本能的な、ゴッドイーターの、アラガミ細胞が畏怖している。

蛇に睨まれた蛙。

「……気をしっかり持て。呑まれるな。アレに心まで喰われたらおしまいだ」
バスターブレードを握りしめて立ち上がるアイン。
その瞳は迷いなく巨軀をうねらす魔竜を捉えて。

「……おい、まさか。アレと闘おうっていうのかっ!?」
ユウゴが信じられないと、アインの肩を掴む。
「!?　……あんた、震えて……」
「……情けない。久々のとんでもない大物を前にして、ひよっちまったようだ」
苦笑いを浮かべるアイン。
己れのうちの荒ぶる神すら警告を連打する。
それほどまでに、この目の前に鎮座する異形は危険過ぎる存在であると訴える。
「……今、ヤツを足止め出来るのはオレたちしかいない。悪いが付き合ってもらうぞ」
当たり前のように言うアイン。
まるでいつものようにアラガミ討伐のミッションに挑むように軽々しくバスターブレードを担ぐ。
そんなアインの悠然とした後ろ姿に呆気にとられるユウゴたち。
そして、
「……ふっ、オレたちを誰だと思っていやがる。どんな強い厄介な相手だろうと、どんな困難な高い壁でもオレたちは常に乗り越えてきたんだ。イケるさ――――だよな?」
ユウゴが不敵に笑い、信頼する仲間たちに顔を向ける。
「……まったく、いつも思うことだが、ユウゴは人遣いが荒いな。まあ、それに付き合う私たちも大概だが」
「……へっ!　んなの昔から毎回だぜ。いい加減慣れたっつーの」
ルル、ジークがにやりと太々しく笑いを浮かべる。
「と、いうわけだ、アイン。オレたちはいつでもヤレるぜ。伊達に鬼神の側で常日頃戦ってないからな」
ユウゴがアインに自信に満ちた眼で答える。
「……そうか。そうだな。ならいつも通りにいくか。オレたちはゴッドイーターだからな」
アインが隻眼の片目を閉じ、ゆっくり開く。

そこには強い決意を宿した歴戦の頼れる戦士の輝きがあった。
アイン、ユウゴ、ジーク、ルル。
四人のゴッドイーターが神機を構える。
立ち向かうは目前にそびえる空を見上げるほどの巨大なアラガミ。
８本の首をもたげ揺らめかせ、小さな敵対者を血濡れた眼差しで見下ろす。

＊＊＊＊＊＊

白い。
真っ白な空間。
何もない。
白墨（はくぼ）の世界。
見渡す限り延々と境なく続く虚ろな次元。

『ここは……何処だ……？』
オレは白い何処か判らない謎の空間にいた。
見慣れたアラガミの肉体。
アメノハバキリのメカニカルな身体。
いや、相変わらずデッカいおっぱいだな。ちゃんと張りがあって柔らかい。女として誇らしくもある。って、オレどうなった？　なんか記憶が曖昧だけど。
周りを見渡しつつ感応レーダーで探ってみるが、どこまでもただただ白塗りの空虚な領域が広がっているだけだった。
『そういやオレ、腹を神機でブッ刺されたんだっけ』
刺された腹を撫でる。
傷も無くてツルツルした肌。

『……おかしいな。なんか違和感を感じたんだよなあ、あの時。神機を取り込んで、暫くしたら、ナニカが身体に入り込んで――――』
そうだ。オレは神機の中のナニカに身体を侵食されて……
「驚いた。まだ自意識が残ってるなんて」
「!?」
突如背後から聴こえた幼い少女の声。
慌てて振り返る。
そこには白い空間内により白く映えるワンピースの白銀の鬣を持つ少女が佇んでいた。
真っ赤な双眸で此方を見据えて。

１０　転がる運命

「ちゃんとコアは侵食したはずなのに。まだ意思があるなんて……」

白銀糸の獅子のようなフサフサした鬣の髪を持つ。ワンピースぽい姿の真っ白な少女がオレを不思議そうに小首を傾げ見てくる。

なんだこの子？

さっきまで何処にもいなかったはずだが、何処から現れた？

『君は誰だ？　此処が何処か知っているのか？』

白い少女はひと息吐き、話し出す。

「その夜、眠りについた子供たちは朝になっても目覚めなかった……二つめの朝……三つめの朝……四つめの朝にして、人々はようやく異変を自覚した」

まるで歌劇を歌唱するように。

「これは呪いだ……子供たちは呪われてしまった……あの魔女によって」

両手を掲げてワンピースの裾を翻し、くるりと廻る。

「あるひとりの勇敢な少女が夢の国の女王に直訴するために影の世界に赴くことにしました。お供にカカシ、ブリキの木こり、ライオンを連れて」

少女は唄う。

「一匹の意地悪い猫が案内人となり、少女は影の世界の扉を潜りました。するとどうでしょう。目の前に、どこまでも続く大きな螺旋階段が現れたではありませんか」

これは、不思議の国のアリス？　オズの魔法使い？　しかし、変則的な改変がなされた内容だ。

「少女は先に立って階段を降りました。ここはもう夢の世界だよ。気を付けることだね。夢への旅は、それを視る人間のココロの旅だから。闇の奥から、不気味な猫の笑い声が聞こえてきます」
少女の紅い瞳が艶を帯び光る。
「深い深い夢の底。忘れ去られたオモチャ箱。手足のもげたヌイグルミ。崩れ落ちた積み木の城。ビスク人形は歌を久しく絶えて、錆びたオルゴールのゼンマイを巻くものもいない」
少女がワンピースのスカートを摘み、慇懃無礼に礼をする。
「ここは世界でもっとも悲しい場所。子供たちの壊れた夢が流れ着く彼岸。仄暗き夢の主にして影の国の女王の視る悪夢の玩具箱」
オレは少女の話に肝心なオチがないことに気付いた。
『……眠ったままの子供たちは、結局どうなったんだ？』
「子供たちは目覚めないよ、眠り続けるだけ。だってこれは悪い夢だもの。最初からずっと夢を見ているだけ。永遠に醒めない悪夢の続き」
少女はいつの間にかオレの真正面に立っていた。
「だからキミも眠って？　ずっと夢を見たまま、世界が終わるその日まで……」
少女の白い手がオレにゆっくり伸びる。
紅い瞳がオレを覗き込む。
瞬間――――
オレのブレードが白い少女を叩っ斬った。
「あれ？　なんで抵抗出来るのかな？」
背後から少女の声が聞こえてくる。
振り向き様にブレードを斬り上げる。
しかし少女はそこにはいない。
『……そうやってまたオレになんかするんだろ？　見た目に騙されるものか。紳士諸君が悦びそうな美幼女だけど。罠だってのが丸分かりだ』
オレの中のアラガミの細胞が告げる。この少女に気を許してはならない。この少女は見ためは可愛いが、獰猛な獣であると。羊の皮を

被った擬態した狼、否、ライオンだ。
「なんだ、気付いてたの？　へぇ、ボクはてっきり意識もろとも捕食したと思ったんだけど……キミって面白いね……さすが『向こう側』から呼ばれた特異点なだけのことはあるよ」
少女が左右逆さまに空中に浮かんでいる。
『あー、こういう展開ってさ、大体パターン決まってるもんだろ。ここがオレの精神世界で、オレは謎の敵と戦っている間に現実世界がピンチになってる、とか』
「……ふうん。そこまで分かってるんだ。うん。キミの言う通りだね、ホラ」
逆さまの少女がくるりんと体勢を戻して空間を指差すと、大きなスクリーンが現れ映像が映し出された。

＊＊＊＊＊＊

高天原を追放された須佐之男命（スサノオノミコト）は、出雲国の肥河の上流の鳥髪に降り立った。箸が流れてきた川を上ると、美しい娘を間に老夫婦が泣いていた。その夫婦は大山津見神の子の足名椎命（あしなづち）と手名椎命（てづなづち）であり、娘は櫛名田比売（くしなだひめ）といった。

夫婦の娘は８人いたが、年に一度、高志から八岐大蛇（ヤマタノオロチ）という８つの頭と８本の尾を持った巨大な怪物がやって来て娘を食べてしまう。今年も八岐大蛇の来る時期が近付いたため、最後に残った末娘の櫛名田比売も食べられてしまうと泣いていた。

須佐之男命は、櫛名田比売との結婚を条件に八岐大蛇退治を請け負った。まず、須佐之男命は神通力で櫛名田比売の形を変えて、歯の多い櫛にして自分の髪に挿した。そして、足名椎命と手名椎命に、７回絞った強い酒（八塩折之酒）を醸し、８つの門を作り、それぞれに酒を満たした酒桶を置くようにいった。

準備をして待っていると八岐大蛇がやって来て、８つの頭をそれぞれの酒桶に突っ込んで酒を飲み出した。八岐大蛇が酔って寝てしまうと、須佐之男命は十拳剣（とつかのつるぎ）で切り刻んだ。このとき、尾を切ると剣の刃が欠け、尾の中から大刀が出てきた。そしてこの大刀を天照御大神に献上した。これが「草那藝之大刀」（天叢雲剣）である。

「……極東に伝わる神話だ。スサノオノミノコトが最初に所持していた剣、十握剣は別名、天羽々斬（アメノハバキリ）とも呼ばれる」

「そのアメノハバキリからヤマタノオロチが現れるとは、なんとも皮肉な話だな」

「アラガミの中から神機が出て来たのか？　変わってんなぁ」

「実に興味深い御伽草子だ。アラガミが多種多様な極東ならではの神秘性がある。私もいつか極東に訪れてみたいものだ」

アインの語る極東の神話に、ユウゴ、ジーク、ルルが黒燐の大蛇を見上げる。

その神話に擬（なぞら）えたかのごとく立ち塞がる巨大な魔竜。

天を穿つ恐るべきアラガミに立ち向かう神機使いたち。

神に挑むそれは神話の一端のような光景。

『……』

なんじゃこりゃあああああああああああああぁぁぁぁッッッ!!!?

白い世界にオレの絶叫が轟いた。

11　魂の鼓動

なんかバカでかい８本の首がある真っ黒な見るからにヤバイ大蛇がいるんだがっ!?
ななななな、なんだアレっ!?
どっから湧いて出てきたっ!?
ん？　よく目を凝らし見てみると、あの大蛇の身体の中心にオレがいるな。オレの身体、背中のほうがパッカーン割れて、そっこからニョロンニョロン黒い澱みがジャンジャカ噴き出していますねー。
うん。間違いない。あれオレから出てるわ。
『アイエエエ!?　ナニアレ!?　ナンデ!?　何か変なのおもいっきりオレから出てるんですけどおおおおおおッッッ!!!!!!』
明らかに自分の身体から出たらヤバイものが出てることに今のオレの顔は（(((（；゜Д゜）)))）になってる。
あんなの世界終了のお知らせじゃんっ!!
しかもさらに驚いたのは、そんな世紀末大怪獣大決戦に果敢に挑もうとしているアインさんたちゴッドイーター御一行様。
『（゜・ω・）』
ええええええええっ!?　何やってるの？　バカなの？　全然大きさ違うじゃんっ！　アインさんたち正気なのか疑うレベルだよっ！　ウロヴォロスよりデカいっ！　アラガミじゃないよ最早怪獣だよっ！　ウルト○マン呼ぶ案件だよっ！　もしくはゴ○ラっ！
パターン青、使徒ですっ！　エ○ァンゲリオン起動ッ!!　ドン引きですっ！
「……変なの。そんなに驚くほどのこと？　キミの中の破壊衝動を増幅して形を与えただけなのに」

白い少女がキョトンとする。
『……オレの中の？　やっぱりアレはオレから出てるんじゃんっ！　しかもお前の仕業かっ！　なんでそんなことしたっ!?　オレに恨みでもあるのかっ!!』
ブースターを加速させブレードで斬り込む。間違いなくこの少女がオレになんか如何わしいことをしやがった。Ｒ１８的な。
しかしブレードは擦りもしない。少女はまた別の場所に移動して回避している。
「アレはキミが望んでいるココロの一部を解放したんだよ。キミが願ったからボクは叶えてあげたんだ」
「願った？　オレが？」
「そうだよ。憶えてない？　すべてを壊すことをキミは願った。ボクはそれを現実に変えただけ。あの八つ首の龍はキミ自身の、本当の姿だよ」
少女はさも当たり前のように言う。
そう言えば、この少女の声に聞き憶えが。
あの時、グレイプニルのゴッドイーターに神機を突き刺され、その後何かがオレの身体の中に入ってきた。

――――ゼンブ壊シチャエ。
確かに聴こえた少女の声。
オレは少女の声に従った……？
『……オレのせいだってのか……？』
「思い出した？　キミが望んだこと。辛い世界はちゃんと終わるよ。大丈夫。これはキミの夢だから。キミはゆっくり眠っていればいいよ。ずっとずっとずっと――――」
茫然自失とするオレに邪悪な笑顔で近づく少女。
モニターを観るオレ。
すでに戦闘が始まっていた。

＊＊＊＊＊＊

黒い大蛇、ヤマタノオロチは長い首を揺らし大地を抉りながら引き伸ばす。
「くっ！」
ギリギリまで引き付け、寸でのところで躱しロングブレードを斬り付けるユウゴ。
だがあっさりと刃は黒い鱗に阻まれ微塵も徹さない。
「何だこれっ!?　硬すぎんだろぉっ!!　オリャアアアアッッッ!!!」
ブーストハンマーを打ち込むジーク。鈍い金属音が響いて跳ね返されてしまうが、ラッシュアタックで何度も殴りまくる。
「そもそもっ！　どこをっ！　狙えばっ！　いいかっ！　判らないっ！　ハァアアアアっっっ!!!」
バイティングエッジの二刀流で斬撃や刺突で素早く攻撃するルル。神機の柄を連結させて薙刃形態にモードチェンジし、黒蛇を斬るも芳(かんば)しくはない。
「それでもっ！　ここでコイツを止めるっ!!　ウオオオオオオオオオオオッッッ!!!」
バスターブレードを振り上げ、渾身のチャージクラッシュを放つア

イン。残光を描き打ち下ろされた極大の刀身が大蛇の頑強な鱗を砕き、刃が喰い込んだ。
イケるっ！
誰もがそう思った時、今まで相手にもしていないそぶりだった魔竜の頭がコチラをぐるりと向いた。
赤く燃える燐光の双眸。視線が交差するアイン。
「!!?」
――――巨大な頭が突貫して来た。
咄嗟にタワーシールドを展開する。
アインは凄まじい衝撃を喰らい吹き飛んだ。

＊＊＊＊＊＊

ヤマタノオロチの巨大な頭が突っ込んで来て、ガードしたアインが

盾もろとも伸びる首に彼方まで持っていかれた。
「なっ!?」
メンバー中、もっとも腕が立つ仲間が一撃で戦線離脱したことに、ユウゴたちは驚愕する。
残る七つの頭の蛇の目が濃く輝いた。
ユウゴが盾を構えた刹那、横から巨体の蛇腹が振り抜かれ、身体ごと押し飛ばされる。
ジークが、ルルが、のたうつ大蛇の猛攻に見舞われる。

オレは映像を観る。
これは戦いなんかじゃない。一方的な蹂躙だ。そもそも戦う相手の規模が違い過ぎる。
アインが盾もろとも吹き飛んだ。
『……止めろ』
ユウゴがもろに体当たりを喰らい吹っ飛ぶ。
『……止めろ』
ジーク、ルルが必死に抗うが、大蛇の巨軀に埋もれていく。
『……止めろっってんだろッッッ!!!!』
オレは映像にミサイルランチャーを撃ち込んだ。
映像は水面の波紋のように揺れただけで消えない。
オレは連続で画面に向けて次々と攻撃を続ける。
「無駄だよ。ここはキミの内側の世界だからね。いくら暴れても無意味だから。現実には届かない。いい加減大人しくなよ」
『ッッッ!!!!』
オレはすかさず白い少女に向けて有りったけの弾幕を撃ち込む。
……そうだ。そもそもこの少女が原因だ。それにここは少女

の言うようにオレの心の中、精神、深層意識の世界。
だったら倒せばいい。アプデ追加ミッションのイベントのように。
『……ここはゴッドイーターの世界だ。単純明快。イベントをクリアして解放していけばいい。この『ミッション』を攻略すればいいんだ』

オレは武装展開して、白煙の中の敵を睨む。
なんだか徐々に思考がクリアになってきた。
さっきまでの不安や憂鬱が霧のように晴れていく。
「……あ～あ。戻っちゃった。せっかくネガティブな思考誘導してたのに。何で正気になるのかなあ。面倒くさいなぁ」
煙りの中から無傷の少女が紅い眼を明光させて不満そうに歩み出てくる。

「もういいや。ちょっと予定とは違うけど、直接キミ自体を捕食することにしたから」
そう言った少女の身体が変化する。
小さな幼い身体は見る見るうちに巨大な獣の形に成り代わり変容を来たす。
それは、白銀の巨軀の獅子。
灰煉種バルムンク・レガリアに酷似した姿となった。

１２　魔境を超えて

銀を纏わす白蓮の獅子が唸り、吠え猛る。
すべてを塗り潰す圧倒的なまでの威圧と殺気。

全身がビリビリする。震える。恐怖にではない。高揚感。強敵に対峙した武者震い。
そして怒り。アインさんたちをあんな目に遭わせたことに。敵に。不甲斐ない自身に。
ゴッドイーターが大好きな、オレのココロを弄んだこと思い知らせるために。
このメスガキにわからせる。
オレのココロに聳えたつ、失われたマイわからせ棒が奮い勃つ。
『お仕置きの時間だッッッ』
ミサイル、レーザー、ガトリングを全弾あらん限り発射する。すかさず、炎熱球、氷球、雷球をも次々と撃ち放つ。
出し惜しみは無しだ。相手はただの敵ではない。イベントボスだ。全力で叩く。
だが、白銀の獅子の前面に蒼白いフィールドの壁が。予想通り弾幕は届いていない。
『……だよなぁ、やっぱ、そう来るよなッッッッ』
オレはブースターを加速、両腕のブレードを構えて全速で斬りかかる。
衝突する刃。火花が迸る。獅子を守護するフィールドが軋みを上げる。
嘲笑うように獅子の口が大きく開いた。
『ヤバッッッ!!?』

滅却の極光。
オレはシールドを何重にも展開する。弾ける白煌の熱波。アラガミ細胞を重ね合わせた幾つもの盾が、易々と、溶ける、融ける、解ける、とけ……
ゴッッッ
獅子の巨体のショルダータックルがオレを半壊した盾ごとひしゃげさせ押し潰す。
凄まじい衝撃。大型ダンプカーにでも正面衝突されたのかってぐらい吹き飛ぶオレ。
遮る障害物が何もない空虚の空間をどこまでも突き抜けるが、ブレードを白い地面に突き刺し急ブレーキをかける。
『くっ!?』
影が重なる。その場から飛び退く。真上から獅子の巨体が落ち、地面が陥没する。
白銀の獅子が鬣から幾重にもブレードを形成して斬り飛び掛かる。
ブースターを逆噴射しブレードで迎え討つ。
斬り結び、ぶつかる両者の刃。
穿ち、突き、斬り、断ち、払う。
『ぐっうっ!?』
刃の隙間を縫う獅子の鉤爪の腕がオレの横腹を大きく薙ぎ削ぐ。
オレはウィングブースターを展開し、空宙に飛び上がり、『オーディン』の槍を展開して王の財宝（ゲートオブバビロン）のごとく衝撃波と一緒に撃ち込みまくる。
獅子は白石結晶のファンネルを召喚し、絶槍の雷雨を尽く排除する。そして背中からウィングスラスターを展開し飛翔して追いかけてくる。
弾幕の嵐を物ともせず獅子が迫る。
両腕のブレードを構え、ウィングブースターを全力加速して突貫する。
一閃。
互いが空中で擦れ違う。

『……なんだよ……メッチャ強いやん……』
オレの両腕のブレードと、ウィングブースターがバラバラに砕き割れて、全身に剣痕が刻まれ――――落ちた――――

＊＊＊＊＊＊

『……う……』
『最初からこうシてれバ良かっタのに。回りクどいからナぁ、お姉ちゃんワ』
白銀の獅子が可愛らしい似つかわない声を発してズタボロのアメノハバキリ変異種を見下ろし、鋭い爪の前脚で踏み付ける。

視界が霞む……
白い獅子のアラガミがオレを足蹴にしている。
ああ、オレ、負けたのか……

なんだ、あんなにイキって結局オレはやられるとは……
無双していたと思って調子に乗って……ご覧の有り様
……
空間の画面に黒い龍が暴れている。
アインさんたち……ゴメン……
アラガミになったのに……たくさん捕食して強くなったのに
……
ハバキリからアメノハバキリに進化して……
もっと捕食すれば良かったのか……？
意地張らず、人間も捕食すれば良かったのか……？
いや、そうしたらオレは本当に身も心もアラガミと同じになってた
……
くそ……もっと力が……もっと捕食して、力を……
でも捕食するものがここにはない……
この精神世界には、オレと目の前の白い獅子……
ああ、あるじゃないか……最高の餌が……

『さっサと食べチゃって黒イ大蛇のアラガミを完全制御化しナいと
……なっ!?』
白銀の獅子が足蹴にしたアメノハバキリ変異種の残骸の異変に気
付いた。
アメノハバキリ変異種の身体がいつの間にか巨大な口裂の捕食形
態に変わっていた。
バッグゥウウウッッッ!!
!!
勢いよく閉じられた口裂。
白銀の獅子は瞬時に後ろに下がった。だが。
『こ、こいツ、ボクの脚を食べヤがっタ……っ!!!
!!』
前脚の大部分が抉られ、ごっそりと捕食されていた。
驚愕の表情の獅子。

アメノハバキリ変異種のズタボロの身体が突如、不気味な触手群に飲まれていき、包まれる。
『ナにっ!? 何ガ……っ!?』
変容する身体。やがて漆黒の球状になった。
それはつるりとした真ん丸い卵。
まるでこれから雛でも産まれそうな。
『マさか……進化、シてルっ……!?』
ピシッ
漆黒の球体にヒビが走る。
そして、ガラスが砕け散るように黒い殻が粉々に弾け飛んだ。
『!!!?
!!』

キラキラと舞う黒燐の輝きの中から現れたそれは人間のよう――
――だが、禍々しい黒塗りの外骨格の両腕には鋭利な人外の鉤爪を持つ。
濡れ羽色の艶やかな黒鋼の輝きを放つは、夜の闇を落とし込めた腰先まで流れるゆったりとした長き黒糸の麗髪。
側頭部の左右に禍々しく雄々しい両角が聳え伸びる。
たおやかに浮かぶは豊満過ぎる危険かつ特大な双乳。拘束具のような漆黒のビキニが僅かな面積で危うく支える。艶かしい鍛えらた腹筋の腹部、手折れてしまいそうなほどに括れた曲線的な腰周り。
ピッタリとした黒い際どいスパッツが下半身を纏う。魅力的な肉付きのいい臀部と、しなやかな太腿。膝から脚先は黒色の外骨格の具足であり、尖刃のレガースブーツが覆う。
少女。
そこには勇ましい絶世の美少女が存在した。
相対する黒に映える淡雪のごとく白く艶やかな肉感的な肌。物憂げな相貌。垂らす長い睫毛。整った鼻先。紅い唇。
目蓋が開き、凛々しい紅金色の瞳が光を宿す。
無骨なガントレットの鉤爪状の手を伸ばす少女。

何もない白い空中を塗り込めるように鋭いノコ刃を連ねる身の丈を優に越す連刃の大曲刀が彼女の下に顕現する。

「……オレは、もう二度と負けない……さあて、第二ラウンド、いや、最終（ファイナル）ラウンドにしてやるぜ、メスガキライオン」

黒曜の戦乙女が大曲刀を構え、その切っ先を向けた。

13　宿命に導かれ

比類なき絶望がアインの前に立ち塞がる。死力を振り絞ったパリングアッパーが黒蛇の迫り来る長大な蛇腹の薙ぎ払いを紙一重で弾き返す。

全身の筋肉のいたる所が軋み、悲鳴を上げながらも、力を溜め、解き放たれた強烈なチャージクラッシュが振り抜き様にカウンターヒットする。

巨龍――ヤマタノオロチは八つの頭を苛立たしげに振り上げる。

『――――――――――――――――――――――――――ツツツツツ』

怒号に満ちた昏い鳴き声が大気を震わせた。

アインは舌打ちする。ゆっくりとだが、あの大蛇は移動している。その進む先にはミナトが各所にある。絶対に行かせるわけにはいかない。

あれが「奴」に渡されたデータの通りなら非常に拙いことになる。アラガミの生存本能が齎した〝進化〟なのか。あるいは外部からの接触によるものなのか。間違いなく後者によるものだと、確信する。

戦慄する青年の前で鎌首をもたげる大蛇が、ゆっくりと彼の方へ振り向いた。先程からチクチク刺す煩わしい蚊蟲を睨むように。

「…………なるほど。一応イラつくだけ考える頭はあるようだな」

「……ぐ、ぁ……あ、アイン…………無茶、だ……」

「喋るなユウゴ。傷に響くぞ。コイツの相手は、ちょいとばかしお前らには荷が重かったようだな。すまん」

血を滲ませた口角を青年は、倒れ伏した仲間たちを背に苦笑いで吊り上げる。
無謀。確かにその通りだった。
大地に根を張る大樹の如き全身。地上から空へ伸び上がる枝葉のように天蓋を覆う姿は、まさにおぞましい終末の怪物というのに相応しい。
アインは過去の記憶をチラつかす。少し前に出会った謎のローブの女。かつて狂った人生を全うし壮絶な末路を辿ったとある女科学者を彷彿とさせた。
偶然か、あるいは不吉な因果による必然か。
圧倒的な、隔絶とした争い違い力の前に膝を折ってしまいそうになる。
目の前に君臨するその巨大な異形の風貌を見て、青年の脳裏にある親友が口にした言葉が浮かぶ。
――生きることから逃げるな。
それは彼、彼らが、かつて絶望の渦中で受けた言葉だ。
自分たちを導いた稀代の英雄。だが、今はその親友は傍にはいない。しかし、ただの言葉であるはずのその言葉が、彼らの心を奮い立たせたのは紛れもない事実なのだから。
白く染まった羽のようなバスタードブレードをゆらりと構えるアイン。
自分たちを庇うように立つ仲間の姿は、まるでそんな青年に鼓舞されたかのように身体を無理矢理に起こすユウゴたち。
「……どうした？　もう少しゆっくり寝てていいんだぞ。コイツはオレがやる」
「……ッ、ふざけてんじゃてねえ……っ！　あんたひとりでやれる相手かよっ」
ジークがハンマーに寄りかかり声を荒げる。
「そうだとも……私たちはチームだ……仲間を頼らないのは、感心しないな……」
ルルがバイティングエッジを地面に突き刺し身を起こそうと腕が

く。
「まだだ……ッ　まだ俺たちは戦える……ッ　戦わせてくれ……一緒に……オレたちの帰る場所を……護らせてくれッッッ」
ユウゴが血を吐きながら、ロングブレードを突き立て立ち上がる。
「……お前たち……」
その決意、その覚悟は青年は昔からよく知っている。
「ふ……いいだろう。せいぜい脚を引っ張るなよ」

先程まで胸に抱いていた不吉な影は振り払われ、戦士たちは奮い立つ。
身体中を打たれ、裂かれ、溢れる血を厭わずに。
戦いが再開した。
「おおおおォォッ!!　このおおおおォォォッッッ!!!」
「はあァァァァァァァァァァァぁぁぁぁッッッ!!!」
ジークがブーストドライブで突撃し、ルルがアクセルトリガーで舞う。
「うぉおおおおおおおおおおおおォォォッッッ!!!」
「ぜぇアアアアアアアアアアアぁぁぁぁッッッ!!!」
ユウゴがバーストアーツを叩き込み、アインのブラッドアーツが炸裂する。
だが、死に物狂いに神機を振り回すクリサンセマムのゴッドイーターたちの顔は隠しきれない憔悴に歪んでいた。どれほど力を込めて斬り付けようと叩き付けようが、悉くが致命傷に至らず、ダメージを負わせられない。
無駄だと言わんばかりに巨軀を唸らせ、黒龍は巨大な口腔を広げて迫る。
すべてをその深淵の中に呑み尽くそうと――――
大気を切り裂く弾道が一文字に突き抜ける。
無造作に顎門を開いたその紅く澱む眼に目掛け――――
着弾した。

『〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッッッッ』

大蛇が怯み、首を竦めた。

放たれた弾道の射線上。

移動キャラバンの大型車両が砂塵を巻き上げ走行。

甲板に神機の銃身を構えた少女の姿が。

「これ以上、私たちの大切な仲間たちを傷付けさせはしないッッッ!!」

ランドセル型のバックパックを背負ったハニーブロンドの髪を靡かせて。

「お前………クレアっ!!」

ユウゴたちが突如の仲間の参上に驚きの声を上げる。

「ジーク兄ちゃーんっ! 負けんなぁっ!! やられたら許さないからなぁああああっっっ!!!」

クレアの隣りからキースが神機を構え、大蛇に向かって撃ちまくる。

「キースっ!? なんでここにっ!?」

ジークが弟の援護を受けつつ驚く。

「オジさんの存在も忘れてもらっちゃ困るなぁ。大人の紳士らしく華麗に参戦させてもらうぜ。喰らえっ! 化け物ォオッッッ!!!」

リカルドが高出力でレイガンを照射する。

ヤマタノオロチの多頭が忌々しそうにクレアたちを睨め付け、首を伸ばした。

「マズい………ッ!」

「チッ………!」

ユウゴとアインが大蛇の標的が自分たちから変わったことに気付くが、首の速度に追い付かない。

――大鎌が大蛇の頭を切り裂いた。

「………中々に骨が折れそうなヤツを相手してるじゃないか」

ヴァリアントサイズを携えたローブの青年が大蛇の前に立ち塞ぐ。
「ニールッ!?　お前までッッ!?」
ジークが弟たちの参戦に驚きの連続であたふたする。
「随分と手こずってるな。手伝ってやろうか？　ジーク兄貴」
ニールがニヒルに笑う。
「て、手こずってねーしっ！　ちょっと調子が悪いだけだっ！
……で、でもよ、手を貸してくれたら、その……助かる、かな……」
ジークが照れ臭そうに頭を掻く。
「ウゲェェェェェェッッッ！　ジーク兄ちゃんのツンデレなんて需要が無いよぉっ!!　美少女ならともかくっ」
それを見たキースが甲板でえづくような動作する。
「そこぉっ！　誰がツンデレだぁッッッ!!!」
「ぷっ、ジークの、ツン、デレ……ッ」
「ははは っ！　確かにっ！」
ルルが吹き出し、ユウゴが笑う。
アインが僅かに口を緩め、ニールは苦笑いする。
クレアも笑い、リカルドも笑う。
みんなが一斉に声を上げて笑い合う。
アットホームな雰囲気。
死と隣り合わせの恐るべき強敵がすぐ間近にいるのに拘らず。

「……どうやら間に合ったみたいね、みんなっ、無事？　イヤな予感が的中したわ。なんなの？　あのとんでもない規格外の怪物は……あれもアラガミなのかしら？」
「はい、オーナー。強力な偏食場パルスがあの超巨大生物から発生しています。アラガミなのは間違いありません」
キャラバン内、溜め息を吐くイルダ。
エイミーがモニターを見ながらオペレーションを開始する。

『皆さんっ！　あのアラガミは灰嵐時に発生する偏食力場同等の強大なエネルギーで構成されていますっ！　言わば、移動する意思を持った特大灰嵐そのものですっっっ!!!』

「イルダ……エイミー……クレア……キース……リカルド……ニール……みんな……ッ」

集結した仲間たちにユウゴが感極まったように身を震わせる。

「ユウゴ。まだ終わっちゃいない。気を抜くな。来るぞッ」

「ッ！　ああッ!!」

満身創痍のユウゴたちがそれまでの傷などないように力強い足取りで大地を踏み締める。

集う仲間たち。

彼らと共ならどんな強い相手でも立ち向かえる。

しかし、そんな彼らを嘲笑うように８首の蛇龍は頭を揺らぐ。

そして、巨体を震わせ、一際高く嘶いた。

――瞬間、口から紅く閃く光線が空を切り裂いた。

一薙ぎで山が輪切りにされ、消し飛び、遙か遠方に炎の柱が天高く赤々と舞い上がる。山渓を削り、斬り裂き、激震となって大陸全土に響き渡る。

砂塵の大嵐が吹き荒れ、視界の全てを奪う中、一同は神機を構えたまま固まっていた。

「な……」

「嘘……だろ……」

誰ともなく呟いた。

それは神の裁き。

すべてを破壊する本当の絶望が齎された。

蛇龍は己れとの力の差を見せつけるように鎌首をもたげ、その顎門を再び開き紅光の奔流を目下の呆然とする矮小な存在たちに向けて放った――

――――首が明後日の方向にへし曲がり、破壊の光は空の彼方を疾り逸れる。

「ダメ。させない。みんなを守る」

小さな幼い頭に天使の輪っかがある少女。巨大な三日月型の神機を蛇竜の顔面に叩き込んで減り込ませていた。

「……フィム？」

ルルが呆然としながら現れた天使な少女の名を呟く。

「みんな、痛い痛いだね。でも、もう大丈夫」

名を呼ばれた少女は、花が咲いたようにニパッと笑う。

残りの首が一斉に少女目掛けて顎門を開き襲い掛かる。

「危な――――ッ」

――――閃刃が煌めいた。

顎門を開いた蛇龍の多頭が悉く斬り裂かれ、沈みゆく。

「だって、お母さんが一緒だから」

白に輝くポニーテール、ピッチリとしたボディラインがセクシーなインナー。

幼い天使な少女とお揃いの三日月型神機、ヘヴィムーンを肩に引っ提げて、威風堂々と地上に降り立った。

傍らにニコニコと微笑む少女を連れて。

「お待たせ、みんな」

１４　明日へと絆ぐ

途轍もない規模の力が満ちる。まるで流星が爆発したかのような、輝く闇の奔流。

咄嗟に距離を取った獅子は、そこで、一体のアラガミを見た。

『……進化、そんナまさカ……ッ！』

ノコギリ刃を持つ青龍刀のような、バスターブレード、ヘヴィムーンの複合神機を彷彿とさせる曲刀の大太刀を構える美しき黒の乙女。

かつてのアメノハバキリの独特な機械的フォルムなボディを払拭しつつも、面影を随所に残す姿。

ブラックメタリックな外骨格の暖かみが感じられない鋼鉄の手足に反するように生身の部分が所々に見受けられる。長身だが女性らしさがより増し、強調された膨よかな胸部。晒された肌は蒼白いほどに滑らか。

以前の無骨な三日月の武者兜が無くなり、露わとなった濡れたように煌めく長い艶やかな黒髪。先端から淡いグラデーションでキラキラと照り返す。代わりに側頭両部から伸び生える鬼人の如き角先。鋭い眼付きの凜然とした顔は、さながら極東の市松人形に酷似している。

ハバキリ、アメノハバキリを経て進化を果たし遂げたそれは、彼女の本当の姿、素顔なのか。

白だけの空虚な偽りの世界を完全否定するように、今、黒曜の戦乙女が創世の彼方より爆誕した。

「………てめーの敗因は……たったひとつだぜ……メスガキライオン……たったひとつの単純(シンプル)な答えだ………」

大曲刀の切っ先を向けて言い放つ。

「てめーはオレを怒らせた」

あらゆる〝黒〟を身に纏ったそのアラガミ――――
灰域種とも灰嵐種とも、ましてや灰煉種とも異なる、明らかに別の力の存在となり、復活を遂げた荒ぶる神は、絶大なオーラを放ちながらそこに佇んでいた。

『ツ、コレは……』
構築されていた空間の地形が気化していく。存在自体が世界を滅ぼすその様は、まさしく荒神。
真なる領域へ至ったアラガミ、新たな力を引き出し立ち上がった〝獲物〟と相対した白蓮の獅子は、咄嗟に息を呑む。
『なんだヨ………キミは、ただの元『人間』だったハズ………呼ばれたダケなのニ、何処にそんナ力が………ッ』
自分は言われた。お姉ちゃんに。〝やれ〟と。言われた通りにやっただけなのに。これじゃ失敗したら怒られるじゃないか。
こんなのが、〝在(い)る〟なんて聞いてない。
竦む。震える。これはなんだ? 怖い? 怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

――――恐怖。

『――――ツアアアアアアアアア!!!!!』

そして、狂った様に絶叫した。

『認めナいッ、怖イ？　違ウッ、違ウッ、モう、そンな事はどうデもイイ……ッ!!　オマエを今、コのボクが倒せバ、全部元通リになルッッッ!!!』

咆哮を谺せ、突進する白蓮の獅子の一挙種一動をスローモーションのような緩慢さで見ながらオレは思う。
自分はアラガミとして目覚めてから多くの戦いを潜り抜け、そして知った。
強者には強者の、弱者には弱者なりの”覚悟”があることに。
人にもアラガミにも。
人間であった時には、そんなことは、わからなかった。
だが、そんな世界で生き抜いていく覚悟だけは、何かしら胸を打つものがあった。
あるいはそれこそが生きるということなのだと思えるほどに。

そして、自分にはそれがなかった。
ゲームの世界の延長として、画面の向こうから客観的に覗いていただけ。
ただ、諦観者としてプレイしていただけの自分。
それは現実の世界でも同様に。社会という荒波の人生ゲームの盤上で自分という駒を升目通りに動かしていたに過ぎない。
ああ、そうだ。そうであった。
当たり障りなく、不都合から目を逸らし逃げていた。
何も感動もない、ただ嫌な気分になるだけの人生を全うすることに。
だけど、賽の目を振るうのは自分だったのだ。
オレは覚悟というサイコロを本気で振っていなかった。
だから、今度は振ろう。

おもいきり。
後悔が無いように。
この盤面の上で。
向かい合う両雄。最後の一合い。
無数の想いを、掲げ構える大曲刀に込める。
高まる力が最高潮に達し、白墨の景色が、空間が、水面を通すかのように歪んでいく。

「最後に一つ、教えておいてやる」

二体のアラガミは、遂に雌雄を決する。

「オレは――

”この世界（ゴッドイーター）が大好きなんだ”

刃は振り下ろされた――――

＊＊＊＊＊＊

クリサンセマムのゴッドイーターたちとヤマタノオロチとの戦いは熾烈を極めた。
それまで劣勢であった神機使いたちは水を得た魚、否、牙を研ぎ澄ませた狼の如く喰らい付く。
ヤマタノオロチの苛立ちのボルテージは益々跳ね上がる。

少し前まで己れの優位は揺るぎないものと確信していた。
筈なのに――――
「どりゃあああああアアアッッッ!!!」
「せやぁぁぁぁぁぁぁぁアアアッッッ!!!」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアッッッ!!!」
ジーク、キース、ニールの三兄弟三位一体の攻撃が大蛇の鎧を穿ち、
「えええええええいイイイッッッ!!!」
「とぉおおおおおおオオオッッッ!!!」
「そうらぁぁぁぁぁぁアアアッッッ!!!」
クレアのチャージスピア、ルルの薙刃、リカルドのヴァリアントサイズが貫き、
「ゼェェェェェェェェイイイッッッ!!!」
「ぬォオおおおおおオオオッッッ!!!」
ユウゴのロングブレードが、アインのバスターブレードが斬り、
ヤマタノオロチは堪らず、口を開き力を集約させ滅却の破光を放つ。
「ダメ。させない」
フィムが祈るように手を重ねる。
彼女を中心に眩ゆい光の淡いヴェールが立ち昇り、ヤマタノオロチの破壊光線を受け止め消し去ってしまう。
これには、さしものヤマタノオロチも戸惑った。
さっきからこれの繰り返しだった。己れのすべてを焼き尽くす破壊の力が悉く無力化されてしまうのだ。
さらに、
「たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアッッッ!!!」
長い白髪を結んだ人間の女。
ヤツが繰り出す三日月の大斧が鋼より硬い自分の身体を容易く、なます斬りにする。堪ったもんじゃない。
徐々に、徐々に身体に傷が増えていく。治す側から傷が倍以上に増していく。
暴れる頭がまたひとつ傷を受けて力をなくしていく。

こんな筈じゃない。
自分はすべてを破壊するために産まれた。
なのにこの有り様はなんだ？　不様にも程がある。
許すな。赦すな。すべてを破壊しろ。すべてを蹂躙しろ。すべてを…………

　　　　——喰らえ。

「!!?」
雄山の如き巨龍の気配がみるみる変わった、
ドス黒い渦巻く殺気を放ち、八つの頭の両眼が不気味な輝きを帯びる。
『————————————————————ツッツッツ』
凄まじい怒轟。耳を劈く叫声。
黒いおぞましい影を這わし何処までも何処までも伸び上がり、喰らい付こうと首が追いかける。
「くっ！　はぁあああッッッ!!!」
クリサンセマムの鬼神がヘヴィムーンで渾身の力を振るい、迫る蛇龍の首を寸断する。
しかし、断たれた首の断面の肉が盛り上がり、瞬く間に頭が再生していく。
「なっ!?」
次から次へと追いかけてくる首を断ち切るも、次から次へと首から首が生え替わり執拗に襲い掛かる。
そしてついに、
「くッ!?　このっ！　うわァッッッ!!!」
蜷局を巻く蛇腹に絡み付かれてしまった。
「お母さんッッッ!!!」
フィムたちが駆け寄ろうとするが、黒い影の多頭が立ち塞がり鋭い燐光の眼差しで行く手を塞ぐ。

「どけぇっ!!　このっ！　このっ!!」
「邪魔をっ！　邪魔をするなっ!!」
「あいつをっ！　あいつを助けるんだッッッ!!!」
必死に道を開こうと立ち塞がる蛇龍を払う仲間たちだが、無限に再生していく身体に阻まれ辿り着けない。
黒き蛇龍が勝ち誇ったように勝鬨の雄叫びを谺させる。
メキメキメキと蛇腹を万力のように締め上げ、鬼神の身体を絞り巻きつく。
「うあああああああああああああアアアアアアアアッッッッ!!!!!」
全身をバラバラに引き裂かん激痛に悲鳴を上げる鬼神。
「お母さあああああああああアアアンンンッッッッ!!!!!」
涙を零す少女の悲痛な叫びをバックボーンに愉悦に口裂を歪める蛇龍は、そのまま捕らえた獲物を痛ぶりながら頭から丸ごと喰らいつかんと大口を開き――――

動きがピタリと止まった。

誰もが希望の芽を摘まれたと、絶望に染められる瞬間を目の当たりにするしかないと、思わされたその時、

喰らい付こうと口を開けたヤマタノオロチの頭が真っ二つに割れ、そのまま首から縦に裂けていく。

眼を覆わんばかりの眩ゆい光の流線が、夜の闇より暗い黒龍の身体から溢れ、照らし出した。

それは夜空を流れる幾つもの星々、銀河の煌めき、天の河の大剣。

長大かつ、巨大な、猛々しく真っ直ぐ聳え立つ剣閃の光柱が、蛇龍

の巨体を……

――――――両断した。

15　蝶の誘い

光の柱が立ち昇る。
すべてを黒く塗り尽くしていた天蓋はヒビ割れ、陽光が差し込まれた。
固唾を飲み見守るゴッドイーターたち。
世界を壊さんと荒れ狂った八首の大蛇は、その頭から二つに引き裂かれてポロポロと細かな粒子と化し塵となり砕け散っていく。
そうして、ヤマタノオロチの身体の中心から、神々しい光に包まれて尚、黒々しく反する闇の輝きを有する美しい黒髪の少女がゆったりとした動作で舞い降りる。
その姿は人間の女性に非常に似通った形だが、側頭の両角、手脚の外骨格、片手に持つ禍々しい形状の大剣が彼女を似て非なる存在であると理解させる。
そもそも巨大な大蛇のアラガミの中から唐突に現れた時点で人外決定であるのは致し方ないだろう。
そしてこの場の誰もが、彼女こそヤマタノオロチを屠った人物であり、要因であることも。
地上に降り立つ黒い少女。
晴れ渡る青い空。嘘のように黒一色だったのに澄みきった蒼穹から柔らかな日差しをその身に浴びる姿は幻想的な女神像を彷彿とさせた。
畏怖すべき禍々しさと揺るぎない神秘さを併せ持つ聖黒の乙女。
そう皆の眼には映った。

＊＊＊＊＊＊

「な、何が起こった……黒の大蛇が滅んで、中から別のアラガミが出てきただと……？　ど、どういうこだ？　侵蝕オラクル融合細胞の実験は成功したはずだ……アメノハバキリ変異種を媒介に……ッ！　ラケル博士っ！　これは一体なぜ……」

一部始終を逐一観察していた犬飼は取り乱しながら、背後の車椅子の女性に返答を求める。

「……しくじったわね、ネロ……いけない子……でも、とても面白いモノが見れたわ……想定外……予想以上の……クっ、クククっ」

車椅子の喪服姿の女が肩を震わし不気味に嗤う。

「……ラ、ラケル博士？」

困惑する犬飼。

周りのスタッフたちも戸惑うばかりだ。

「……あわよくば終末捕食を強制的に起こせればと思ったけど……もっと楽しいお人形を見つけたわ。嗚呼、なんて楽しい玩具（おもちゃ）箱なのかしら、この世界は……ッ」

恍惚とした声色を発し、そして車椅子から立ち上がった。

金枝の髪が銀色に変わり、容貌が別人へと成り代わる。驚く犬飼、研究員たち。

「フフッ……挨拶に行かないと……あと出来の悪い可愛い妹も回収しないと」
そう言うと、白銀の美女の身体から真っ白な蝶の群れが羽ばたいた。
「う、うわあああああああッッッ」
慌てる周囲の者。
いつの間にか、その場にいた喪服の女だった何者かは消え去っていた。
影も形も残さずに。

＊＊＊＊＊

オレが放った斬撃が白獅子を真っ二つにすると伴に白い閉鎖空間まで天井から真下まで真っ二つに切り裂いた。
そしたら、あらまぁデッカい八つ首黒龍の身体までパッカーンと綺麗に分断してしまいました。
そのまま空間はバラバラになり、大蛇ごと粉々に砕けていったわ。
キラキラと塵となり、流れる風と一緒に消えていく。
晴天。久方振りに見たような青空。そして太陽。
地上に降り立ったオレを唖然とした顔で見てくるゴッドイーター

の神機使いたち。
ん？　あれ、あの白髪のポニテのおっぱい大きな女の子って公式女主人公じゃん？　それに、彼女の足元にちっちゃな褐色の女の子。ギュッと抱き付いてる天使な輪っかの可愛いあの子はフィム？　うっはぁッ！　生だ、生で見ちゃったよっ！　女主人公のけしからんオパーイっ！　是非童貞殺しの横乳ニットでっ！
それと、フィムめっちゃ可愛いすぎるうっ！　オレのこと、お母さんて呼んで欲しいっ！　やべえっ！想像したら母乳出そうっ！　ぴったり抱き着いてる二人の姿が微笑ましすぎるっ！どっちも可愛いねっ！
あと、あの特徴的な上乳のランドセルガールはクレア？　うほぉっ！　堪んねえなぁっ！　あの谷間に挟まりたいっ！　はぁ……はぁ……ああ、い、いかん落ち着け。今のオレにはマイジュニアはない。大丈夫、大丈夫だ（悲しみ）。
ていうか主要メンバー全員勢揃いじゃん！　あそこに移動キャラバン灰域踏破走行車あるし、イルダさんもエイミーちゃんもいるのは確定間違いない。
それにこれ、ゲームタイトル画面の全員集合って感じだっ！　ひゃーっ！　コイツはスゲェぜっ!!　オレも混ざって写真撮ってアーカイブに残したいっ!!

……ふう、ふう……また変なテンションに……しかし、なんでそんなオレのことみんなしてジーっと凝視してんの？
んん？　ややっ、オレの足元にあの白いモフモフ鬣の少女がズタボロで倒れてるぞっ！　あ～、いくらイベントボスだったとはいえ、女の子ボコったのは流石に心に来るねー（目逸らし）
「……お前、まさか……あのアメノハバキリ変異種……なのか？」
ボロボロ血だらけアインさんがオレに近づいて話しかけてきた。
ん？　アメノハバキリ変異種？　オレってそんな風に呼ばれてたのか？
「……まぁ、認識上はそれで間違いないな。オレがその元アメノ

ハバキリ変異種だ」
「「しゃ、喋ったあああああああああッッッ!!!?」」
その場のゴッドイーターたち、アインさんを除いて、あと不思議そうにしているフィムも、以外全員がハモった。
いや、アラガミだって普通に喋る奴いるじゃん。片言だったり笑ったりだけど。そんなびっくりする？　それにいるよね、あんたらの仲間に。ヒトにそっくりなアラガミの女の子が。
その時、どこからともなく現れた無数の白い蝶の大群がオレたちを包み込んできた。
「きゃあああああッッッ!?」
「おわァッ!?　なんだ、なんだぁっ!?」
「どっから湧いたっ!?　この蝶っ!!」
突然に出現し、羽ばたき舞う白蝶に慌てる神機使い。
そして蝶たちは螺旋を描き、一同から離れた場所に集まり形を成していく。
白い蝶の群勢が見る間に人の形を形成し、やがて女性の姿になった。
真っ白なゆったりとしたトーガのような衣装を纏う、白銀に輝く長い髪を蓄えた妖しい美女に。
その美女の両腕には倒したオレの足元にいた白獅子の少女が抱かれていた。
「……う、ネルウァお姉ちゃん……？」
「目が覚めた？　ネロ。ふふ……」
美女が胸元に抱く少女に微笑む。
「……ひぃぃっ!?　ご、ごめんなさいっ！　ごめんなさいっ！　ごめんなさいごめんなさいごめなさい……っ！」
白獅子少女の顔が青褪め引き吊り、謝り出す。
……仲の良い姉妹だねえ（棒）。妹さん震えてるよー。
「……謝らなくていいのよ。あなたには感謝しているくらいだもの。だってこんな素敵な、お人形が来てくれたから」
白獅子少女の頭を撫でながら、美女はコッチを見る。

すっごいネチっこいギラつく視線なんですが……ヤダ、ナニコレ。背筋がとってもゾワリとしちゃう。
……う～ん、正直言って不快極まりない。ヤマタノオロチの視線より胸糞悪い。オレには解る。コイツは根本的にダメなヤツだ。何がというかオレのアラガミとしての本能が受け付けない。
多分、恐らくコイツは……
自然とオレの視線も剣呑なものに変わる。
美女と熱烈な視線のアイコンタクトを交わしていると、
「……何者だ。お前」
アインさんがオレと美女の間に入り、バスタードブレードを白い美女に向ける。
アインさんッ、カックイイ……ッ（トゥンク）
アインさんも感じたのかもしれない。あの白い美女の違和感を。己れの中のアラガミが。
アインさんと謎の闖入者の美女を見守る一同。
「ふ、ふふふ……あはっ、あハハはハハハはハはハッッッ」
声高らかに笑い声を上げる美女。
ヤベえよ、完全にヤンデレサイコパス入ってんじゃん。
「……私の贈り物は気に入ってくれたかしら？　アイン……今はそう名乗ってるようね」
美女は紅光の瞳を細める。
「……やはりな、あの時の……姿形は違うが……亡霊か、あの女の。今度は何を企んでいる？　あの大蛇、ヤマタノオロチはお前が仕組んだんだな？」
アインの詰問に美女は口元を僅かに笑みに変える。
そうだろうな。オレも思ってたわ。明らかに雰囲気が黒幕のそれじゃん（小並感）。
「……亡霊、そうかもしれないし、そうでないかもしれない……妄執、悔恨、叶わぬ想い、残された残滓の哀れで儚い女の切望した悪夢の集合体。それはやがて自我という名の個を得た……」

沈痛な面持ちで静かに語り、一旦、言葉を区切る。
「という設定は、どうかしら？」
美女はにっこりと見惚れるほどの朗らかな微笑を讃える。
「……言葉遊びなら、他所でやってくれ。で？　お前は誰だ？　さっきお前が抱いてる少女が確か名前を言ったな？　ネルウァ、がお前の名前で、その少女がネロ、か？　なるほど。お前たちは姉妹か？」
アインがジャリと荒砂を踏み締め、バスターブレードを構える。
「ふふふ……私からはなんとも……あなた方がそう思えばそれでいいじゃないですか？」
「なら、目的は何だ？　何をするつもりだ？」
神機を手に、にじり寄るアインに白い美女は少女を抱いたまま微笑む。
「……そうですねぇ。出来れば終末捕食を、と言いたいとこですが……先程見事に失敗してしまいましたから……」
「終末捕食……それがお前たちの目的か……？」
「まぁ、結果はご覧の通りですけど。さて、次はどうしましょうか？……そうですね……ああ、では次は、月にいるあなたの想い人を地上に引き摺り下ろす、というのはいかがでしょうか？」
美女は答える。侮蔑と嘲笑を交えた冷酷な微笑みを浮かべて。
瞬間、アインのバスターブレードが美女の頭から叩っ斬った。
速い。今の速さを認識出来たのは主人公ちゃんとオレぐらいじゃないか？
しかし、斬られた筈の姿は無く、白い蝶が舞い上がり別の場所に集まり美女の姿となる。
「あらあら……何か気に障ることを喋ったかしら？　ふふふ……」
「ッッッ!!!」
瞬時に距離を詰めて横薙ぎにバスターブレードを払うアイン。
だが、またしても白い蝶の群れをブレードは切り裂いただけだ。
「チッ！　何処だっ!?」
「ふふふ、今日は軽い挨拶をしに来ただけです。日を改めてまた……」

少女を抱いた美女が倒壊したビル群の高所にいつの間にか移動していた。
「くッ!?　待てっ!!」
呼びかけるアインを尻目に美女は遠目にオレにチラッと一瞥し、そしてそのまま向きを変え去ろうと……
「まあ待てよ。オレもアンタらに挨拶したいんだ」
「なッッッ!?」
去り際の目の前にオレが一瞬で先回りし、道を塞ぐように通せんぼしてやる。
そして意地悪く不敵に、ニヤリと笑ってやった。

16　凱旋

目の前の白い美女が眼を丸く見開く。
お姫様抱っこされた白少女も一緒に。
ん～。あんまり似てるってわけじゃないね。全身白いのは共通だけど。
「……ふ、ふふふ。貴女とは一度ゆっくり話をしてみたかったのですよアメノハバキリさん」
美女が直ぐに表情を余裕あるものに変える。
胸に抱かれた白獅子少女はオレのことを恨みがましく、怯え半分と言った具合に睨み付けてくる。めっちゃ嫌われてるねぇ、これ。
しかし、アメノハバキリ、ねえ？
オレは自分を見る。艶々な流れる黒髪。長い角。黒鉄（くろがね）の両手両脚。胸はうん、まあ、前よりデカくなってるね。バインボインだ。生身らしい部分が増えたが、以前のハバキリの機械っぽい名残りはあるにはあるかな。
だが、違うともハッキリ言えない。しかし、アメノハバキリ何某（なにがし）ではしっくりこない。オレは進化した。それは確かだ。以前のハバキリでもアメノハバキリ変異種でもない。自分自身で既存するどのアラガミとも『異（こと）ナルモノ』と理解出来る。
でもね～、名前ねえ～。
ゴッドイーターシリーズをプレイしてバスターブレードを愛用していたプレイヤーはご存知だろう。
実はゴッドイーターシリーズには、バスターブレードでシリーズ通して、『アメノムラクモ』という有名な神機がすでに存在しているのだ。
八岐大蛇の尾から現れた剣『天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）』。更に別名の『草薙剣（くさなぎのつるぎ）』の『クサナギ』までもある。派生のツムガリ、ヤエガキ、クサナギ、ア

メノムラクモ関連の名前は、ほぼ使用されてしまっているのだ。
無論ゴッドイーター3にも実装されているくらいに常連だ。
約束された勝利の剣？　知らない子ですねえ。
だったら開き直ってまんまアメノムラクモ名乗れば？　別にいいんじゃね？　名前被りなんてよくあるある、気にしない気にしない、というのはちょっと、ね。
確かにヤマタノオロチ倒したけど、あの大蛇は元々オレの暗いネガティブな思考が生み出したモノ。思考誘導されていたとしても。
またオレのココロから産み出されることもあるかもしれない。
身から出た錆。とはよく言ったものだ。身体は、まごうことなきアラガミでも、オレはやっぱり〝人〟なんだ。善良なココロだけじゃない。悪業なココロも存在する普通の人間。間違えるし、魔も差すさ。
……よし、決めたぞ。名前。
ここまで長々と考えてる時間は現実にして僅か数秒。超速思考もちょちょいっと。頭の回転は良くなったけど知能が上がったわけではないので、あしからず。
「オレはもうアメノハバキリじゃない。オレは――――――オレの名前は『オロチノカラサビ』だ」
オレの名乗りに白い美女は一瞬だけどポカンとしたが、何かしら得たように肯く。
「オロチノカラサビ……？　ああ、それは、もしや天羽々斬の別称『蛇之韓鋤』ですか……しかし、『蛇之麁正』ではなく、『蛇韓鋤之劒』の名？　……何か理由がお有りの様ですね」
「まあね。あのヤマタノオロチはオレの弱いココロが産んだようなもんだ。例え誰かさんの意図的な介入があっても、だ」
オレの敢えて強調した言葉に眼を鋭く細める白い美女。一瞬だが。
「愚身、蛇の抜け殻、自分自身、殻から出た、身から出た錆、だから、カラサビ、だ」
「……なるほど。鋤は古来より極東で、よく使う道具、故に錆び易い。手入れを怠るなかれ、蛇の抜け殻、脱皮は生まれ変わり、成長を意味する、なるほど、人のココロにもそれは……なるほど

……」
白い美女はしきりに肯く。
「……お、お姉ちゃん……？」
姉の様子がおかしいのに気付き、恐る恐る話しかける妹。
「貴女、とても面白い考え方をしてるわッッッ!!!」
「ひゃわわっ?!」
姉の満面の笑顔に驚いて素っ頓狂な声を上げる妹が、慌てて姉の身体から降りて背後にサッと隠れた。
「とても独創的で、とても素敵で、とても理性的で、とても魅力的で、とても自戒的で、とても偽善的で……」
白い美女の綺麗な表情が醜悪に歪む。
「……とても人間的だわぁ……」
恍惚としているのか苦悶してるのか判別出来ない。まさに病んでそうな。そんな顔。
「そりゃそうだろう？　中身は『人間』なんだからな」
”元”が付くけど。
「ふふふ……はははは……あはははハハハハハハハハハハハハッッッ」
愉快そうに笑い出す美女。なんか変なスイッチ入ったみたいだ。
「イイわっ！　貴女、とてもイイっ!!　オロチノカラサビッッッ!!!」
焼けたような赤銀の瞳が見開く。
「嗚呼、いけない。せっかく名乗ってくれたのに自己紹介がまだだったわ。私はネルウァ。この子は妹のネロ」
丁寧にお辞儀をするネルウァ。その後ろに隠れて顔半分だけ出して相変わらずオレを睨み付けてくるネロ。
この子、フィムと同じくらいな歳なんだな、と改めて見て思う。バルムンクレガリアみたいな凶悪なアラガミになるとは全く思えない。
「……ああ、ですが折角こうして互いに名乗り合え、知り会えたのに時間切れのようですね」
遠くからクリサンセマムのゴッドイーターたちの声が近づいて来るのが聴こえる。

「名残惜しいですが、いずれまた逢いましょう。オロチノカラサビさん」
ふと気付き辺りを見廻すとネルウァとネロの姿は見当たらなかった。オラクルを絞って広範囲に索敵するが、何処にも居なかった。少なくともここら一帯からは彼女たちの反応が感じられない。
「……上手く逃げられたな」
オレは声がする方向に向かって踵を返して歩いて行く。
そう遠くない未来にまた逢うだろうことを確信しながら。

＊＊＊＊＊＊

「……お姉ちゃん」
「ふふふ……ふふふふ……うふふふふふふふふ……」
倒壊したかつての街並みを見渡せる小高い丘の上で、上機嫌な姉、ネルウァと妹、ネロが佇む。
「……世界って、こんなにも面白いモノがあるのね……」
荒廃した最早何者もいない、アラガミ以外が跋扈しない大地を眺める。
「つまらないオモチャしか存在しないから、さっさと壊そうかと思っていたけど……」
ネルウァの白銀糸の髪が風に靡(なび)き、緩やかにそよぐ。
「……もう少し、遊んでみたくなったわ……」
微笑みを讃え、何処か遠くを見ている姉を不安そうに見つめる妹。
冷たい風がいつまでも吹いていた。

＊＊＊＊＊＊

オレこと『オロチノカラサビ』は今、灰域踏破船クリサンセマムのブリッジのメインルームにいた。
周囲には、お馴染みの神機使いのゴッドイーターたちが取り囲む。
イルダさん、エイミーちゃんも。
オレはみんなが驚愕する中で――――
意識が遠退き――――
ゆっくりと――――

倒れ伏した――――

17　氷解

夢を見ていた。
随分昔の頃、子供のオレがクヌギ林で虫捕りしている。
クワガタだ。
母方の実家は田舎で山と畑と田んぼばかり。
もっぱら夏休みは山で遊ぶことに集中する。
オレはデッカいノコギリクワガタを捕まえて意気揚々と家に帰る。
虫籠の中のクワガタに餌をやり飽きることなく毎日観察する。
だけど、捕まえた最初はあれほど元気に威嚇して暴れたクワガタは今は小さく身動ぎするだけで迫力がなかった。
爺ちゃんは言う。自然の中じゃないと弱っちまう、と。
オレはクワガタを逃した。
あのクワガタは森で元気になったのか？　それとも弱って力尽きたか。
夢の画面が変わった。
オレは中学生だ。
ベッドに寝っ転がり、携帯ゲームをしている。
無印のゴッドイーターだ。
ああ、懐かしいな。あれはなかなかに難易度が鬼畜だった。何度も匙を投げたが、またやり始める。
少しずつ少しずつ慣れてくる。
最初は行動すべてでスタミナ消費したからなあ。確か。ＮＰＣはオトリにも使えないような雑なＡＩだったな。それでも、自分で作ったキャラクターが自分で敵を倒して集めた素材で強い神機を作って、格上の敵を倒すのは最高に楽しい。
脳汁ドバッドバッ出まくった。

また画面が変わった。
高校生のオレだ。
また携帯ゲームやってる。ゴッドイーターバーストだ。コイツは最高にハイになるゲームだった。脳天直撃弾、内臓破壊弾、作ってバカスカ撃ちまくっていたなあ。あー、ボタン壊れたwこれで本機買い替えたんだよなwペイジ振ってシュババババ移動してりゃ壊れるよ、そりゃ。
この頃かなぁ、ゴッドイーターが大好きになったのは。次の新作続編出るのを楽しみに待ってたなぁ。
それからずっと一緒に成長していったGEシリーズ。GE2マルチで知り合った知らない人らと+99倒しまくってたりしてたなぁ。メテオなんていうインフレなバレットもあったなぁ。
レイジバースト、リザレクション。強敵を沈めたあの快感。神業プレイだぜっ！　なんて自画自賛してw無茶な縛りでマゾいソロプレイしたりしたっけ。
スマホでオンライン出た時はギルド入って課金しまくった。レゾナントもやった。キャラクターフォトショの変なヤツも勢いで買ったのは黒歴史だw
サービス終了してもシリーズ停滞してもずっと側にいてくれたGE。
そしてGE3。わざわざ体験イベント行ったなw戸惑ったけど楽しかった。
そして買ったGE3。賛否両論いろいろあったが、全部のアプデを楽しめて良かった。
やっぱり自分で作ったキャラクターが戦っているのは楽しかった。
子供の頃、クワガタとかカブト虫とか虎とか狼とかライオンとかに憧れていたのと似てるかな。恐竜とか。
自分もあんなふうに角とか爪とか牙とかあったらかっけーって思ってたあの時代の自分と。
自分はヒーローよりカッコイイ怪人が好きだった。
スマートなヒーローもいいが、ゴテゴテした敵役は観てて胸が熱く

なった。
いつしか社会人になり、たまに休みにゲームを少しやるだけの日々。
そんな日はある日を境に強制的に終了した。
新しい日常と入れ替え変わるように。

「……オウガ……美味……メイデ……不味……ザイゴ……微妙……」
「この子、夢を見てるみたいだよ？　アラガミの見てる夢ってどんな風なんだろうな～」
クレアがベッドで丸まる少女型の黒いアラガミを覗く。
「ふむ。アラガミの見る夢か。フィムも夢を見るようだが、人と同じような夢なのだろうか？　非常に興味深いな」
ルルが寝ているアラガミ少女の肩をツンツン突く。
「……柔らかい。私たち人間と同じような質感だ。ならば、この二つの巨大な塊りは……？　脂肪か……？　それともオラクル細胞か……？」
ハイライトが消えた眼差しで両手をワキワキさせている。
「う～ん、彼女、『オロチノカラサビ』の体細胞を調べてみたけど、面白いことが分かったよ」
キースがモニターに映る様々な数値のグラフを見ながら告げる。
「何が分かったの？」
「彼女の肉体構造は、俺たちが使用する神機とほとんど同じ構成なんだ」
「神機と？」

クレアとルルが顔を見合わせて、ベッドでスヤスヤ寝息を立てるアラガミ少女を交互に見る。
「ただね～、違うのは彼女は普通じゃない特別な神機という感じかなぁ。通常の神機よりオラクル放出率がズバ抜けて高いけど、偏食細胞倍率は一律安定していない。これは、神機がいつ暴発、暴走してもおかしくない数値を叩き出してるんだ。多分倒れたのはその辺が原因だと思うよ」
クルリと椅子を回して背凭れに寄り掛かるキース。
「でも不思議なんだよなー。そんなことになったらアラガミなら自分の細胞で共食い、捕食し合って自滅しちゃうのに、彼女には全然そんな様子はないよね？　……つまり、彼女は……」
「な、なに……？」
「つ、つまり……？」
ゴクリと唾を二人して飲み込むクレアとルル。
「――――さっぱり分からないッッッ!!!!」
キースが自信たっぷり胸を張って答える。
クレアとルルがその場で椅子から何処ぞの師匠も唸るぐらい見事なコケっぷりを披露した。

＊＊＊＊＊＊

「未知のアラガミ、オロチノカラサビ……彼女はウチで保護した方が良さそうね。もっとも護衛自体は必要無さそうだけど……」
イルダがアインとユウゴと三人で話をしている。
「ああ。そうしてくれると助かる。ここなら〝奴ら〟も迂闊には手を出せないだろう」
アインが腕を組み壁に寄りかかる。
「……俺は心配だな。確かにアイツから邪気なんて微塵も感じないが、あの力を俺たちに向けられたらと思うとゾッとしない」
ユウゴは多少なり不安げな表情だ。
無理もない。山をも消し飛ばすほどの超超弩級アラガミを斬り裂いて、その身体の中から出て来たのだ。しかも元々は自らの身体の中から出現させたのだから。
「……確かに。でも懸念はやっぱりあの謎の白い姉妹たちね。一体何者なのかしら……それと、少し前に犬飼博士が拘束されたわ。半グレ集団の研究者の集まりと一緒にね。グレイプニル側からの報告によると、研究データを盗まれた、とか、ラケル・クラウディウスに騙された、とか支離滅裂な事を言っているそうよ？」
「ラケル？　聞かない名前だ。誰だ？」
イルダの話にユウゴが問う。
「ラケル・クラウディウス。研究者の端くれなら誰でも知っている有名人よ。神機兵の産みの親である故ジェフサ・クラウディウスは彼女たちの父親にあたり、姉のレア・クラウディウスと姉妹揃ってフェンリルでも名の知れた優秀な科学者だったの。それと孤児養護施設『マグノリア＝コンパス』を経営していた人徳者ね。犬飼博士はその人を騙った誰かに騙されたみたい」
「……」
「ん？　だった？」
アインは黙って聞き、ユウゴが過去形に話したイルダに訝しむ。

「ラケル博士は神機兵起動中の事故で亡くなったわ。姉のレア博士は無事だったけど。グレイプニルの機動兵器オーディンはその神機兵を基に設計されてたのよ」
「そうだったのか……立派な人だったんだな、そのラケルっていう人は……」
ユウゴが未来に託し志半ばに散ったかつての英雄たらん博士を称賛する。
歴史に埋もれた真実を知らぬ者たちが話す。
「……違う」
「えっ？」
「？　どうしたアイン。さっきから黙ったままだったが」
アインの片目が宙を睨むように開いた。
「……いや、なんでもない。すまないが少し外に出てくる」
そう言ってアインはひとり船の外に出て行った。

甲板の上でアインは懐からデータベースパッドを取り出す。
それらをスライドしながら、羅列された情報を読む。

成長する神機。秘匿事項。ＮＯ．〇〇〇

禁忌の実験。神機を成長させてしまったらいずれ神機使いがアラガミ化する可能性が高いため、実験凍結。

神機使いがアラガミ化するなら神機になれるはずだと実験したが適合せず失敗、神機使いはアラガミに変貌。

実験。依頼者。クレイドル。ホーオーカンパニー。

〇月〇日。実験開始。ゴッドイーターを神機に捕食させ神機化する。神機になろうとしたが、失敗。被験体アラガミと戦いつづけるうちに徐々にアラガミ化したため半人型神機になる。その神機を使うも適合せず、アラガミ化。事体収束のため実験施設を隔離、閉鎖、投機し封印。

フェンリルヒマラヤ支部重要機密案件によりデータ流出を防ぐため暗号化、若しくは廃棄……

アインはデータベースパッドを閉じる。

「成長する神機、か……」

アインは吹き荒ぶ強い風の中、遙かな地平線を見据え続けた。

１８　束の間の休息

ＧＥ３の世界設定は、前作レイジバーストから十数年ほど経過している。

西暦２０８０年代初頭に発生した厄災――「灰域」により、人類最後の砦と呼ばれたフェンリルによる支配体制は崩壊した。　三賢人に引き起こされた『大災害』により発生した未知の現象、食灰がユーラシア大陸を中心に、中国大陸、アフリカ大陸と広範囲に拡がり、侵蝕を今尚、世界規模で続けている。

電波などの通信手段は悉く阻まれて大陸外部との連絡は断絶、灰域により移動手段は困難を極め、未だ見ぬ驚異のアラガミが跳梁跋扈する。

残された人々は新たな居住区「ミナト」を作り上げると共に、灰域に適合した新たな神機使い「ＡＧＥ」を生み出しアラガミとの戦いを続けていた。

ミナトの一つ「ペニーウォート」で過酷な日々を送っていた主人公やユウゴ達ＡＧＥは、あるミッションの際に灰嵐に遭遇してしまう。

偶然居合わせたキャラバン「クリサンセマム」に保護されたＡＧＥは自分達を戦力として売り込み、成り上がるための新たな戦いに身を投じていく。

そんな暗闇に閉ざされた明日も見えない世界で生きる主人公と仲間たちとの揺るがない絆を描く物語。

――なのだが。

「ちょっ、カラシ入れ過ぎだッ！　それッ俺のウィンナーだぞッ！　キースッ！　こらぁッ!!」
「だからって、こっちに嫌いな昆布巻きばっか入れるなよっ！　ジーク兄ちゃんッ！」
ジークとキースが箸を互いに素早く交差しバトルする。
「フィムはハンペン？　餅巾着？　どっちがいい？」
「どっちもッ！」
クレアに取り皿へと湯気立つ具材をよそってもらうニコニコ顔のフィム。
「いいねえ若い子たちは。オジさん最近腹周り目立つから炭水化物控えてるんだよね……」
「だからさっきから大根とコンニャクと芋ばっかなのか……」
リカルドが遠い目でしみじみと大根を突つく。
それを見ながらニールが熱々ガンモをハフハフ頬張る。
「たまにはこうして和気藹々騒ぎながら食事も悪くないわね」
「そうですねー。はい、オーナー」
イルダの皿に具材を盛り付けるエイミー。
アインは静かに黙々と食べる。
デッキ棚の上には寝子もいて、おでんを貰って食べている。
「みんな、おかわりならたっぷりとあるからな。じゃんじゃん食べてくれ。すべての具材をコンプリートしたパーフェクトおでんパーティーだ」
可愛い動物キャラ絵エプロンしたルルが張り切って土鍋おでんを猫のキャラクター鍋掴みで持ってくる。
「……」
オレの目の前で開催されたおでんパーティー。

ラボから目覚めたオレは引っ張り出され、この場へと連れて来られた。
「どうした？　オロチノカラサビ。……長いな、カラサビ、でいいか？　おでんは初めてか？　まあ、アラガミだからな。見るのも初めてじゃないか？」
ユウゴが隣りに座り、反対側に女主人公が座っている。
「凄く美味しい。カラサビ、食べてごらん？」
いや、いきなりおでんパーティーに強制参加させられて戸惑っているんだが。
ていうか距離近いな。二人とも。オレを挟んで真横にいる。あと名前、略称されてるし。フレンドリー過ぎない？
「……オレはこれでもアラガミなんだが……怖いとか恐ろしいとか感じないのか？」
オレは鋭い指の鉤爪を器用に使い箸を持つ。
おっ、この世界で初めて箸を握ったが、全く違和感なく使えるぞ。
「……正直、お前を疑っていた、最初はな。だけど、相棒がこうやって隣りで呑気にし飯食ってるんなら、大丈夫なんだなぁって思ったよ。それに似たようなヤツはもういるしな」
ユウゴが深く頷き、角がある少女を見る。巾着の餅を口いっぱい、にゅーんと伸ばして食べるフィムは可愛い過ぎる。
隣りの女主人公もお美味しそうに食べている。
周りのクリサンセマムのメンバーたちも、おでんを思い思いに頬張る。
なんだろうか、この和やかな気分。ずっと忘れていた懐かしさ、既視感。
みんなの笑顔。温かな雰囲気。心休まる安心感。
ああ、そうか。
家族、だ。
オレが人間だった頃に感じた、この気持ち。
こっちに来てからあんまり経ってないはずなのに、もう遠い昔のことのように思える。

……唐突にこのゴッドイーターの世界で生きる事を余儀なくされたが、未練とか後悔は感じていない。元々人間関係は気薄な空虚な人生だったから。
オレがかつて人であった過去に想いを馳せていると、トコトコと小さな少女が歩み寄って来た。
「ん～？　おでん食べないの？　美味しくない？」
頭に天使の輪っかを添える褐色肌の幼い女の子、フィムが心配そうに見上げてくる。
どうやらオレの箸が止まっていたから、気になったのようだ。
「……いや、美味しい、と思う。初めて食べたから」
アラガミになってからのまともな料理。久しぶりのおでんの味を彼方の記憶と摺り合わせる。この身体になって食べたのは初めてだ。ほとんどアラガミばっかり捕食していたので、朧げながらも素朴なおでんの味を思い出す。オウガテイルよりは美味いのは確かだ。
「ん～、ちょっと待っててっ！」
何か考えてる仕草のフィムが何処かに走っていった。
「極東に伝わる伝統的なソウルフードなのだが、口に合わなかっただろうか？　やはり、アックスレイダーのスキヤキ、グボログボロのサシミが良かっただろうか……？」
思慮深げに顎に手を当てるルル。
「……いや、問題なく美味しく食べられる。というかアラガミを料理しようとする発想が独特だな……ああ、独特といえば、おでんパンがあったな、そういえば……」
あったなぁ、あれは独特な料理？　だったからな。
「お、おでんパンッ⁉　な、なんだそれはっ⁉　その暴力的かつ繊細なワードの料理名は……ッッッ」
ルルが何やら衝撃を受けている。
アインさんがピクリと少し反応したが、寡黙に食事を続ける。一瞬だけだが、何処か懐かしげな眼をしたのをオレは見逃さなかった。
「……う～ん、パンにおでんを挟んだシンプルな料理、だったはずだな」

「パンに……挟んだっ!?　おでんを?　パンに?　そ、想像を掻き立てられる独創的な料理だな……パン……おでん……なるほど……そうか……そういうのもありか……」
ブツブツと何か思案顔のルル。
すると、フィムがトレーにお皿を載せて戻ってきた。
「これっ！　フィムの自信作っ！　食べてッ！」
ずいっと出された平皿にスプーン。皿の上には盛られた湯気立つ炊き立てだろうか、ライス。焼き目が付いた白い目玉焼き。その上に緑色の半透明なドロッとしたレーションのような液体。皿の端には何故か苺がふたつ添えられて。
「……コレは……」
緑色のどろどろした半固形物体から甘ったらしいツンとした薬品の匂いが漂う。
「アンプルかけごはんッッッ!!!!」
自信満々のドヤァとした可愛くはにかむ満点笑顔の天使少女。
「フィ、フィムっ！　お前、それ、禁断かつ伝説の『ＯＫＧ（アンプルかけごはん）』じゃねーかっ!!」
ジークが驚愕する。
「真っ白なライスと目玉焼きの黄色い黄身に緑のアンプルがこれでもかと、ぶっかけられた色鮮やかな至極の逸品ッ！　さらに赤い苺のコントラストが彩りを添えて……っ！　流石だ、フィム……ッ！　俺が教えることはもうないっ……立派になりやがって……」
……コントかな?　えっ?　まさか、これを食せよと申すか?
オレに?
しかし、ニコニコして皿を差し出すフィム。その期待に満ちたキラキラした純心な瞳にオレが抗えるわけがない。
オレは意を決して皿を受け取り、スプーンを持ち、恐る恐る彩り鮮やかなソレを掬い、口へと運ぶ。
固唾を飲んで見守る一同。
……

「――――美味(うま)ッッッ」

「「「えーーーーーーーーーーーーーーーーッッッッッッ?!!!!」」」

大絶叫のハモリが木霊した。

やったぁ！　と喜ぶフィムと、寡黙に食事する僅かに笑みを浮かべるアインを除いて。

ひとときの穏やかな時間が流れる。

それは暖かく、ゆっくりとココロを満たしていく心地よいものであった。

１９　炎の舞　～終わらない旅～

「……ふう……いい湯加減……」
煙る白い湯気が立ち昇る中、女主人公がゆったりと寛ぐ。
「本当……癒される……はぁ……」
湯船に双丘を浮かばせ、吐息を洩らすクレア。
「フィム、お風呂大好きっ！　みんな一緒っ！」
バシャバシャ泳ぐはしゃぐフィム。
「日々の戦いで疲れた身体がリフレッシュされるな……んんっ」
髪を結ったルルが赤らめた火照り顔で、しなやかな身体を伸ばす。
「……思いきって大浴場に改修したのは正解だったわね。もう味気ないシャワーだけじゃ物足りなくなっちゃったわ。毎日は流石に無理だけど」
頭にタオルを巻いたイルダが豊満膨よかな美肉を湯に浸し、満足そうに言う。
「……確かに毎回大量の水を確保する労力は大変ですが、それに見合うだけの価値はありますね～」
同じく頭にタオルを巻いたエイミーが気持ち良さげに同意する。
「……」
大浴場にて女性陣の艶かしい肢体を前にし湯船に浸かるオレ。
いや流石にちょっとこれは倫理的にアウトっぽいね。
ゲームやアニメ、漫画なら謎の光や湯気や影で隠されてしまう入浴シーンあるあるなのだが、実際にはそんな事はなかった。まあ、すでに自身の身体で確認済みだからね。本当にありがとうございます。
ちなみに衣服について。身体の外皮、一部として着脱、変形自在で

ある。ただ同じ形状の服しか出来なかった。ただ、服のデザインやら種類を覚えれば、色々な格好が出来るだろう。あと、フィムの普段着もオレ同様、普通に着脱出来た。

しかし、女性陣のみんな、ナイススタイルだね。オレのもぷかぷか浮かんでるし。そこはゲームキャラだからかな。フィムはまだ子供だから、これからの成長に期待大。……ルル、それはそれで需要はあると思うぜ。元気出せよ。

「……そこはかとなく哀れみの視線を感じるのだが……気のせいか？　ブクブク……」

ルルが死んだような暗い眼で周りの女性たちのタワワをジーッと顔半分だけ湯から出して見ている。

「えっと……肩は凝るし、着る服は限られるし、戦闘中は邪魔になるから……」

クレアが困り顔でフォローする。何処を見てフォローしているか。敢えて言わないのも優しさだろう。

「確かに戦闘中は凄く揺れるからね。結構痛いし」

女主人公もタワワを湯船に浮かべ頷く。

「まあ、大きければ良いってものじゃないけど……自分の体のことだから、その利点を活かすに越した事ないわ。実を言うと私は普段からあんな大胆な格好してるけどワザとなのよね、あれ」

「えっ!?　そ、そうなんですかオーナーっ！」

「イルダさん、そんな趣味が……」

イルダのカミングアウトに驚きを隠せない女性陣。

「違うわよ。勘違いしないで。あの格好は相手との交渉時に有利なのよ。男性相手の場合は特に、ね」

「……ああ、なるほど。どうしても視線が行っちゃいますよね。男の人の視線って、分かりやすいですから」

イルダの言葉に合点し頷くクレア。

「相手の精神を乱し、有利な交渉の場に引き摺り込む……すでに戦いが交渉前から始まってるんですね。流石、百戦錬磨のクリサンセマムのオーナー。伊達に強豪たち相手に渡り合っていませんね。素

敵ですっ！」
　エイミーが改めて感心する。
「……そういう戦い方もあるのか。でもアラガミ相手には効きそうにはないかな」
　女主人公が自分のタワワを持ち上げる。
　……みんなデカい。オレもデカいが、イルダもデカい。女主人公も負けていない。クレアもやっぱりデカい。エイミーもデカい。服の上からじゃ分からなかったが、着痩せするタイプか。……ルル。涙拭けよ。
「イルダ、凄ーいっ！　カッコいいっ！　魔しょーの女だねっ！
フィムもイルダやクレアやお母さんみたいに、早く大きなって、ボンッ！　キュッ！　ボンッ！　な大人になりたいっ!!」
　湯船からザバーッと勢いよく飛び出す、すっぽんぽんのフィム。
　何処でそんな言葉覚えたフィム？　ジークか？　ジークの野郎だな。（確信）
「でも、フィムなれるかな……？　人間じゃないから……」
　自身がアラガミということを理解している故に、不安げになるフィム。
「……なれるさ。オレもアラガミだから解る。きっとフィムならお母さんみたいな美人な大人の女の人に、きっと」
　オレはフィムの濡れたツヤツヤの髪を外骨格の掌で傷付けないように優しく撫でてやる。
「えへへ……ありがとうっ、カラサビっ！」
「おっとぉっ!?」
　フィムは嬉しそうに顔を赤らめ、オレのタワワにダイブし抱き付く。
「……んとね……フィムは赤ちゃんじゃないけど……カラサビとこうしてると……とっても不思議な感じがするの……」
　オレは苦笑いしつつ、ぴったりフィットするフィムを谷間に抱いて頭を撫でる。
　みんな優しい表情でオレとフィムを微笑ましく見守る。

フィムの額の角を鋭利な鉤爪でそっと触れる。オレの頭にも長い人外の角がある。確かにお互い人間ではない。
でも、この肌に伝わる温もりは、人だろうが、アラガミだろうが関係ない。
護りたい、大切に想う愛おしい気持ち。
そこには嘘偽りない歴とした感情がある。
しばらくそうしていると、沈没していた深海棲艦ル級が唐突に立ち上がった。
「……なんだ、ココは……？　タワワな灰域……？　目の前に……タワワなアラガミどもがたくさんいる……討伐……討伐しなければ……」
真っ赤な茹で顔の白眼を剥いた表情で徐(おもむろ)にクレアのタワワを両手でおもいっきり鷲掴んだ。
「きゃあああああああッッッ!!?」
「クレアッッッ!!?」
めちゃくちゃ揉んでいる。揉みまくっている。これでもかってぐらいに。ナニをとは言わない。察しろ。
「あわわっ!?　こ、これは、暴走っ!?　大変ですっ！　クレアさんがルルさんに捕食されましたっ！　対象のバースト確認っ！　バストだけにっ!!」
「オペレーションしてる場合っ!?　くっ！　二人ともっ速やかに対処しなさい！　これは命令よっ！　私は先に上がるわっ！」
「あっ!?　オーナーズルいっ！　私も失礼しまーすっ！　後はよろしく〜ッ!!」
イルダが脱兎の如く撤退し、エイミーも後を追いかけていく。
湯船にぐったり浮かぶクレアから女主人公とオレにロックオンする裸身のルル。
完全に目が逝っちゃってるぞっ!!
いつの間にかスヤスヤ寝てしまったフィムを抱いたオレと女主人公は互いに視線を交わし肯き合う。
「「エンゲージッッッ」」

新たなる強敵の出現にオレたちは戦いの火蓋を切ったのだった。

「風呂場の方が妙に騒がしいんだが……いいのか？」
ニールが読んでいたバガラリーの漫画本から顔を上げる。
「あ～、いつもの事だから気にすんなって。でも今回は、いつもより派手だなぁ」
「新メンバーがいるからだろう。下手に手を出すと巻き添え食うからな。放って置けばいいんだ」
ジークがベッドで携帯ゲームし、ユウゴがテーブルで帳簿を付けている。
「……そういうものなのか。ならいいが……（明らかに戦闘している気配なんだが、一体風呂場で何が起きているんだ……？）」
ニールは訝しみつつ、漫画の続きを読み出した。

「……おいおい。風呂場壊すなよな……修理すんの俺なんだから……」

リカルドが遠くで聴こえる破砕音に溜め息を吐きつつ、フロア掃除をしていた。アインは外出、キースはラボに篭って研究している。寝子は寝そべり欠伸をしていた。

聖なる探索。それは浪漫……夢、希望を追い求める果てない旅路。

喧騒は続く……。

２０　先陣を斬る

暗い黄緑色を基調とした身体中に傷を負った三つ首の頭部と顎を振り回し、すべてを喰らい尽くそうと暴れ回る対抗適応型アラガミ。『シン・ドローミ』。

あらゆるモノを飲み込む罪（シン）の名を冠し、フェンリルを拘束するために用いた鎖（ドローミ）の巨大な口と砲身のような異質な器官を持ち、目に入るモノは全て捕喰対象とする二足歩行の大型恐竜。

「そっちに行ったぜっ！　後は任せたぁッッッ」

雷の衝撃波の咆哮を放ち、限界まで顎門を広げて異常なほど執拗に周囲を破壊し包囲網から逃れ出す。

「トドメを刺してやれッッッ」

ジークとユウゴがシン・ドローミが疾走する先に待ち構える者に叫ぶ。

「頼んだ。オロチノカラサビ」

クリサンセマムの鬼神が振り返る。

手負いの罪なる禍王はガムシャラに雷撃を放ちながら、立ち塞ぐ存在に三口を開き、挑み掛かる。

「ああ。任された」

右手に掲げた大曲刀を構えるは長い黒髪に大きな角を持つ異形の少女。黒き外骨格のガントレットに覆われた鋭い鉤爪の掌に連なるノコギリ刃がチェーンソーのように唸り、激しく回り出す。

勢いよく振り抜かれた刀身が何処までも伸び上がる。まるで幾重もの刃が蛇鞭のようにしなり、空を切り裂き一閃し、シン・ドローミの二つの禍々しい首を一文字、横並びに両断した。

二つの頭を失い、大絶叫する対抗適応型アラガミ。だが、怒りに狂ったケダモノは残るひとつの頭を盛大に猛らせ震わせ渾身の一撃を放つ。

――――甲高い金属音。

黒髪の異形少女の左腕にいつの間にか巨大かつ無骨なシールドが装着されて、反攻する兇獣の複牙を受け止めていた。

「――――悪いな。チェックメイトだ」

シールドの射出口から閃光が迸り、爆音が鳴り響く。

シン・ドローミの残された頭部が長大な鉄杭に開いた大口こと身体を貫通せしめし爆ぜ、絶命させた。

ジャコンと特大の空薬莢がパイルバンカーシールドから煙を撒き排出され、伸ばされたガリアンソードがギャリンギャリンと連結していき、元の大曲刀に戻る。

全身黒塗りで固めた戦人形さながら整った美貌をチームメンバーに向け、外骨格の鋭い鉤爪で親指をグッと立てた。

それには応えるように仲間たちも親指を立てる。

ヤマタノオロチを倒し、オレが倒れてから数日……オレはクリサンセマムの一員として、共に活動していた。

「こいつ、切れば切るほど気味悪い触手をウネウネと……破ァァァッ!!」

ルルが伸ばされる触手の塊りで造られた不気味で巨大な腕を薙刃を旋回させ、次々と斬り飛ばす。

だが、『ナヴァド・ヌァザ』はまるで意に介さず、そのままルルを呑み込もうと触手を這わし拡げる。

明王を思わせる装飾を身に纏った、隻腕の巨躯を持つ対抗適応型アラガミ。

右肩の肉塊には人間の腕がいくつも絡まったような触手が蠢き、頭

部の頭骸骨からは瘴気が溢れ、赤い瞳がその奥で不気味に発光して、何とも悍ましい姿をしている。
「――――悪いお手々。めっ!!」
フィムが振り下ろした剛月斧の断罪が、天罰を体現する轟仏の魔神の触腕を真っ二つに斬り飛ばす。
「チャンスだよっクレアっ!」
腕を断ち切られ、バランスを崩して片膝を着くナヴァド・ヌァザ。そこにクレアが至近距離から一斉射撃を繰り出す。
「ッてええええええええッッッ!!!」
剥き出しの露出されたコアを正確に全弾銃撃する。魔神は身動ぎしつつも再び、触手を纏わせ起き上がろうと捌がく。
「させるかっ! これでも喰らえっ!!」
ルルがホールドトラップを直接、魔神の身体に叩き込む。
ナヴァド・ヌァザが咆哮を谺し、その動きを鈍らせる。
「今だっ! カラサビッ!!」
「カラサビッ! お願いっ!!」
「カラサビお姉ちゃんっ!!」
三人の乙女の声が響き合い、遠方に構えるは黒き戦乙女。
外骨格の右腕から肩に超長大な黒鉄のロングバレルライフルの砲塔が形成されており、背中には幾つも排気口のノズルと排熱ファンに覆われている。
両脚のバトルレガースから伸びたバンカーが大地に深々食い込み固定され、左腕で砲身と化した右腕の突出したグリップを握り締める。
「――――待たせたな。準備ＯＫだ」
ニヤリと不敵に笑い、展開されたソリッドグリッドの照星を覗き、ターゲットに照準を合わせるオロチノカラサビ。
「――――狙い撃つぜッ」
引き金（トリガー）を引いた。
迸る眩ゆい閃光。
一直線に直走る螺旋を巻く高高圧エネルギーの奔流。

ナヴァド・ヌァザのコアを、貫いた――――――

醜悪な巨軀に見事な伽藍洞（がらんどう）の風穴が出来上がり、轟仏の魔神は地を揺らし倒れ伏した。

レールガンのような砲身と背中の排出機関から大量の蒸気を放出し、形態変化させた肉体を緩やかに元の身体へと戻していくオレ。

「カラサビお姉ちゃん凄いっ！　強いっ！　カッコいいっ！」

フィムがダッシュし、勢いよく飛び付く。それをオレは大きな双球で受け止める。

クレアとルルも駆けつけて互いの無事を喜び合う。

仲間たちと共に過ごす日々はとても充実していて、何にも増して得難いものだ。

だから、だからこそ、オレは――――――

獰猛な獣が煌びやかな鎧を纏ったような、荒々しくも神々しい銀皇の四足獣型の荒ぶる神が威嚇して吠え猛る。

エジプト神話の冥界の神の名を持つ限界灰域対抗適応型アラガミ。『アヌビス・デュナイ』

「否定」を意味する「ディナイ（ｄｅｎｙ）」を冠し、世界を凍土に変える程の冷気を放つ、アヌビスの対抗適応型アラガミ。銀白色の鎧を纏い、発光部は紫色に変化している。

強大な力を持ち、バーストせず通常の状態でもマルドゥーク数体を

一撃で瞬殺する。
さらに目に入るモノ全てを切り裂き喰い殺す程の非常に高い凶暴性を備え、その存在を知る者からは『冥界の主』と称される。
「おっととぉっ！　奴さん血気盛んだっ！　オジさんじゃ、荷が重いからパスしたいねぇっ!!」
「この暴れっぷり、寝相の悪いジーク兄貴そっくりだなっ！　今朝も頭を蹴られたっ!!」
強靭な牙を展開し素早く捕喰形態に移行し、対象へ一度折り返しつつ突進してくるアヌビス・デュナイを素早く左右に躱すリカルドとニール。
「さっさと御退場願おうかッ、カラサビッ!!」
冥府へと導く死神の顎門をタワーシールドを展開し、ジャストガードで完全防御するアイン。
捕食攻撃をあっさりと防がれた喰獣の銀皇は、タタラを踏みながら後ずさる。
その頭上、真上、空中から高速度で飛翔する異形のアラガミ少女。
背中から6枚羽根の漆黒に輝くウィングスラスターを展開させ、追従するファンネルから無数のレーザーを嵐の如く射出する。
降りしきるレーザーの雨霰に身を穿たれ焼かれながらも、二足で立ち上がるアヌビス・デュナイが真上の敵手に向かい口腔を開く。
赤色のフィールドが周囲から揺らめき沸き立ち、アヌビス・デュナイの開かれた顎門へと一斉に集約し、高密度のエネルギーの塊りとなる。
そして、それを真上へと撃ち上げた。
機械の翼を持つ黒き戦乙女は、両手を広げる。
彼女を中心に幾つもの円刃のサークルが幾重にも螺旋を描き、重なるように出現する。
少女が手をかざす。
不規則に旋回する円刃の歯車の中心部の空間が裂かれ、虚無の彼方より少しずつ、其れが姿を顕現(あらわ)す。
巨大かつ長大な槍。

「槍」とはいうが、その形状は独特で、赤い光を放つ幾何学文様を備えた三つの円筒が連なる姿は、ヘビーランス、騎士の馬上槍ような独特の形状をしている。
三つの重なる円筒が互い違いに旋回し、空間を軋ませ、歪ませる。
それはこの世にあらずもの、神代の武器。まさに『神造兵装（グングニル）』。
廻る円錐の異様な巨槍を構えるオロチノカラサビ。
「――――控えろ、雑種」
そして、それを真下へと撃ち降ろした。
真下から赤い破壊の光が立ち昇る。真上から黒い破滅の光が降り立つ。
赤い破壊の光が、黒い破壊の光にあっという間に飲み込まれる。
冥界の名を印す荒ぶる神は、開いた口ごと大地に縫い付け突き立てられ――――――

――――果てた。

大地を台座に巨槍を墓標とし、風と共に運ばれ散って逝くアラガミを目下に見下ろす黒の少女。
地平線の山嶺から沈みゆく陽が静かに大地を赤く染めてゆくのを見つめ、仲間たちが待つ下に降りていった。

21　路の先に

ベッドで毛布を被る天使の輪っかがある小さな少女。
「……お姉ちゃん、あれ歌って……いつもの……」
隣りに腰掛ける黒髪の長い角がある少女に眠そうにしながら、ねだる。
「フィムは本当にあれが好きだなあ。うん、歌ってあげるよ」
アラガミの少女は、すうっと息を吸うと、静かに紡ぎ出した。

終わらない歌がないなら
くり返し歌えばいい
枯れない花がないなら
別のたね蒔けばいい
ｌｉｆｅ．ｍｙ　ｌｉｆｅ
続いてゆく、きっと永遠に
誰もがそう、本当は信じたい
現実という悲しみに出会うまで
瞳そらそう……

オレが歌っているのは、シオが劇中に口ずさんでいたあれだ。
切なくも温かい。優しいメロディ。本来なら歌詞はないが、そこはオレが転生者だからな。本物のアーティストの作詞楽曲を知っている。
アラガミとはいえ、今のオレは女。高い声がよく出る。出来るだ

け、ゆっくり、優しく、緩やかに、子守唄のように、歌う。

憶えている
母の胸は温かくてやさしい
この世を離れる日に想うでしょう
忘れないで私の声
ｖｏｉｃｅ．ｏｆ　ｍｅ
いつか必ず訪れる
別れなら出来るだけ
美しくきっと言おう
忘れないで私のこと
ｌｉｆｅ．ｍｙ　ｌｉｆｅ
いつか必ず訪れる
別れなら出来るだけ
そう美しく……伝えたいのその時には
いつか誰にも訪れる
さよならは泣かないで
美しくきっと言おう……

「……ん？　いつの間にか寝たか。これ歌うとすぐに寝るよなフィム」
スヤスヤと寝息を立てる少女の髪を優しく撫でてやる。
こうしてると本当に普通の女の子だと思う。到底アラガミとは思えない。
オレはフィムを起こさないようそっと離れる。
まだみんなは起きているな。
少し外に出るか。

夜。
玲瓏（れいろう）と世闇（よやみ）を照らす月。
その呼び名は数多ある。
朔（さく）、始生魄（しせいはく）、弓張（ゆみ）はり、幾望（きぼう）、望月（もちづき）、朧月（ろうげつ）、玉桂（たまかつら）。
挙げればまだまだきりがない。
見上げる。
満月を一日過ぎた今宵の月は十六夜（いざよい）、またの名を不知夜（いざよい）という。
夜を知らぬとはよく言ったものだと思いながら、煌々と照らす少しだけ欠けた月を見上げる。
オレは荒野に停泊する灰域踏破船クリサンセマムの甲板で夜空を眺めている。
思えば、この世界に来てからいろいろあった。何故かアラガミ、ハバキリになって、アラガミと生死を賭けたサバイバル。生きるために戦い、食らい、アメノハバキリに進化。途中から神機使いに執拗に狙われまくった。
ある時、偶然にもアインさんたちと接触。だと思ったら、グレイプニルを騙る神機使いに何か分からない謎の神機に刺されて、身体が変化。
ヤマタノオロチにジョグレス進化した。
オレは深層意識の世界で、白いアラガミ少女と出会い、ヤマタノオ

ロチ化が少女による意図的なものと知る。
頭に来たオレは白獅子に変身した少女と戦うも、敗れてしまう。
現実世界では、ヤマタノオロチが暴れまくり駆けつけたゴッドイーターたちが応戦するも苦戦。
絶体絶命の状況の中、オレは新たなる進化をした。
白獅子少女を倒しヤマタノオロチを倒した危機が去った矢先に、白獅子少女の姉なる者が現れ、事態は急変。
なんやかんやで逃げられ、オレは進化の反動なのか意識不明に。
クリサンセマムのメンバーに保護された。
という経緯だ。

自分のこと、何故この世界に来たのか。この異様な力はなんなのか。何故、あの姉妹はオレを狙ったのか。最初は生き残ることに必死で、強くなるにつれ、謎ばかり増えていく。

「……分からないことばかりだ」
だけど、分かることもある。
黒い鉤爪を白い月に伸ばす。あの月にはもうひとりアラガミの少女がいる。分かる。今もこっちの星を見ているのが。
「……お前、あの歌をどこで覚えた？」
オレの背後から甲板の壁に背を預け問いかける男、アイン。
オレの後を着けていたのは最初から知っていた。
「……」
「久しぶりに聴いた……懐かしいメロディだ……だが、あのフレーズには歌詞は無かった筈だが……？」
「……」
「お前は何者だ？　過去のオレしか知り得ない事情を知っている。ただのアラガミではない強さもそうだが」
アインは問う。
「……アイン、アンタは輪廻転生を信じるか？」
「……唐突だな。輪廻または輪廻転生とは、サンスクリット語の

サンサーラに由来する用語だ。命あるものが何度も転生し、人だけでなく動物なども含めた生類として生まれ変わること。輪廻とは、生命が無限に転生を繰り返すさまを、輪を描いて元に戻る車輪の軌跡に喩えたことから来ている。輪廻転生の概念は元々古代インドに伝わる考え方から派生したものという説がある。仏教のみならず古代ギリシャやイスラム教のごく一部でも見られ、世界各地に似たような思想がある」

アインはウィキペディアのようにスラスラと説明する。流石、科学者。歴史にも造詣が深い。だったら確信をついてやろう。

「オレがその”転生者”だとしたら？　どう思う？」

「……なるほど、そう来たか。生憎だが、俺はオカルトは信じていないタチだ。仮にお前が転生者だとして俺はお前のようなヤツには過去会ったことはない」

オレは嘘は言っていない。やはりいきなり転生だのなんだの言われても信じるわけがない。それにオレはこの世界の住人ではないのだから知らなくて当たり前だ。オレが一方的に知っているだけだから。

「……まあ、全部信じてくれるとは思ってないが、オレはこの身体、アラガミになる前は人間だった。神機使いじゃない。普通のな。事故で死んで気が付いたら、いつの間にかこんなんなっていた」

「……」

アインは黙ってオレの話を聞いている。

「それからは必死さ。アラガミだからな。食わなきゃ食われる世界だ。食って食って食いまくって進化して強くなった。ゴッドイーターたちに狙われて適当に相手しながら逃げ回っていた。そしたら、アンタたちと出会って……あとはあの通り、だ」

オレは甲板の柵に軽く寄りかかる。力加減しないと破壊してしまうからちょっとだけ。

「……オレはすべてを知っているわけじゃない。あの姉妹のことも分からない。自分自身のことも分からない。これから何が起こるかも……」

この世界線では、どうやらストーリーはすでに完結。深層意識のキャラクターサブイベントも終了しているのが数日一緒に過ごして分かった。
「……こうして改めてお前と話しているとまるで人間と話しているようだ。お前が元人間というのも納得がいく……だが、お前は”アラガミ”だ。現状はな。それはお前が一番理解しているだろう？」
アインの瞳がオレを見つめる。
「……ああ、そうだ。間違いなくアラガミだ。自分が分からないオレでも分かる。どうしようもなく……だからだ。オレは……ここにはいられない」
オレはここでクリサンセマムのメンバーたちと過ごしていくうちにずっと考えていた。
自分自身のこと。あの姉妹のこと。そしてこれから起こり得るだろうことを。
戦うだろう。間違いなく。
彼らゴッドイーターたちも巻き込まれるだろう。否応なく。
オレがここにいる限り。
だから、オレは……此処から去る。
「……殊勝なヤツだ。あれほどの力を持っているというのに。いや、だからこそか。俺たちに迷惑はかけられないってわけか」
アインの言葉に頷くオレ。その通りだ。オレはまだ全力を出してもいない。
これから先、彼らを庇いながら戦えるかと問われれば、ＮＯだ。
正直に言おう。オレは戦いが愉しい。敵を、アラガミを倒すのが愉しい。自分の力で捻じ伏せ、捕食し、強くなることが楽しくてしようがない。
これはオレがアラガミだからか。人間だからか。両方だからか。あるいはもっと違う別の何かか。
「……今夜にもここを出て行くつもりだ。アンタたちには随分世話になった。迷惑もかけた。感謝している」
「……そうか。それがお前の決断なら止めはしない。ただ

……」
アインがいい淀む。
「ただ？」
「……あの歌を、もう一度……聴かせてくれないか？」
アインがバツが悪そうに言う。
なるほど。あの子の歌だもんな。うむ、いいだろう。男の時はキーが高くて歌うことはなかったからな。ハバキリの時にひとりカラオケ感覚で練習しまくった甲斐があった。
オレはクルリと回り、一礼し、甲板の段上に上がると、ひと息つく。
そして歌い出す。

白い月が浮かぶ夜空。
優しい歌声がゆったりと流れ、奏でられた。

22　来たるその日まで

――――扉が再び開かれるのは、いつか
扉を外から叩くのは、誰の手か
開け放たれた扉の向こうに待つのは、誰か――――

「……そういうわけで、アイツは昨夜、此処を発った」
アインはキャラバンのブリッジにクリサンセマムのメンバーを集めて、オロチノカラサビが去ったことを話す。
「……なんだよ、黙って行っちまったのか……アイツ、自分のことは全然話さなかったからな……」
「俺も敢えては聞かなかったが……そういう理由があったのか。しかし、元人間か……」

ジーク、ユウゴが話す。
「偏食因子の暴走、活動限界域を超えた神機使いがアラガミ化する現象は稀にあるらしいけど……彼女はゴッドイーターではなかった……だとすれば、なんらかの外部的要因が考えられるけど……」
「アラガミになっても、されど人の心を失わず、か……」
「アラガミにしては、やけに人間味に溢れている変わったヤツだとは思ったが……」
クレアが思索し、ルル、ニールも考える。
「う～ん。彼女がここに来てから身体のこといろいろ調べさせてもらったけど、あ、ちゃんと本人の許可は取ったからね。やっぱり矛盾するんだよねー。彼女は人間じゃない。それは間違いない。肉体的にはだけど。でも彼女の身体は神機と同質のものであるものの、本来の活発なアラガミの偏食細胞そのものでもあるんだ。普通こんなのあり得ないんだけど、彼女自身が実例として存在するからね。参っちゃうよ」
キースが困り顔で語る。
「自由意思を持った神機であり、同時にアラガミでもある。それも高度な知性のある……従来の人型アラガミに類似する点は多々あるけど、彼女、オロチノカラサビはそれすら逸脱した存在ということね……憶測だけど、フェンリルには人体実験を肯定する組織が昔から秘密裏にあったらしいけど、彼女がなんらかの関係者の可能性も示唆出来るわ」
イルダも考察する。
「……俺も昔、研究者としてやっていた時に噂は聞いたが……実際にあった筈だ。フェンリルは秘密主義だからな……非人道的なことも平気でやるヤツらがいてもおかしくない。犬飼のヤツのようにな」
リカルドが苦虫を噛み潰したように言う。
「……成長する神機……随分と昔だが、過去に似たような実験を行なった事例があったようだ」

アインの言葉に皆が注目する。
アインがフェンリルヒマラヤ支部にてかつて行われていた恐るべき実験が実在したことを話す。
それはあまりにも凄惨であり救い難いものであった。
「……酷い……人を闘うための道具に変える実験だなんて……」
「救い難いものだな、人間というものは……」
「アイツの方がよっぽど人間らしかったぞ……っ！」
「俺たちＡＧＥも似たような経緯なもんだが……それにしても……」
クリサンセマムのメンバーがそれぞれ苦い顔をする。
「……成長する、進化していく神機……同一、というわけではなさそうだけど、似てるわね……可能性は高いわ……それと例の犬飼博士の件だけど、精神状態が安定してなくて事情聴取は難航しているわ。ただ彼が何者かに盗まれたという研究が何なのかは、ある程度分かったわ」
イルダは一旦、間を置いて話す。
「……『侵蝕融合細胞』……詳しくはデータがほとんど残されていないから分からないけど、研究スタッフの調査によれば、偏食因子オラクル細胞を任意に融合、変化させる研究らしいわ」
「今、その情報データを収集解析してるけど、何者かに改竄された形跡があるんだよ。それも含めて調査してるけど、あまり上手くはいってないね……」
キースが報告する。
「……カラサビお姉ちゃん、いなくなっちゃったの……？」
悲しげなフィムが女主人公の腰に腕を回し抱きついている。
今朝、目覚めてからオロチノカラサビの姿が見えないことに疑問を持っていたが、理由を知り少なからずショックを受けたようだ。
「……フィム」
クリサンセマムのリーダーたる女性はフィムを優しく撫でる。オロチノカラサビにとても懐いていたのは身近にいた己れも知ってい

る。
「……フィム。アイツがお前に渡したいものがあると言ってな、置いていったものがある。少し待ってろ」
アインはそう言って、場を離れる。
「……お姉ちゃんが？」
「フィムに渡したいものって、何だろう？」
クレアたちが首を傾げる。
少ししてアインが戻ってくるが、特に手にしているものはない。皆が不思議に思っていると彼の背後から妙なモノがフヨフヨと着いて来ていた。
『ピギィッ！』
それは、黒い丸い形した珍妙な生き物？　だった。
その姿は神機の捕喰形態（プレデターフォーム）に酷似しており、なんというか……可愛いの一言である。
コンパクトなボディ、ハコフグのようなフォルムに金魚を思わせるヒレ。　体を左右に揺らしながらピギィピギィ鳴く様子はまさに小動物的である。
「えっ！　何これっ!?」
「な、なんだこいつッ？」
「動いている……生物、なのか？」
その奇怪な生き物はフヨフヨ浮かびながら、フィムの足元までやってくる。
『ピギィッ！』
「わぁ～～～ッ!?」
初めて見る謎の生物に驚き戸惑うフィム。
「アイン、もしかしてコレが？」
ユウゴが問う。
「ああ。オロチノカラサビが作った置き土産、小型アラガミ『アバドン』だ。安心しろ。アラガミだが危険はない。間違って討伐するなよ？」
「作ったっ!?　このちっこいアラガミをっ!?」

「規格外なヤツだとは分かってたが、こういうことも出来るのか……」
ジーク、ニールがフィムの周りをぐるぐる廻る怪生物に戸惑う。それぞれ驚く面々。
「アバドン……幸運を運ぶという幻のアラガミ……別名、混沌を呼ぶ者とも言われている超希少種。まさかこの目で拝めるとは……非常に興味深い……」
ルルがアバドンを観察する。
「コレ……？　お姉ちゃんが、フィムに……？」
そっとアバドンに触れるフィム。アバドンはフィムの小さな手に自ら擦り寄ってくる。
「ああ、アイツがお前に渡してくれ、と言っていたからな」
『ピギィッ！　ピギィッ！　ピギギギ……あ～あ～、テステス、これちゃんと録音されてるのか？　……よし、大丈夫だな』
突然にアバドンからオロチノカラサビの声が聴こえてきた。
「お姉ちゃんっ!?」
「えっ!?　何で、声がっ！」
「どうやら予め自分の声をセットしていたようだが……」
「……何か言おうとしている。メッセージか」
『……クリサンセマムのみんな、聴こえているか？　オレだ。オロチノカラサビだ。こんな形で別れる事になって本当にすまない』
アバドンから聴こえてくるオロチノカラサビの声に耳を傾ける一同。
『……ずっと考えていた。オレはここにいていいのか。このままみんなと一緒に過ごしていいのかって……』
「いいに決まってんだろーがっ！」
「私たちが信用に足らなかったから愛想を尽かしたのか……？」
ジークが憤り、ルルが寂しそうに顔を伏せる。
『……ヤマタノオロチはオレが産み出したアラガミだ。アレはオレと同じ存在、同じ力が今もオレの中に疼いている……すべてを破壊しようと身をくねらせ渦巻いている……オレは危険なアラガミなんだ。それに皆もう知っての通りヤバイヤツらに目を付けら

れている。だから、みんなとは一旦ここで離れることにした。自分勝手な理由ですまない』
「本当に自分勝手だねぇ……自分一人で全部抱え込むってつもりかい？　やるせないねぇ……」
「まるで以前の俺を見ているようだ……暗闇で足掻く自分に……」
　リカルドが顔を顰め、ニールも何処か想う。
『……フィム、何も言わずサヨナラしてゴメン……代わりにオレのオラクル細胞で作ったアバドンを送るよ。またいつかＯＫＧ食べさせてくれ。それとフィムのこと頼んだ、クリサンセマムの鬼神』
「カラサビ……ああ」
　鬼神と称されたリーダーの女性は力強く頷く。
「カラサビお姉ちゃん……」
　フィムはアバドンを抱える。
「お姉ちゃんの匂いがする……」
　腕の中のアバドンを強く抱きしめた。
『ユウゴ、ジーク、クレア、ルル、キース、ニール、リカルドさん、エイミーちゃん、イルダさん、アインさん……世話になった、ありがとう』
　アバドンからオロチノカラサビの声が途絶えた。
『ピギィッ！』
　一同、皆暫く沈黙する。
「……アイツ、引き留められるのが分かっていたから、わざわざ黙って出て行ったんだな……」
　ユウゴが呟く。
「……彼女は私たちを巻き込まないように配慮したようね。でもそれで私たちが、はいそうですかって、簡単に頷くと思ったのかしら？　甘いわね」
　イルダがやれやれと頭を振る。
「……そうだな。俺たちは諦めが悪いんだ。アイツが羽根を伸ば

している間にやれることはしておこう。いつ帰ってきてもいいようにな」
アインがニヤリと笑うと、みんなも一様に頷いた。
フィムがアバドンの頭を撫でると、アバドンの鳴き声が柔らかい声に変わる。
『～～～～♪　～～～～♪』
「これ……お姉ちゃんのいつも歌ってくれる歌……」
「優しい歌声だね……」
「ああ……」
フィムは耳を澄ませ、クリサンセマムのメンバーはその歌声に聴き惚れる。
「フィム、美味しいアンプルかけごはん作るの、練習する……ッ！」
「よしっ！　フィム、新メニューを開発して、帰ってきたアイツをビックリさせてやろうぜっ!!」
「うんっ！」
ジークの新メニューＯＫＧ開発に元気よく返事するフィム。
「アンプル代はあなたの給料から引いておくから、幾らでも使っていいわよ？　ジーク」
イルダが当然とばかり宣言する。
「うげっ!?　マジかよっ!?」
その場のメンバーたちが一斉に笑い声を上げた。
いずれ遠からず、もうひとりメンバーの笑い声も加わることだろうと信じて。

23　蠢く坑道

「てぁアアアアッッッ!!!」
　クレアが放ったチャージグラインドが漆黒の体躯のアラガミの横腹を穿つ。
『―――――――――ツッツ』
　獣咆をけたたましく谺すアラガミ。醜悪な人面の顔を歪ませ、拡げた刃翼を唸らせ敵対者に振るう。
「はァぁあああああッッッ!!!」
　二刀の交差させた刃が斬り上がる翼の剣を火花を散らし食い止めるルル。
『―――――――――ツッツ』
　だが、無理矢理に鍔迫り合う刃を振り抜いたアラガミ『ディアウスピター』がルル目掛けて態勢を低く構え素早く突進する。
「しまっ……!?」
『ピギィッ!!』
　黒獣の牙がバランスを崩して無防備なルルの身体を喰らい付かんとした時、傍から小さな姿のアラガミが現れ立ち塞がり、口中から何かを吐き出した。
　眩ゆい閃光が弾け、辺りを照らす。
『〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ツッツ』
「せぃヤァアアアアッッッ!!!」
　眼前でまともに直撃した烈音と光幕に怯むディアウスピター。
　クリサンセマムの鬼神がアラガミの刃翼を根本から剛斧で斬り飛ばす。

「今だっ、フィムッ！」
「うんっ、お母さんっ！」
頭上からクリサンセマムの鬼神と入れ替わるようにヘヴィムーンを掲げた天使の輪っかの幼い少女が舞い降りる。
三日月の巨大な刃がディアウスピターの頭に叩きつけられ、勢いよく大地ごと陥没し、伏せさせた。

「おーい。そっちは片付いたかぁ？」
呑気な間延びした声を上げてブーストハンマーを担いだ青年が男性陣の仲間たちと伴い、女性陣の元にやってくる。
「ああ、問題ない、ジーク。少々ヒヤッとしたが、あの子たちのおかげで事なきを得た」
ルルがジークと会話し、小さな少女と戯れる小さなアラガミを見やる。
「アバドンっ！　お手っ！」
『ピギッ！』
黒い丸い身体からニュッと、ヒレを伸ばし少女と手を交わす。
「伏せっ！」
『ピッギィッ！』
丸い身体を地面に伏せ、潰れた饅頭のようにペコンと平たくなる。
「立てっ！」
『ピギギィッ！』
身体をニュミーンと餅のように縦長に伸ばして直立する。
「オウガテイルの真似っ！」
『ピギ、ピギィッ！』

身体がグニャグニャ変形して瞬く間にリアルなミニオウガテイルに変わる。
「アバドン偉いっ！　ご褒美のおやつあげるねッ！」
『ピギィ♪ピギィ♪』
お菓子を貰いパクパク食べる奇妙なアラガミと少女のやりとりを見守るメンバー。
「しっかし、あのちっさなアラガミ、アバドン。まさか俺たちと一緒に戦うなんて思わなかったよな」
「確かに。あらゆる局面で的確に俺たちにアイテムを使ってくれる。傷を負えば回復を、敵に対してはトラップ、スタングレネードを。何度となく助けられてたな」
「欲しい時にピンポイントで援護が来る。しかもアイツには所持限界数もないようだ。流石、オロチノカラサビが作ったというべきか、規格外のサポーターだ」
「いやぁ、ホント助かるよー。炊事洗濯掃除家事手伝いまで手伝ってくれるからオジさん大助かりだ」
ジーク、ユウゴ、ニール、リカルドが新たな仲間の活躍について称賛する。
フィムの周りを高速でバターになるんじゃないかってぐらい廻りまくる小型アラガミ、アバドン。
「不思議なアラガミだよね。この間、落っことして割っちゃったお気に入りのマグカップを食べて、口から直して出したからビックリしちゃった」
「……構造が気になるな。是非解剖して調べてみたい……おい、そんな顔をするな。冗談だ」
「ルルは冗談に聴こえない」
クレアとルル、女リーダーも交えて会話していると、フィムとアバドンが一緒にやってくる。
「みんな、お疲れ様。アバドン、みんなにあれ出してあげて」
『ピギィッ！』
フィムの言葉に返事をするアバドン。身体を丸く膨らませたかと

思うと、口から何かを大量にポンポン取り出す。
　それはキンキンに冷えたスポーツドリンク。
「ありがとう、アバドン」
「おっと。へへ、いつもサンキューなっ！」
　メンバーたちがアバドンから、スポーツドリンクを受け取る。
「いつも悪いな。お前のサポートのおかげで助かってるよ」
　女リーダー、ジークとユウゴがドリンクを飲みながら、感謝する。
「いつもサポートありがとうね、アバドン」
「お前は良いアラガミだな。忠犬ならぬ忠アラガミだ」
　クレアとルルがアバドンの頭を撫でる。ヒレの尻尾を振って喜んでいる様子のアバドン。
「これで本格的にアラガミと戦闘出来たら言うことなしなんだがなぁ」
「それはいくら何でも無理だろう。この小ささじゃな、オウガテイルの尻尾でも一撃だ」
　リカルド、ニールが残念だと会話する。
『ピギィッ！　ピギィッ！』
「アバドンが、やるときはやるぞ！　って言って怒ってるっ！　馬鹿にしちゃダメだよっ！」
　怒って？　プックリとフグみたいに膨らむアバドンを抱えてプンスコ頬を同じように膨らませるフィム。
「悪い悪い。そんなつもりじゃないんだ」
「……というか、アバドンの言葉解るのか？」
「う～ん。何となくだけど。嬉しいとか怒ってるとか、だいたい解る。全部じゃないけど」
　フィムが抱いたアバドンの頭を撫で撫でする。
『ピギィッ♪』
　嬉しそうにしていたり、怒ってるのはなんとなくだが解る気がするが、やはりいまいち表情？　が伝わりにくいのはアラガミだからだろうか。
「お前、オロチノカラサビから作ってもらったんだろ？　なんかアイ

ツみたいにすんごい必殺技とかないのか？　アバドンビームッ！
とか」
　ジークがアバドンの頬っぺたをプニプニ突つく。
　ガブリッ
「いってええええええええッッッ!!?」
　差し出されジークの手に噛み付いたアバドン。
「コイツぅっ、また俺の手ぇ、噛みやがったあっ!!　なんで俺が触るといつも噛みつくんだよっ!?」
　噛み付かれ手を押さえてフーフーする涙目のジーク。
「お前がいつも残飯ばかり食べさせるからじゃないか？　アンプルなんたらの残骸を」
「残飯じゃねえしっ！　開発中の新メニューだよっ！　ただちょっと失敗して捨てるのもったないからコイツに食わせてるだけだっ！」
「ジークのは、ただ単にマズいからだろう？　フィムが作ったアンプル料理は美味そうに残さず食べているが？」
　ユウゴがツッコミを入れ、ルルが痛いところを突いてくる。
「……そうなんだ。最近、妙にアンプルの減りが早いからおかしいなぁって思ってたの。ふーん、ジークのせいだったんだ？」
　クレアが和かに微笑むを浮かべる。背後からゴゴゴゴと炎が揺らいで見えるが、幻覚か？
「ちょ、ちょっと待てクレア。悪気は無いんだ。オレはアイツが帰ってきたら美味いアンプル飯を……って、なんで神機の銃口こっちに向けてんだよっ！　話せば解るっ……ア――――――――――――ッッッッッッ」
　ジークの悲鳴が廃虚の街中に響き渡った。
　これにより新たなアラガミが多数引き寄せられ大乱闘となり、フィムとアバドンが再び活躍し、脚光を浴びるのだった。
「アバドンッ、キミに決めたッ！」
『ピギィッ！』

＊＊＊＊＊＊

紅い砂塵が渦巻く廃坑道。
吹き荒れる高密度の喰灰が刻一刻と移り変わり、すべてを呑み込む限界灰域。
蠍の尾を振るい、鋭利な針を撃ち出すボルグカムラン。鋸刃を連ねた大曲刀に防御した盾ごと頭から巨体を斬り裂かれた。
咆哮を上げ、鋼の身体を丸め回転しながら突進するコンゴウを容易くシールドで弾き返すと同時に炸裂したパイルバンカーが串刺しにする。
ミサイルを乱発するクアドリガに向けて腕をブラスト砲にトランスフォームさせ、内臓破壊弾を撃ち放ち強靭な外骨格ごと内部から木っ端微塵に吹き飛ばす。

レーザーの落雷を放つグウゾウと、ビームの雨を降らせるサリエルは脳天直撃弾で沈黙させる。
ワラワラと無尽蔵に集まる小型のアラガミ群はペンタＪＧＰの回転放射で焼き尽くす。
「どうやら、ちゃんと機能してるようだな、オレの作ったアバドン」
機械の両手、両足の武骨な外骨格に反する人間の女性のような肢体、しなやかな美しさを併せ持つ異形のアラガミ。
脚部のブースターの推進力で小型アラガミの中を縫うように移動し、ギャリンギャリンとチェーンブレードが旋回し、黒に塗られた異形の少女がアラガミを切り刻み次々屠る。
「フィムたちの護衛には丁度いいだろう。白姉妹対策にもなる」
体勢を低く構えた状態から、広範囲に一気に雷刀斬撃の居合斬りを放つ。
迸る電光の斬撃波が周囲のアラガミを纏めて一掃する。
クリサンセマムのメンバーたちと別れてから少し経つ。
オレこと、オロチノカラサビは、紅蓮灰域で腕を磨いていた。
仲間たちと離れ離れになったのは寂しいが、今のオレは強力な力を持て余し気味であり、不安がある。
何より懸念しているのが、あの白姉妹のこと。
仲間たちになんらかの接触、被害が出ることが一番問題だ。妹のネロ、あの少女よりも姉、ネルウァの方が特に搦手を使うような嫌な感じがあの時した。
あのまま皆のところに居たら間違いなく良くないことが起こる。
だから別行動にしたのだ。代わりに特別な『アバドン』をボディガードに置いてきたから大丈夫だろう。
オレの道はオレが決めると決めた。オレはこの世界で楽しく生きるために出来得る限りのことをする。かと言って慢心して油断し、足元を掬われたくはないのでしっかり地盤は固める。特に、推しのゴッドイーターたちには是非とも幸せになってもらいたい。
もしかしてオレはその為にこの世界に転生したのでは？　とか都合の良いように考えることがある。

オレも彼らもハッピーエンドが一番だが、世の中そう上手く廻らないのは生前嫌と言うほど体感している。前世はバッドエンドだったからな。

今のオレは強くてニューゲームだが、このリアルゴッドイーターの世界に於いてはビギナーにも等しい。

オレの――――

オレたちの戦いはこれからだ――――

＊＊＊＊＊＊

白く輝く満月。

「いい夜ね。それに壊したくなるくらい綺麗な月。そう思わない？

ネロ」
「……準備はできてるよ、お姉ちゃん」
瓦礫の巨塔に佇む白い姉妹。
その廃虚の足元にはおびただしい蠢く異形のアラガミたちが息衝いていた。

女体と蠍の様な昆虫が融合したような妖艶な姿のアラガミ。
竜と巨大な鬼が融合したような姿をしたアラガミ。
半月状の巨大な殻と昆虫ともつかない人型が融合したアラガミ。

複数の翼を模した巨大な装飾と不敵な笑みを浮かべる二体の堕天使が融合した様なアラガミ。
巨大な顎を持つ蛙と鰐が融合した様なアラガミ。
青紫色の翼竜型のアラガミ。
二本の巨大な角を持つ獣人型のアラガミ。
獅子のような下半身と人間の女性の上半身に、巨大な一つの目となった頭部を持つアラガミ。
髑髏のような仮面を被り、体の一部に神機が癒着した複数のアラガミ。
そして未だ見ぬ異形のアラガミたち。

「始まるわ。世界を舞台にした悲劇、終末の世の夢。私を存分に愉しませてちょうだい……さあ、一緒に楽しい舞台で歌劇を歌い、艶やかに踊りましょう、オロチノカラサビ……ふふ、はは、あはははハハハハハハハハハハハハ……ッッッ」

照らす月のアンサンブルカーテンコール。
演目『世界の終焉』
開幕――――――

２４　灰の番人

西暦２０５０年代より突如として始まったそれは、地球上のあらゆるものを捕喰する細胞「オラクル細胞」から形成される異形の怪物「荒神＝アラガミ」によって荒廃し、彼らの脅威に晒された人類は滅亡の危機に瀕していた。

人類の対抗手段は、当時、世界に名を馳せた生化学企業「フェンリル」によって開発された生体武器「神機」とそれを操る「ゴッドイーター」によって難を逃れた。

そして２０７０年以降現在、その人類救世の聖地であるフェンリル本部は、一度灰域に沈み人の手から離れ、長い年月を得てアラガミの領域から奪還され再び現在にいたる。

エイブラハム・ガドリン、元グレイプニル最高司令官。

かつては旧フェンリル正規軍であった一個師団「グレイプニル」のトップであり、ゴッドイーターとして戦場で戦った経験を持つ壮年の男は人払いが為された会議室で対する青年に目を向ける。

「……御父上、叔父上によく似ている。母君の面影も……私に何用かね？　アイン君、今はそう呼んだほうが適切だろう」

相対する青年に懐かしみを込めた視線を送る。

「ガドリン総督、いや今は評議委員会長か。あんたと取り引きをしに来た」

隻眼の鋭い眼差しの青年が同じく眼帯の厳つい壮年の男と言葉を交わす。

「取り引き？　何を言うかと思えば……今の私に何も権限がないのは君たちも周知の通りだ。もはや私には振るえる力など無いに等しい……そんな者に持ち掛ける話など無いと思うのだが

……」
ガドリン元総督は自嘲気味な笑みを浮かべる。
「単刀直入に言う。大災害の再来、いやもっと悪いことが起こる可能性がある」
無駄話は不要だと言わんばかり話すアイン。
「……それは確証が合っての話かね？　いや、科学者でもある君が言うならそうなのだろう。しかし、大災害よりも、とは？」
「終末捕食だ」
アインの言葉に顔色が険しくなるガドリン。
「……詳しく話を聞こう」

巨大かつ雄々しい肉体を持つ竜を彷彿とさせる大型アラガミ『ハンニバル』が獲物を求めて悠々と地を踏み鳴らし闊歩する。
その背中の逆鱗が突然に爆発し破壊された。
絶叫を響かせるハンニバル。炎の竜翼が噴き荒れ、愚かにも逆鱗に触れた敵対者を探し視線を向け、
――――――頭が木っ端微塵に弾け飛んだ。
巨体が音を立てて崩れ落ちる。
「……よし」

遥か遠方、切り立った岩棚の丘の上にスナイパーライフルを構えた異形の角がある黒髪の少女がスコープを覗きながら呟く。
ジャキンとレバーがコッキングされ、空薬莢が排出される。
「今の騒ぎで他のアラガミが、ハンニバルの亡骸を捕食しにやって来たな」
倒れたハンニバルの死体を貪ろうと様々なアラガミが小型、中型と集まり出す。
その脇をキャラバン船がゆっくり慎重に通り過ぎていく。何処かのミナトの船だろう。
オレは、たまに灰域やそれ以外でも船を見かけると、こうして接近遭遇しそうなアラガミを討伐し、進路確保の手伝いをしている。
余計なお世話かもしれないが、取り敢えず気付いたらやっておく。
「ん？　向こう側で戦闘しているな。この反応はゴッドイーターか」
キャラバン船が去った方角を見送っていたら、別の場所から戦闘反応を感じた。なので、少し様子を見に行くことにする。
もし、苦戦しているようなら陰ながらバックアップしてやるつもりだ。
問題ないようなら構わないのだが。

「くそっ！　倒しても倒してもキリがないっ！」
「アイツを先に倒さないと終わんないわよッ!!」
「そんなこと分かってますよっ！　くっ、なんて動きが素早いんだっ！」
「雑魚は無視しろっ！　ターゲットだけに集中しろっ、お前たちっ！

聞いているのかっ!? 指示通りに行動しろッ!!」
四人のまだ若い、少年少女のＡＧＥたち神機使いが複数のアラガミ相手に右往左往、悪戦苦闘している。
その中心にいる巨大な感応種アラガミ、赤熱の餓狼『マルドゥーク』が咆哮を上げると、何処からか別のアラガミたちが誘引され戦場にぞろぞろやって来る。
「……あちゃー、あれはダメだな。てんで戦い方がバラバラだ。チームワークなんてあったもんじゃない」
オレは岩陰からステルスフィールドを発動しながら、そっと覗く。
彼ら個人個人としての戦闘力は高い。現に中型程度のアラガミならタイマン相手に倒している。
ただ、いかんせん戦い方がなってない。ソロならともかくチームワークが基本的な戦いなのだ、ゴッドイーターというものは。
引っ掻き回すように暴れ回るマルドゥークに完全に場をいいように乱されて翻弄されていた。
あのままだと早晩スタミナ切れで、遅かれ早かれアラガミに囲まれてフルボッコ全滅確定だろう。
仕方ないから助けてやろうか。
ただ直接的な戦闘手段は控える。今のオレはアラガミだから、オレが攻撃されてしまう可能性がある。
だからここは、遠距離から狙撃して援護に徹しよう。
オレは腕と一体化したスナイパーライフルを構えて、アラガミを照準に捉える。
先ずはあのシユウからだな。

エネルギー弾を連続で放ち、翼手を拡げ迫り来るシユウ。

その牙を剥いた凶悪な顔面が爆ぜて無くなって吹き飛んだ。
「なっ!?」
砲塔から水流の渦をしつこく放つグボログボロの身体が蜂の巣になり、倒れ伏す。
「えっ!? 狙撃っ!? 何処からっ!?」
次から次へと神機使いと戦うアラガミが穴だらけに変わり、倒されていく。
「何ですかっ!?援軍っ!?」
さっきまで優勢を保っていたマルドゥークがあっという間に孤立無援に立たされて戸惑っている。
慌てて他のアラガミを再び誘引するべく咆哮を上げるため顎を高々反らすと、その強靭な顎元が吹っ飛ばされた。
「チャンスだっ! ヤツはアラガミを呼べないっ! 一気に畳み掛けろっ!!」
リーダーの神機使いのＡＧＥが仲間たちに指示を出す。
そして手負いの暴れるマルドゥークをなんとか協力し倒し、討伐した。
「はぁ……はぁ……なんとか倒したが……一体何処の誰が援護を……?」
「私たちの他にもゴッドイーターが居たのかしら……?」
「みんなっ、あそこの岩棚の所を見てみろっ! 誰かいるぞっ!!」
神機使いのひとりが指差して示す。
一望出来る高い岩棚の上にその者が佇んでいた。
輝く長い濡れ羽色の黒髪を靡かせ、武骨かつ長大なスナイパーライフルを傍に掲げる何者か。
漆黒の鋭利な角を頭部の両端に備え、蒼白い肌の女性的な艶やかなグラマラスな美体を晒す。
両腕、両脚は黒鋼の機械的外骨格に包まれた異形の姿。
切れ長の紅金に染まる瞳でこちらを冷淡に見下ろす美貌の視線に背筋がゾワリ粟立つのを覚えてしまう。
その異様な風体の黒衣の美少女? は、こちらからの視線に気付く

と踵を返し、その場から立ち去っていった。
後に残された神機使いたち。自分たちを援護してくれたのは彼女に間違いないだろう。
しかし彼らは信じられないものを目の当たりにし困惑を隠しきれない。
「……今のは……人間……だったのか？」
「……いえ、どう見ても人じゃなかったわ……」
「……俺にはアラガミにしか見えなかった……まさか、アラガミが人を助ける……？　そんなことがあり得るのか……？」
「……すごく……綺麗だった……」
「「えっッッッ?!!!」」

「やばい、やばい。見つかちまった。ステルスフィールド効果切れてたわ」
ウィングスラスターを展開し、場を飛翔し離れる。
まあ、彼らが無事なら良かった良かった。
こうやってたまにゴッドイーターたちを助けてやるのもオレの仕事だ。
最近ゴッドイーターたちをちょくちょく見かけることが多くなったな。順調に灰域を踏破してるようでなによりだ。
その分オレとの遭遇率も高くなるから、隠密行動にはより気を付けないといけない。

たまに予期せず鉢合わたときは、戦わず即トンズラするから大丈夫だろ。

さてと、次は何処らへん探索しようか。

ゴッドイーターたちの間に実しやかに囁かれ、噂される都市伝説のような話。

そのひとつに”黒の機械仕掛けの乙女”という嘘か真実か定かではない話があるとか、ないとか。

25　脅威の謳歌

歪んだ祈りを奉る者は
たとえ神亡き世界だろうと、到る処に巣喰っている

やがてその祈りは呪詛と化し
あらゆるモノを腐蝕する

地上は荒ぶる神が支配する楽園――――

『こちら灰域踏破船ブルーキャップ。無事、南東方面の限界灰域地帯を突破した』
「こちら管制室。ブルーキャップ了解。補給状態に問題が無ければ、引き続き、調査を続行せよ」
新フェンリル本部統治下直属の灰域監視所兼簡易ミナト。
灰域踏破船から灰域調査報告を定期的に受信している。今日もい

つもと変わらぬ定時連絡になると思われた。
『ブルーキャップ問題無い。こちらはこのまま探査を継続する……な、なんだ、あれは……っ』
それは唐突だった。
「どうしたブルーキャップ。何があった？」
『と、とんでもな……数……アラガ……！　何故……こんな……ッ』
慌ただしく途切れ途切れの声が聴こえ、そして通信が途絶えた。
「ブルーキャップッ!?　応答しろっ！　どうしたっ！　一体何が起きたッッッ!!?」

それは、暗澹たる影。
混沌の兆し。
緩やかに、だが刻々と忍び寄る。

＊＊＊＊＊＊

暗い。
昏い場所だ。
だけど見覚えのある景色だ。
子供の頃に遊んだ田舎の山林、田畑の風景。
通っていた都心の学校の校舎、教室。
勤めていた会社のオフィス、営業先。
どれもが前世の世界の馴染み深いもの。
血が滲み、どす黒く染まっている以外は。
「また、ここか……」
てくてくと薄気味悪い血濡れた風景の中を歩く黒衣のアラガミ少女、オロチノカラサビ。
道なのか血の川か分からない通路を平気な顔で歩いている。
「毎回毎回変わり映えしないし、退屈なんだよなぁ」
謎のスプラッタ空間で欠伸をするオレ。ここはどうやらオレの精神世界、深層意識領内であるようだ。ここに来たということは、現実世界のオレは寝てるんだろう。
たまにこうして『呼ばれる』のだ。

すると、血溜まりの中から黒い何かが形作られ現れた。
『……喰ラエ……スベテ喰ラエ……』
現れたのは真っ黒な影を塗り込めたようなハバキリ。
その影ハバキリがブレードを構えて突進してくる。
「あーハイハイ。いつものやつね」
オレは軽く外骨格の手を横薙ぎに払うと、影ハバキリは真横にスッパリ断ち切られ粒子となり霧散する。
曲刀の連刃大剣がオレの手に握られている。
別の場所から、また再び黒いハバキリが現れ襲いかかってくるが、頭と身体に風穴を開けて消し飛ぶ。

「毎回ワンパターン過ぎるっての、だから」
形態変化させた左腕のブラストキャノンを翳す。
血溜まりから続々と影ハバキリがこれでもかと湧いて出て、斬り掛かってきたり、雷砲を撃ってきたり、空中から滑空したり、四方から迫り来る。
「しゃらくせえな、面倒だ。纏めて相手してやるよ」
大曲刀が一瞬で無数に分割され巨大な竜蛇がトグロを巻きように渦を描く。ギザ刃のブレードが嵐の如く掻き荒れ、影ハバキリたちを容赦無く細切れに細断する。
周りの血濡れた景色もろとも、スーパーサイクロンカッターが余すとこなく切り裂き破壊していく。
カキワリの作られた撮影スタジオのように、景色がそれまでとは異なるものに変わる。
のっぺりとした墨色の黒い空間。
その中央の暗闇をスポットライトの照明が照らし出す。
ライトに照らされたのは、影で形作られたオレ。『オロチノカラサビ』。
『……喰ラエ……スベテ喰ラエ……』
ふーん、改めて見ると我ながらナイスバディだ。ボンッ！　キュッ！　ボンッ！　タワワなバスターバインがバインボイン。自画自賛したくもなるわな。あと、自分の声が色っぽいね。くっ、殺せっ！
とか似合いそうだわ、絶対言わんけど。
影オロチノカラサビ、長いから影サビ、が、腕を大曲刀に変えてオレに向かってブースターを加速、一気に距離を詰めてノコ刃を振り下ろす。
オレも大曲刀を振り下ろし、影サビに向かって斬り込む。
お互いのチェーンブレードが打つかり、ガリガリと音と火花を散らし鍔迫り合う。
『……喰ラエ……スベテヲ……』
「……お前さ、いい加減諦めたら？　ま、思考がアラガミだから捕食一辺倒なのはしょうがないけど」

影サビと話すが、返事はもちろん返ってこない。これもいつものこと。だからオレは大曲刀に力を込めて影サビを武器ごと真っ二つにしてやる。
両断された影サビ。形が崩れてドロドロと溶け出した。
さて、前座はお終い。ここからが本番、メインバトルだ。
黒い影は再び形を成すべく集まり出し、やがてそれは巨大な体躯を持つ異形の獣の姿を形成する。
四足のマダラ模様の腕、脚、三つの獰猛な龍の顎が背部より鎌首をもたげる。体色が鮮血のごとき紅に染まり、凶悪な、威容な風体を誇る。
『……喰ラエ……喰ラエ……喰ラエ……』
三頭蛇の不気味な顎門から、冥府の底から響くような唸りにも似た声が重なり発する。
「……今回も懲りずに来たな、『オロチ』」
そう、コイツは『オロチ』。ゴッドイーター2レイジバーストDLCで闘える予約特典の未知の接触禁忌種アラガミ。出現ミッションは「多頭の悪神」。
見た目はクロムガウェインの亜種っぽいが、変異種らしい。進化の結果、神属固有の特徴であった双腕の先端が変異し、一対の首に発達。
体躯の方は黒地の肌に金色の縞模様という、警戒色めいた虎柄に変化し、生態は謎に包まれ、生息域や発生起源は不明。天から降って湧いたかのごとく突如出現したアラガミであるようだ。
戦闘面では原種ゆずりの敏捷な動きを見せつつ、二本の首を自在に操って襲い掛かる。双頭の口からは仕込み刃だけでなく、爆炎を吐いて砲撃もする。
超越的に危険度の高い個体へと進化を遂げたアラガミであり、防衛班の緊急出動を見合わせるほどの強力な反応を示す。
その実態は、獲物に対して異常なまでの執着を見せる性質を持った桁違いの強敵。牙や仕込み刃に猛毒（デッドリーヴェノム）を持つ周到さ。

また、このＤＬＣにはオロチ専用戦闘曲「黒の一閃」が特別に収録されており、これまでのＧＥサウンドにはなかった三味線と尺八の音色がやたらカッコ良かったものだ。
ちなみにコイツに因んだ複合スキル「大蛇の怒号」は、「復讐への憤怒」「バースト時間」「救命対象バースト化」「受け渡しバースト化」の四つを纏めたものであり、戦闘時には意地でもバーストを発動、或いは保持する性能を発揮する強力なスキルであった。
「しかも、魔改造されてパワーアップした赤い方のヤツだしな……これは『ヤマタノオロチ』繋がりだからか？　だとしたら――――」

刹那、オロチの巨体が陽炎のように揺らぎ、目の前から消えた。
か、に見えた凄まじき超速突進。右頭の口角が裂け拡がり、漆黒の仕込み刃が展開。その禍々しい頭牙から鋭い剣先が伸び生え、オレの首を寸断――――
されず、黒鉄のタワーシールドでオロチの仕込み刃を防いだ。
『……喰ラエ……スベテヲ喰ラエ……』
「……やっぱりな。この前戦った時より更に強化されてるな。しかも魔改造なんてレベルじゃない。改悪も改悪。戦う度にエゲツない性能になってきやがるぞ、コイツ」
オレのシールドを押し返すほどの獰猛なパワー。
オロチの紅く血に染まる三頭蛇の眼光が強く輝く。
「・むっ!?」
多頭から仕込み刃が連続して残像を描き突き込まれる。
左頭の叩き付けからの攻撃。双頭の左右を振りかぶり、仕込み刃で薙ぎ払う。リーチがすこぶる広い。　素早く身を翻し躱し、間合いを取って右頭の刃を正面へと斬り返す。
双頭を振り上げ勢いよく本体を前進させ、度重なる連続噛み付きを見舞ってくる。シールドでガードし、ステップで躱す。
狙ったように回避線上に突き刺し攻撃。直後、オレはブースターを加速。更に身を捻り翻し、左右からの蛇頭の刃を突きだして来る凶悪

な連続コンボ攻撃を紙一重に次々躱していく。
隙を見てオレは大曲刀で刃を弾き、シールドの側面外皮で滑らしてから懐に潜り込んでパイルバンカーを打ち込む。
されどオロチは右頭を振りかぶりつつ屈むような姿勢を見せた直後、刃を出して旋風を発生させつつ舞い上がる。　超高速で場を旋回し、伸び上る刃を振り上げ錐揉みしながらの回転斬り上げ全方位攻撃を放つ。
カウンターに次ぐカウンター攻撃の応酬、元の位置より入れ替わり着地しつつ、両者互いに振り向く。
着地と同時に振り向き様に双頭から爆炎の大火球を吐き出すオロチ。
大曲刀を分割し鋸刃の刀身で斬り付け、迫る火球を切り裂き、極大の火球群を連続発射するオロチに向かってチェーンブレードを伸ばし攻勢に転じる。
オロチはその場から高速バックステップし、双頭蛇の刃でチェーンブレード薙ぎ払い、いなしつつ、炎を纏った斬撃波を幾つも飛ばし対抗する。
空間を燃やし裂き次々迫る炎熱の斬撃波をバーニアを噴射、アサルトキャノンのドローバックショットで回避しつつ撃ち落とし応戦。
燃え立ち昇る爆炎の柱、渦中（うずなか）を喰い裂き、三つ頭の牙と刃を剥き出し、オレの眼と鼻先に現れ飛び掛かるオロチ。
突き出された刃先がオレのタワワごと身体を貫くか否か――――
アサルトを可変させた大型ショットガンを突きつける。炸裂。零距離のラッシュファイア。
徹甲弾のシャワーを喰らい吹き飛ぶオロチ。だがすぐさま態勢を立て直して着地した。
再びお互いに距離を設ける。
オロチの炎に揺らめく赤黒い躰は穴だらけだったが、瞬く間に傷が塞がる。
オレの躰にも幾つもの斬り裂かれた傷痕が。動作反応が鈍く感じるのはデッドリーヴェノムによるスリップダメージ。状態異常に耐

性を持つオレの防殻を侵食している。
「……成長するアラガミ……そうだよな。お前もオレと同じ、オレ自身だもんな。オレが強くなればお前も強くなる」
アインの中の小さいアイン君のように、オレの中のアラガミがこのオロチ。
オレの深層意識内にこうやって現れては、オレから主導権を奪おうと戦いをけしかけてくる。
戦うごとに強さを増していく。もう＋９９は優に超えているだろう。
それぐらいの強敵。
『……喰ラエ……スベテ喰ラエ……喰イ尽クセッッッ……オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッッッッッ』
オロチは三つ首から唸りを呪詛のように燻らせ、吠え猛る。
「……ふん、やる気満々だな。いいぜ、とことん付き合ってやるよ。最近手応えあるアラガミが中々いなかったから丁度いい塩梅の練習相手だ」
オレは大曲刀を構えて、微笑う。
暫くは退屈しのぎになるだろう。

＊＊＊＊＊＊

「……んっ、んんん……」
眼を覚ます。オレは灰域の一角で仮眠をしていた。手作りハンモックの上で手足と背筋を伸ばして起き上がる。でっかいタワワもドプンダプンと揺れて挨拶してくる。
周囲には、アラガミ繊維の単分子ワイヤーのブービートラップを幾重にも張り巡らせている。どうやら今日は、寝込みを襲うアラガミは、いなかったようだ。
オレはアラガミだから基本的に眠るという行為は必要ない。
しかし前生の名残りか、中身が人の為か、時たまこうやって睡眠を取っている。
「……また出やがったな、オロチ。しかも前に戦った時よりも何倍もパワーアップしてやがった」
確定ではないが、高い確率で眠っている時に深層意識に現れ、その都度、戦闘を繰り返す。オロチの強さはオレの強さに比例している。
今のところ、危うげなく全勝しているから問題ない。
だが、もし負けた場合は――――
「……間違いなく喰われるな」
そうしたらオレという『個』は完全にアラガミになるだろう。
ひたすら喰らうだけの存在に。
ハンモックの上で腕を伸ばして頭の後ろに組み、長い脚をクロスして寝っ転がる。
「まあ、暫くは出てこれないだろう。ボッコボッコに叩きのめして消滅させてやったからな。……あと気になるのは、あの白姉妹か……」

オレは灰域を隈なく探索しているのは、あの白姉妹を見つける為でもある。絶対に何かしらイベントを起こすのは間違いない。先に見つけて『お話し』してやろうと思っていたが……

「……見つからない。流石に大陸全域は探しきれない。ユーラシアはほとんど探したから、残るはアフリカ大陸なんだが、離れすぎるとアバドンの制御範囲から外れるからなぁ……」

ああ、それにしても相変わらずフィムは天使で可愛いなぁ……女主人公もクレアもイルダもエイミーも見事なバスターバインなお手前で。ルルもそれはそれで素晴らしい。お風呂最高だな。ありがとうございます。

アバドンからの可視感覚共有で今日もいろいろと捗る。

ん？　ストーカー？

これは不可抗力です。

２６　灰底の都

絶望の世界。

渦巻く闇。

運命は、螺旋を描き出す。

『なんだッ！　なんだッ、あのアラガミどもはッッッ』
『逃げろっ！　逃げなければっ！　逃げないとッ！』
『ゴッドイーターはっ!?　ＡＧＥはどうした!?　防衛班は何をしているッ』
　乱れた画像。地平線上から噴煙が上がる。
『すべてのゴッドイーターは出撃済みだっ！　対処に追われているっ!!』
『貴様もゴッドイーターだろうっ!?　旧型だろうが戦えっ!!』
『ふざけるなぁッ！　オレはとっくの昔に引退したんだぞっ！　今さら戦えるかッッッ』
『……お終いだ……お終いだ……この世の終わりだ……』
　混乱を極める観測所。誰も彼もが怒鳴り散らし、罵り、嘆き、苛む。
『フェンリル本部へ緊急通達っ！　アラガミがっ！　アラガミの大群がっ!!　フェンリル本部ッ！　至急対策を――――――』

映像は途切れた。
「……この映像は四時間前に南東地区灰域観測所から送られてきたものだ。この映像を最後に彼らからの連絡は断絶したままであり、こちらから連絡は一切取ることは出来ていない」
スクリーンの荒い画像には、おびただしい数のアラガミらしき影が地表を埋め尽くす光景が映し出されている。
エイブラハム・ガドリン元グレイプニル最高責任者、現評議員会長は重々しく会議室議事堂に集う重鎮たちに述べる。
「……にわかには信じられん情報ですな。灰嵐なら日常茶飯事でしょう。それを今さら……」
「その通り。仮にアラガミどもが束になろうと我々がいる。そのためのゴッドイーターではないかな？　ガドリン評議員会長」
貴族、ミナト経営者、政治家、軍関係者、研究者、様々な権力者トップの評議員たちが一同に会す議堂。
「……」
クリサンセマムの経営者、イルダ・エンリケスもミナトを代表する評議員として参加している。
「しかし、あれほどの数のアラガミでは、いくら神機使いといえども対策は出来るのかね？」
「すでに調査隊は派遣されている。確認は時間がかかるだろう」
「……アラガミのスタンピード。由々しき事態ですが、何故にこのような事態に陥ったのか甚だ疑問ですね」
「それも含めての調査である。看過できない事態と認識している」
騒つく議堂。評議員たちに淡々と説明するガドリン。
「オーディンは？　オーディンはどうしたのだ？　あれほど莫大な研究資金を提供して完成させた兵器は？」
「そうだ。オーディンを使えばいい。アラガミどもなど根刮ぎ駆逐してしまえばいいではないか」
誰ともなくオーディンについて発言する。
「……オーディンは使用しない。あれは搭乗者たるＡＧＥの生命を糧に起動される諸刃の剣だ」

「馬鹿なっ！　正気か、ガドリン評議員会長っ！　あれほど時間と投資を浪費したオーディンを使用しないだとっ!?」
「ＡＧＥなど代価品に過ぎんっ！　何を遠慮することがあるっ！　貴公とて以前にも――――」
バアアアアアアアアアンンンッッッ
議机が盛大に打ち鳴らされた。
皆、ギョッとし音の原因である人物に目を向ける。
「……ここは討論する場所でも、糾弾する場所でも有りません。来るかもしれない災厄に如何にして手を打つべきか、話し合いをするために我々は集まったのではないのですか？」
イルダ・エンリケスがメガネの奥に怒りを募らせ立ち上がり発言した。
「それに先の大灰嵐終止符には私のミナトに所属するＡＧＥたちが尽力したのです。命懸けで。お忘れなきよう」
静かに座るイルダ。
「……な、ならば、どうするというのかね？　あの数のアラガミを……まさか、ゴッドイーターたちを投入するのか？　総力戦？　それこそ正気の沙汰ではないと思うが……」
「そうだ！　神機使いたちを総動員すれば……」
「そんなことをすればミナトの防衛はどうなるっ!?　手薄になったらアラガミに襲撃されるのが目に見えているっ!!」
「だったらどうすればいいのだっ！」
ザワザワと喧騒に包まれる議堂。誰もが自分に非がないよう利益と打算を皮算用する腹黒い狸たち。
イルダは内心で舌打ちをした。何も分かっていない。自分たちがどれ程の危き状況に置かれているのかまったく理解していない。
いや、理解しようとしない。
「御集まりの方々、御静かに。今回の件について専門の科学者の方をお呼びしている――――アイン博士」
ガドリンが壇上から名を呼ぶ。
壇上の袖から片目に傷のある白髪褐色の青年が現れた。

「アイン？　聞かない名前だ」
「一体何者だ？」
　壇上の卓に佇む青年。
「……紹介に預かったアインだ。無駄話をしに来たわけじゃない。簡潔に説明する。今現在起きている現象について――――」
　評議員の一人が訝しげにする。
「……何処かで見たことが……」
　ハッと何かに気付く。
「……まさか、いや、間違いない……シックザール」
「シックザール？　あの、厄災の三賢者、ソーマ・シックザールか？」
「そういえば古い資料に同じような人物が……」
　目敏い何人かの評議員が口々に名を口にする。
「ソーマ・シックザールっ！　そいつは大災害を引き起こした張本人のひとり、大罪人の三賢者だッッッ!!!」
「三賢者……ッ！　伝送工学の権威、イエスタ・ヘイデンスタム。分子機械の権威、ジョサイア・クオン。そして、レトロオラクル細胞の権威であり始まりのゴッドイーターでもある……」
　評議員全員の視線が壇上のアインへと注がれる。
「ソーマ・シックザールッッッ」
「……」
「よもや、生きて姿を晒すとは……灰嵐を生み出した悪しき科学者っ！」
「知っているぞ。貴様の父、ヨハネス・フォン・シックザールの所業を。エイジス計画。悍ましい企みと末路を……ッ！」
「その弟、ガーランド・シックザールも大層な悪人だったではないか？　人を人と思わぬ人体実験の数々……我々が知らぬとでも思うたか……ッ！」
　口々にこれでもかと名指し悪態を吐く。父であるヨハネス、叔父であるガーランドにも言及する始末。
「コイツら……ッ、好き放題に……ッッッ」
　これにはイルダも我慢の限界に来た。何のために彼が公（おおやけ）の場に姿

を現したか。自らの立場をも顧みずに。この害悪どもを、一人残らず首根っこ掴んで張り倒してやろうかと思った。
「親兄弟揃いも揃って科学者の面汚し。風上にも置けん。おっと母親もそうだったか。アラガミ細胞研究の失敗で無駄死――――」
ズドオオオオオオオオオオオオオオンンンッッッ!!!!!
議堂内に轟く大破砕音。
壇上の片隅、ガドリンが拳で備え付けの卓上を真っ二つに叩き割っていた。
ビシッ、ビシビシビシィィィッッッ
「ひいいいいいッッッ!?」
壇上の一部に亀裂が走り、近場で便乗し騒いでいた評議員の卓が余波で破壊される。
「……静粛に。博士の話が終わっていない」
隻眼の眼光を、冷たく底冷えするほどの眼差しで睨み据えるガドリン。
戦場から離れて退役した軍人として、現役を退いて老いて尚、ゴッドイーターとしての姿を見て、評議員の誰もが、ゴクリと渇いた喉に唾を飲み込む。
「……そうだ。オレの名はソーマ・シックザール。かつて三賢者と謳われ、そして厄災の引き金を引いた大罪人だ。甘んじて誹りは受けよう。灰嵐を、未曾有の大災害を引き起こし、止めることが出来なかった罪を認めよう。だが、今は、オレの話を聞いて欲しい。今、この瞬間にも新たなる厄災の波が差し迫ろうとしていることを――――」

青年は語る。
己れに課せられた罪を。
青年は語る。

これより訪れる人類に待つ未来を――――

フィムはいつの間にか微睡んでいた。
ポカポカと暖かな日差しの中で。
大好きな、お姉ちゃんであるオロチノカラサビから貰ったアバドンを胸に抱きしめて。お日様の温もりに包まれながら。
「お姉ちゃん……もうどこにも行っちゃやだ……」
「フィム、寝ちゃったね……」
「昨日は学校のみんなと遊んでいたからな。最近任務続きで流石に疲れたのだろう」
「少し休んでいこう」
クレア、ルル、女リーダーが眠りこける天使な少女に柔らかな微笑みを浮かべる。

……
……
……
……

夢を見ていた。

真っ白な、何もない何処までも白い世界。
「ん～？　あれ？　ここはどこだろう？」
見渡す限りの白墨の虚無が拡がる。
「アバドン？　いない……？」
いつも一緒にいるアバドンの姿がない。
キョロキョロと辺りを見廻す。
迷子になったのかもしれない。探さないと。
ふとそこ、前方に見知らぬ、いや見覚えのある少女が立っていた。
「こんにちは、フィム。ボクはネロ。キミに逢いに来たよ」
白い獅子髪の少女が嗤った。

27　迫る悪夢

飢えた獣が目前に投じられた食事に喰らい付くことは、一体誰の責任であろうか。
貪る獣は何を思うか。
感謝か、あるいは新たな獲物の到来を待ち望むのか――――

白い獅子の鬣を持つ、ネロと名乗る少女。
自分と同い年くらいだろう、綺麗な真っ白な少女は薄ら笑いを浮かべて対峙する。
その寒気を憶える笑みに警戒心を高めるフィム。知っている。この少女はオロチノカラサビと敵対する者だと。それにこの少女からは、とても嫌な臭いがする。
「アバドンはどこ？」
「ああ、アレね。邪魔だから別の場所に閉じ込めたよ。そんなことよりボクと話をしよう、フィム」
そう嘯き、ネロはフィムに一歩踏み出す。
「……ッ！　アバドン、返して」
一歩下がるフィム。

「そんなに警戒しなくてもいいよ、戦いに来たわけじゃないからね」
また一歩近づくネロ。
また一歩後ろに下がるフィム。
「……やれやれ。これじゃまともに会話も出来やしない。何がそんなに気に入らないんだい？」
ネロはふぅっ、と軽く溜め息を吐き、問う。
「……臭い」
フィムはしかめ面して呟く。
「……え？　臭い？　ボクが？　おかしいなぁ。ちゃんと体細胞の代謝機能は機能しているし、無臭のはずなんだけど……」
フィムの臭い発言に疑問顔のネロが着ているワンピースっぽい衣装や身体をスンスン嗅いで確認している。
「……違う。血の臭いが、する。たくさんの、人の」
フィムはキッとネロを睨み付ける。先程からずっと感じていた匂いの正体。
それは人間の血肉の汚臭。
睨み付けられ、指摘されたネロがキョトンと首を傾げて、ややあ、と納得したように大仰に頷いた。
「あぁ、なるほど。そういうことか。ふふ、おかしなこと言うから、ちょっと分からなかったよ、あははっ」
さも面白そうに笑うネロにフィムが逆に疑問顔になる。
「人間食べるのダメッ！　良くないっ！」
「ふぅっ、キミはアラガミなのに変わってるね。偏食嗜好の隔たりかな。中途半端に『創られ』たからだと思うけど」
ネロは哀れむような視線でフィムを見る。
「……創られた？　フィムが……？」
「そうだよ。ボクたち、アラガミはすべて創られたんだよ。この母なる星によって、ね」
ネロはその場で両手を広げて戯け、クルクル廻る。
「その中でも特別なのがボクたち『人型アラガミ』だ。キミもそのひとり。もちろん知ってるよね、自分のことなんだから」

フィムは目を見開き驚愕する。
もしかしたらと思っていたが、この少女も自分と同じ、人の姿形、知性を持つアラガミだった。
アラガミとは地球意志により、誕生したと仮説されている。その中でも特異な人の似姿のものが『人型アラガミ』と呼称される。
「ボクたちは人間じゃない。それなのに人間に混じって暮らしているキミの方がよっぽど変なんだよ。アラガミのクセに。おっかしーのっ！　ぷークスクス」
ネロは嘲笑う。
「お、おかしくないッ！　変じゃないッ！　フィムは、フィムは……ッ」
戸惑うフィム。自分が人間でなく、アラガミであることは理解している。だけども、みんなは普通に接してくれる。人間と同じに。人間のように。
「ふふ～ん、キミは人を食べないからね。だから、人間たちはキミと仲良くしている『ふり』をしているんだよ。もしキミが人間を傷付け、食べちゃったら……どうなるのかなぁ？」
ネロは紅い瞳を爛々と燈らせ一歩ずつフィムにゆっくりと近づいていく。
「……フィムはアラガミだけどッ、人を、襲わないッ……人間を、食べたりなんてしないッ……だってフィムは……みんなのことが大好きだからッ……」
頭を抱えて蹲りイヤイヤと首を振るフィム。
「でもキミはアラガミなんだよ。人間とは違う。そればかりは、どうしようもないよね。みんな心の中では思ってる。アラガミだから。アラガミなんだから。所詮はアラガミ。結局はアラガミ、ああ、バケモノだって。やっぱり怪物だって」
「……フィムはバケモノ？　フィムは怪物……？」
「誰もがそう思ってる。キミの仲間たちも本当はキミを怖がっているから優しくしているんだ。キミのお母さんも、キミのお姉ちゃん、オロチノカラサビも……」

「みんな……お母さん……お姉ちゃんも……」
フィムの瞳が澱み、虚ろう。
「そうだよ。キミのお姉ちゃんもアラガミだよ。だったらボクたちと同じだ。一緒においでよ。お姉ちゃんもきっと一緒にいてくれるよ」
ネロは凶々しくニチャアッと口角を吊り上げる。
「……一緒に……カラサビ……お姉ちゃんも……」
「さあ、ボクと行こう、フィム。人間なんかよりもアラガミはアラガミと共に在るべきなんだよ」
ネロが小さな手を差し出す。
フィムは心ここに在らず、虚ろな眼差しで、その手を掴もうと――

――

ドッゴォオオオオオオオッッッ

突然に鳴る大響音が白い空間を揺るがす。
「!? な、なにっ!?」
ネロは慌てて見回す。再び白い空間が揺らぐ。立っているのもやっとの振動が襲う。
すると、何もないはずの白い空間に亀裂が走った。
「なっ……!?」
その亀裂は瞬く間に大きく拡がり、ガラスが割れるように砕け散った。
『ピギイイイイイイイッッッッッ!!!』
割れた亀裂から小さな黒く丸い塊りの奇妙な生物が飛び出して来た。
「アバドンッッッ!!!」
その甲高い鳴き声に虚ろな表情だったフィムが正気を取り戻す。
「こ、こいつッ！ ボクの虚数空間の檻を破ったッ!? い、いやまさか捕食したのかっ!?」
驚くネロ。
「アバドンッ！ 助けに来てくれたッ!!」

『ピギィッ！　ピギィッ！　ピギィッ！』
　アバドンはフィムを庇うように、ネロの眼前に立ちはだかりフンス、フンスと息を荒げる。
「えっと、オレを出し抜いたと思ったら大間違いだぜっ！　ウチのフィムにちょっかいかけやがってっ！　このガキンチョ泥棒猫がっ!!　って言ってる」
　フィムがアバドンの鳴き声を翻訳する。
「こ、こんな雑魚アラガミなんかに……ッ！　ふ、ふんっ！　だからどうしたってのさっ！　そんなちみっこいアラガミが助けに来たところで、たかが知れてるっ！」
　ネロは困惑しながらも両手を変形させ巨大な鉤爪を形造る。
「あ～あっ！　お姉ちゃんには手足は無くてもいいって言われてるから、もういいやっ。やっぱり最初からこうしてれば良かったんだ。大丈夫、ちょっとだけ痛いだけだよ、多分ね」
　ジャキンッ！　ジャキンッ！　と鉤爪を鳴らしてニヤリと凶悪に笑う。
「アバドンどうしようッ！　神機持ってないよッ！」
　相手がいきなり臨戦態勢になるも、武器を持ってないことに戸惑うフィム。
『ピギィッ！　ピギィッ！　ピッギィイイッッッ!!!』
　アバドンが口を開く、なんとフィムの神機のヘヴィムーンが出てきたではないか。
「わぁあっ!!　フィムの神機だっ！　アバドン凄～～いッッッ!!!」
　口から何倍もある巨大な神機を取り出したアバドンを見て目を丸くするネロ。
「な、なんだコイツっ！　神機の持ち込みは出来ないようにしたのにっ！　ここはボクが支配する領域だぞっ！　こんなのインチキだっ!!　ズルだっ！　ズルするやつはバラバラにしてやるっ!!」
　顔を真っ赤にし怒り、両腕の爪を振り上げ突っ込んでくる。
　ガキィイイイッッッ!!!
　半月斧が鋭利な爪を受け止める。

「むううッ！　フィムも怒ったッ！　酷いこと、悪いことするの許さないっ!!」
　さっきまでの弱々しかった態度は微塵も無く、威風堂々と啖呵を切るフィム。
『ピギィッ！　ピギィッ！』
　アバドンも飛び跳ね、意気込む。
「ふんっ！　ゴッドイーターの真似事したって無駄だねっ！　キミよりボクの方が何倍も、強いんだカラララァァァァァァッッッ!!!」
　ネロが凶悪に表情を猛獣の如き歪め、両爪を超速で斬り込む。
「!!?」
「ガァァァァァァァァァッッッ!!!」
　白の空間の地面ごと抉り削る、華奢な体躯から想像出来ない剛腕から鉤爪を繰り出し振るう。
　だが、フィムとて負けてはいない。
「たあァッ！」
　ヘヴィムーンを薙ぎ払い、
「てヤァっ！」
　切り上げ、
「えいィッ！」
　叩き付け、
「とオォッ！」
　強靭な鉤爪の連撃を防いでいる。
　しかしながら防戦一方。攻撃に転じる暇も与えない獅子少女の猛攻。
「くっウウウウッッッ！」
　フィムの身体に徐々に斬り傷が増えていく。
「はははははっ！　このままゆっくり刻んであげようか？　それともバッサリいっちゃおうか？　手がいい？　足がいい？　両方いっぺんでもいいよっ!!」
　ネロは抗うフィムを斬り付けながら嘲笑う。
『ピッギィィィィィィィィィィッッッ!!!』

「!?」
そこにアバドンが乱入。口からスタングレネードを吐き出す。
目も眩む閃光が包み込む。ネロは咄嗟に顔を覆った。
「てやぁあああっッッッ」
一瞬の隙を突いてフィムがヘヴィムーンを斬り上げ、ネロを弾き飛ばした。
「チィっ！　コイツっ！　余計な真似をっ！」
「ピッギィイッッッ!!!」
アバドンが再び口を開き、スタングレネードを連続で吐き出す。
弾ける閃光の弾幕がネロを包む。
「あああああああああッッッ!!!?」
度重なる閃光弾の応酬で視神経、聴覚、バランス感覚が滅茶苦茶に翻弄され耐え難い不快感に見舞われる。
さらにそこへ、ヘヴィムーンを構えた天使な少女が勢いよく来襲し、切り掛かってくる。
半月斧の刃を受け止め、回避し防御に徹するネロ。さっきまでとは逆に自分が防戦一方に追い込まれる。
なんとか反撃しようとするが、その度にアバドンが口から様々な何かを吐き出して妨害する。ヴェノムトラップ、ホールドトラップ、封神トラップ、神機専用のバレット、よく分からないアンプル臭い残飯まで。
何で。何で？　何で！　何で自分がここまでやられているっ!?
簡単な仕事の筈だった。アイツが、忌々しいあの黒い生意気なアラガミモドキがいない間に、ゴミクズに等しい人間どもを内側からズタボロにする。手始めに半端な人型アラガミのガキンチョを洗脳して徹底的に嬲って虐めてやろうと。
なのに。
この有り様は。
失敗したら、またネルウァお姉ちゃんに怒られるじゃないか。

防戦一方、逆転していた状況、白い獅子髪少女の気配が膨れ上がる。
爆発する殺気、暴流する偏食場パルス。
白の少女の身体が大きく膨れ上がり変貌する。
その姿が巨大な荒ぶる白獅子の異形に形作られた。

２８　無垢なる瞳

白い幼かった少女は、巨大な身体を持つ白い獅子へと姿を変えた。
鋭い牙列の顎門を開き、濃淡な白灰色を滲ませる四本の角を携え、結晶化したオラクル細胞の大鎧を纏った巨軀のアラガミ。
咆哮。身を震わせる衝撃波を発生させ、荒々しく吼え猛る。
『ウガアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!　モうイいッ！　ミんな引キ裂いテるヤるッ！　バラバラにシてやルッ！　オ前もソいつもッ！　外の人間どモ全部残ラず喰イ殺しテやルッッッ!!!』
凄まじい衝撃波の怒轟がすべてを押し返す。盾でなんとか受け止めるフィムが吹き飛ばされそうになり慌てて体勢を整える。
「えええええっ!?　変身しちゃったあっ！　どうしようッ!!」
白獅子の周囲に無数の結晶体が創造され、結晶から何本もレーザー弾が放たれる。
「くうぅっ!!」
降り注ぐレーザーの猛攻を必死に防ぐフィム。
そこに追撃するように白獅子が突貫。
強靭な爪の右腕の引っ掻き、聳える角から抉る攻撃、さらに左腕から引っ掻き、再び角攻撃と連続しての近距離攻撃を繰り出す。
迫り来る、喰らえば致命の死線をシールドで防御するが、耐えられず吹っ飛ばされてしまう。
「きゃあああああああッッッ!!!」
地面を穿ち、叩きつけられ、勢いよくバウンドし転がるフィム。
『ピギィッ！　ピギィッ！　ピギギィッ!!』

アバドンが倒れるフィムにダッシュで飛んでくる。
「うぅ……ア、アバドン……えっ？　フィ、フィムも変身できるの？　変身すれば強くなる？　ど、どうやるの!?」
白獅子はゆったりとした強者の貫禄の足取りで歩いてくる。
『何を今さらコソコソと……モうボクにはグレネードやトラップなんヤらは通用しナい。今のボクはとテも機嫌ガ悪いンだ。楽にハ死なセなイ』
フシュルウゥゥと熱波の息を吐き、迫る凶獣。
『ピッギッ！　ピギギィィッ！　ピギピギピギィィィッッッ!!!』
「歌う？　お姉ちゃんから教わったあの歌を歌えばいいの？　うん、分かった！　フィム、歌うッ!!」

そしてフィムは両手を重ねて、天に祈りを捧げるように、高々と歌う。

〜〜〜〜Ａｊｅｋｅ（アジェク）　ｖｅ??（ヴェキ）ｅｒａ（ラ）　Ｗｅｔｓｃｈｅｒａ（ウェスチェラ）
ｔｒｏｎ（トローン）〜〜〜〜

響き合うメロディ。紡がれる聖詠。勇しくも優しげなハーモニー。
眩ゆい光の軌跡がフィムとアバドンの両者を覆う。
煌めき一矢纏わぬ輝く姿となるフィム。アバドンのボディが金色に輝き、流れる光の粒子となり、フィムの幼くも可憐な褐色の裸身を緩やかに纏う。
しなやかな両サイドの脚先に黄金色に照り返す機械的なバトルレガースが装着され、両腕にも金色のメタリックなガントレットが装着される。
腰先から包むようにアーマードプロテクターが組み合わさり胸元を覆い、背部にも二基のバーニアユニットが取り付けられる。
『Ｓｙｓｔｅｍ　ＡＲＭＳ　”Ｗｅｔｓｃｈｅｒａ”　ｃｏｎｖｅｒｔ』
頭部にメカニカルなヘッドギアが形成され、フェイスガードから羽

のようなウィングライザーが伸び上がる。
極彩色の鮮やかな空間に身の丈を優に越す超巨大な両鎚のバトルハンマーが顕現する。
サーミ神話の雷神ホラガルレスの聖遺物『ウェスチェラ』。悪霊に裁きを与える黄金の戦鎚が電光を発し、雷震を漲らせた。
小さな可愛らしい掌がポールを力強く掴み、握り込む。
華奢な二の腕で軽々と縦横無尽に重厚なハンマーを振り上げ、豪快に風を切り旋回させる。
眼前の邪なる敵に正義の鉄鎚を下すために勇しく堂々と迅雷を迸らせ構えた。
その威姿は絢爛舞踏、美しき戦士、戦地を翔る万雷の戦乙女。
まさに、戦姫絶唱。
今ここに新たなる『奏者＝装者』が誕生した。

遍く虹彩の閃烈から爆誕した金色の武装少女を目の当たりにしたネロは呆気にとられ茫然とした。
何が起こったかのかまったく判らない。
だが、感じるオラクルのエネルギーはとてつもなく強烈であり、本気の力を解放した自身さえも呑み込むのでないかと思えるほど凄まじい。
ネロは憶えている。
この力は前にも感じた。
それは眩しく鮮烈で、強靭で熾烈で、屈辱的で畏怖を伴う。
煩わしい過去の記憶。
脳裏に過ぎるは、黒鉄を象る異能のアラガミ。

『同じ〝力〟……っ!?　マさか、そンなコとが……っ!?』
知らず知らずに脚が竦み、退いていく。

「わあああッッッ、凄い凄いっ！　フィム、本当に変身しちゃったッ!!」
『ピギ、ピギ、ピギギィィ……あ～あ～、やっと繋がったか。聴こえるかフィム？』
「えっ!?　カラサビお姉ちゃんっ!?」
金色のメカニカルなプロテクタースーツとでっかいゴールデンハンマーに驚くフィムが更に驚く。
『今、フィムと適合したアバドンを通じて会話している。あまり時間的に余裕はないみたいだから手短に説明するぞ。フィムはアバドンと融合して簡易的だがオレの力を一時的に共有している。解るな？　感じるだろう？』
フィムの意識に語りかけるオロチノカラサビ。
「お姉ちゃんの力……うん。感じるよ。凄く力強くて、とても暖かい……身体全部がお姉ちゃんに包まれて、抱っこされてるみたい……」
フィムが目を閉じて体を愛おしそうに抱きしめる。
『今のその力なら、目の前のソイツを必ず倒すことが出来る。やれるか、フィム？』
「……ん、大丈夫……フィム、出来るっ！」
『……よし。だったらＯＫだ。なぁに、オレが一緒だ。心配ないさ。さあ、やってやろうぜッ！』

「うんッ！」
オロチノカラサビの言葉にしっかりとフィムは頷いた。
その純然たる煌めく瞳に真っ直ぐ対する敵の姿を映し捉えて。

『……なンだヨ、ソの力……クっ、騙さレるモんか。ハッタリ、コケ脅し、所詮ハ紛イ物の力だ。ボクの方が絶対強イ。ソれヲ思い知らセてヤるッッッ!!!!』
ネロは巨体を翻し、バックジャンプから後ろに飛び退きつつ前方中範囲に複数の紫雷球を撃ち落とす。
着弾した軌道上に爆発するように結晶棘が爆散する。
結晶の爆発の中から、黄金色のプロテクターを纏う少女が飛び出す。
『ナッ!?』
”爆光雷撃”
振り降ろされる雷を纏う巨大なハンマーが爆発する。慌ててステップを踏み、空宙を蹴り上げ回避するネロ。しかし、爆ぜ荒れる雷撃の余波が体中を焼き焦がす。
すかさず蹲る体勢をとった後、咆哮とともにブースターキャノンから追尾レーザーを発生させる。レーザーは全方位に飛ぶが、黄金の少女は残像を残しつつ素早く躱し当たらない。
レーザーの猛威を掻い潜り、素早く張り付くように追従してくるフィム。
”撃滅轟雷”
連続で叩き付けられる豪雷のハンマーをなんとかガードするネロ。
体躯に軋むように響く痛烈な剛鎚と雷の衝撃。

『〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッ』
堪らず鬣をブレードに変換、攻撃。四肢の腕からも光刃のエフェクトを発生させ、左右に薙ぎ払い結晶弾を振り撒き放つ。
黄金の少女を飛び上がり頭上から捕食のチャンスとばかり口裂を開け噛み付くも、既(すんで)のところで躱され、見事なバック宙攻撃でカウンターのハンマーが側面に打ち込まれた。
『ンガアアアアアアアアアアッッッ!!!?』
ダメージを負いながらも態勢を無理矢理変え、此方もバク宙しながら尻尾で攻撃し、追撃をしようとした少女の攻撃を回避し、正面に紫雷球を発射し牽制。
背部のブースターからを排熱を放出、発生させ、ターゲット目がけて超速突進する。
お互いに打撃の連打、連打、連打。回避、ガード、攻撃、カウンター。
されど、攻勢は黄金少女にあり、白獅子は劣勢。見る間に身体中の装甲が軋みヒビ割れ破壊されていく。自ずを奮い立たせるように咆哮を谺し、結晶弾を生成、全方向にレーザーを拡散し放つ白獅子。
力を全開に解放、更なる結晶弾を無数に創り、円形に何重にも整列させ、自身の周辺を無尽のレーザーの弾幕で陣取る白獅子に対し、臆することなく、回避することもなく真正面から突っ込んでいく黄金少女。
巨大ハンマーを高々と勢いよく振り上げ、身体を捻じり振りかぶるモーション。
”雷砲裂戒”
凄まじい衝撃波の雷嵐に薙ぎ払われ、レーザー諸共、結晶が全て木っ端微塵に破壊される。
暴風の衝撃波で巨体が浮き上がり、まともに身動ぎ出来ないネロ。
信じられない。自分が完全に押されている。
コイツは、コイツらは一体何だ？　何なんだ？　本当に自分と同じアラガミなのか？
認めない。認められない。認めたくない。

気付いたら、いつの間にか己れの懐に深々入り込んだ金色に輝く少女が巨大な戦槌を思い切り振り構えていた。

『今だっ、フィムッ！　解き放てッ！　全てをッ!!』

「うんッ！　お姉ちゃんッ!!」

黄金の戦鎚”ウェスチェラ”の武装甲が唸り上げ幾重にも展開し、エネルギーの雷光が噴き上げ、積乱流の渦を巻き起こす。

『「飛べよォッ！

このッ！

奇跡にッ!!　光あれえええええええええええッッッ!!!」』

”天絶降神御雷（あまたちふるみかずち）”

――――――――――すべてを雷（いかずち）の極光が呑み込んだ。

２９　慈悲なき舞台

「フィムッ！　目を覚ましてくれっ！」
「まったく起きる気配がない……一体何が起きてるんだ……」
「脈拍、心拍数、体温、身体的異常は見受けられない……これは精神的な何かの干渉を受けているのかもしれない……？」
　廃虚の建物の一角。
　帰投するため眠っているフィムを起こそうとしたが一向に目覚める気配がない。
　まるで童話の眠り姫のようにスヤスヤと眠りについたまま。
　しかも胸に抱いたアバドンも同じように眠ったように動かないではないか。
　これはただ事ではないと女リーダー、ルル、クレアたち女性メンバーは混乱していた。
　そこにエイミーから通信が入る。
『……皆さん、一先ず眠っているフィムちゃんを連れて帰投してください。メディカルチェックで検査をして何が起きたかを……えっ!?　み、皆さん気を付けてくださいっ!!　その場所に、もの凄い濃密度の偏食場パルス発生の兆候反応がッ!!』
　突如、何も無い空中の空間がバチバチと放電し、ヒビ割れるように亀裂が疾った。
　勢いよく空間が割れ、激しく砕け散ると、凄まじい雷光の稲光りとともに白い巨軀の獅子のアラガミが飛び出して、廃虚を破壊しながら

吹き飛び瓦礫に激突した。
「きゃあッ!?」
「なっ、何だ、これはっ!?」
「くっ……っ!?」
巨大アラガミが衝突する衝撃に驚く女性メンバーたち。
瓦礫に埋もれたアラガミらしき場所一帯が電流の余波を発しつつ粉煙を上げて燻っている。
すると、女リーダーが介抱していたフィムがパチクリと目を覚ました。オマケにアバドンも同じく目を覚ましたようだ。
「フィムっ!? 目が覚めたっ!?」
「お母さん……みんな?」
愛らしい眼差しで心配そうに見つめる女性陣を見上げる。
その時、廃虚に埋もれていた白獅子のアラガミが瓦礫を爆砕して飛び上がりボロボロになった身体を引き摺って起き出した。
『が、ガァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ!!! ゆ、許サな、イ……こ、殺す、コロス、コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスウウウウウウウウッッッッ!!!』
「……お母さん、みんな、離れていて。まだ、終わっていない。アバドンッ!」
フィムがスッと起き上がる。胸元に抱いたアバドンを撫でて声を掛ける。
『ピギィッ!』
アバドンが鳴いた瞬間、金色に輝き、眩ゆい光の柱がフィムを包み込んだ。
輝く光柱の中から、巨大な黄金の戦鎚を携えたゴールドなプロテクターを纏う幼げながら可愛く美しい天使な輪っかを持つ勇ましい武装少女が出現する。
「え……フィム?」
「なっ……、フィムが変身した……?」
「えっ? えっ? フィム? あれ?」
様変わりした少女に呆気に取られる女性陣が見守る中、白い獅子の

アラガミと黄金少女となったフィムが飛翔し空中でぶつかり合う。
『な、何かとんでもない未知のエネルギーの数値が叩き出されていますが、ってええええっ!? フィムちゃんっ!? い、いったい何が何やら……ッ』
「それは私たちも知りたいが……とにかく凄いことになってるのは確かだ」
「フィム、凄い……」
「あれって、もうゴッドイーターの域を超えてるんじゃ……?」
エイミーがオペレーションしながら混乱し、女性陣たちも戸惑う。
その間も両者の闘いは熾烈を極め、大気を揺るがす。
やがて両者ともに地上に降り立つが、荒く息を吐き疲労状態が著しい様子だ。
「はぁはぁ……お、お姉ちゃん……身体が重い……すごく疲れたよう……」
フィムがハンマーに寄りかかり力無くグッタリする。
『……うーむ、いきなりの変身だったからな。まだ体が馴染んでないんだろう……こうなったら作戦第二プランを考慮に……』
その時、白獅子を中心に無数の白蝶が現れ、人の形を成した。
「あ、あれはっ!?」
白い蝶群から妖しい笑みを称えた白いトーガを纏う美女が創りだされる。
『ネ、ネルウァお姉ちゃん……ッ!!』
「ふふふ、頼んだおつかいから帰ってくるのが随分遅いから迎えに来たわ。ネロ」
その白い美女は以前にクリサンセマムのメンバーたちの前にも姿を見せた謎の人物ネルウァ。
『あ、アの、そレは抵抗しタあイつラが思ったより手強くっテ……で、でモっ! アイツらずルいんダヨーッ! 変ナ”力”で変身スるシッ!! ボクは一生懸命闘っテ……ッ!!』
白獅子は巨軀を怒らせ吼える。

「ネロ？」
白い美女ネルウァが白獅子の名を呼ぶ。
『うっ……ご、ゴメンなサい……失敗しマしタ……』
白獅子は身をビクッと震わせ、その場で蹲り身を伏せた。
まるで主人に怒られてシュンと頭を垂れる飼い犬のように。
「ふふふ……別にいいのよ。あわよくば人型アラガミのあの少女を交渉材何なりに使って『彼女』を此方に引き込めれば、と思ったけど……上手くいかないものねぇ？」
ネルウァは微笑みながら伏せる白獅子の鬣を優しく撫でる。
「……人型アラガミ。それは、フィムか。詳しく話を聞きたい。あの子の保護者として」
女リーダーがヘヴィムーンを構え、疲労状態のフィムを庇うように立ち塞がる。
「……彼女、とはオロチノカラサビのことか？　だったら身過ごすことはできないな、少々付き合ってもらおう」
「……要するにフィムを利用してオロチノカラサビを誘(おび)き出そうとしていたのね。そんな姑息で卑怯な真似、絶対に許せない……っ！」
ルルがバイティングエッジを、クレアがチャージスピアを構えた。
「あらあら……私は戦いに来たのではないのだけど……ふふふ……少しだけ遊んであげても構わないわ。ただし、この子たちが相手だけど」
そう言ってネルウァは手を翳す。
地面に無数の歪みが生じる。
ブクブクと泡立ち、ドロドロと溶け出し、グチャグチャと絡み合う。
それは瓦解した建物であったり、崩れた岩盤であったり、廃棄された車両であったり、枯れた樹木であったり、転がるただの石ころであったりした。
それらがまるで粘土細工の工作の如く互いにくっ付き寄り合わさり、奇妙に形を変えながら、幾つもの夥しい異形たちの姿が創りだされる。

四足の甲殻に巨大な大砲を備えた機械獣のような出で立ちのアラガミ。『ラーヴァナ』
鬼の面と風貌を備えた片腕が銃身となっているアラガミ。『ヤクシャ』
そのヤクシャをさらに巨大化させ四本の鉤爪と銃身の腕を合わせたアラガミ。『ヤクシャ・ラージャ』
金色の近代兵器の重装甲戦車を思わせる翡翠の仮面のような人面と巨体を合わせ持つアラガミ。『テスカポリトカ』
背中に発電機のタービン、尾にアンカーのような部位を備えたワニのようなアラガミ。『ウコンバサラ』
巨大な狼の姿をしており、前足は頑強なガントレットで覆われているアラガミ。『ガルム』
鳥のような鮮やかな羽と女性的なフォルムを備えており、シユウ神族に酷似したアラガミ。『イエン・ツィー』
石膏像のような不気味な能面を貼り付けた巨象のように巨大な体躯をしならせ震わせるアラガミ。『デミウルゴス』
髑髏の鉄仮面のような風貌に、筋骨隆々とした黄金の体躯を備えているハンニバルに酷似した竜人型のアラガミ。『スパルタカス』
既存のサリエル神属をよりさらに人間じみた風貌にした妖艶な雰囲気を醸すアラガミ。『ニュクス・アルヴァ』
蟷螂のように巨大な一対の鋭利な鎌状の爪に、背中には繭状の外殻で包まれたコアを持つ、四本の足の不気味なアラガミ。『チェルノボグ』
ステップを踏み、泡玉をジャグリングするピエロの道化師のような奇妙奇天烈なアラガミ。『アレルッキーノ』
大量のコクーンメイデンを従える蜘蛛を思わせる体躯、コクーンメイデンを巨大化させた悍ましいアラガミ。『クィーンメイデン』
空を飛翔する巨大な一対の翼を持ち、砲身型の器官が身体のいたる部位から生えている青紫色の西洋竜型アラガミ。『ヴォルトゥムナ』
そして、それらを見下ろすように背後に佇む小山ほどの体躯に複

眼・触手を持つ、アラガミの中でも群を抜いて奇怪な超巨大アラガミ。
『ウロヴォロス』
まるで魔法のように、アラガミの大軍団が即座に創り出された。
「ふふふ……さあ、楽しい演劇を始めようかしら」
ネルウァは愉しげに微笑みを浮かべた。

３０　嵐を切り裂いて　～闘志の閃き～

八千八声　鳴いて血を吐くホトトギス。

――――少女の歌には、血が流れている。

アラガミの山、大群、大軍団、中型、大型、追随する小型も含め、地表を舐め尽くすとばかりに軒を連ねる。

「これは……っ！」

「な、何だ、この数のアラガミは……っ!?」

「感応現象で呼びせたのではなく、無機物からアラガミを創り出したのっ!?　そんな……っ!!」

驚愕するクリサンセマムの女性メンバーたち。

数体程度ならともかく、あまりにも数が多過ぎるアラガミどもに絶句するしかない。

「ふふふ……どうでしょうか？　圧巻でしょう？　このアラガミたちの大行進っ！　とても役に立ってくれたわ。あの人間、ええと……名前は、そうそう、犬なんとか言ったかしら？　まあ、どうでも

いいわ。研究成果はとっても満足する出来だったから」
ネルウァは満足そうに邪悪に微笑う。
「……犬？　研究？　それはもしや犬飼のことなのか？　まさかイルダの言っていた研究データを盗んだというのは……っ!?」
ルルが訝しんだ後、ハッとした顔になる。
「……研究データ。確か、『侵食融合細胞』という名前だけが、残されたデータベースからサルベージされたとか……それが盗まれた研究……犯人は貴女ということですか……ッ！」
クレアも考え、合点が入ったように頷き結論づけ、ビシリと指先を突き付ける。
「……人間の知識は時に神の領域に達することもあります。オラクル細胞然り、神機然り、さすが禁断の知恵の果実を食したモノの末裔……存分に有効活用させて貰いますよ、ふふ」
無数のアラガミをまるで操り人形の如く自在に従えるネルウァ。
アラガミたちの群影がじわりじわりと、にじり寄る。
これではこのまま文字通り蹂躙、嬲り殺しにされてしまうのではないか？
最悪な結末が脳裏を過ぎる。

「……みんな、を、守るッ……」
フィムが戦鎚を構え立ちはだかるも、その足取りはフラつき覚束ない。
『……ムウウウ、万全の状態のフィムならば、この程度のアラガミ共ならやれたんだが……オレの力を大量に消費してしまうが、やはりココは作戦第2プランを発動するしかないなっ！　やるぞ、アバドンっ!!』
『ピッギィッ！』
フィムのヘッドギアから、にゅにゅっとアバドンの頭が伸び生え、口を大きく広げる。
その口から丸い塊りの物体が次々と吐き出される。
その数三つ。

そのひとつは、形を変えて白い体色のアバドンと同じ姿形をしたアラガミ『アモル』となる。
二つ目の塊りは、モコモコした身体とムニムニした兎のような白黒のアラガミ『ムニマロ』となる。
三つ目の塊りは、蝙蝠の翼が生えた単眼の目玉、ギザ歯を持つ赤い奇妙な謎のアラガミ『ナゾメイク』となる。
アバドンから生み出された三体の小型アラガミが、それぞれクリサンセマムの女性ゴッドイーターたちの元にダッシュし向かう。
「……白いアバドン？　いったいこれは……」
『ピギィッ！　ピギィッ！』
クリサンセマムの鬼神にはアモルが。
「わぁっ！　可愛いっ！　でもこれもアラガミなんだよね？」
『キュポッ！　キュポポポッ！』
クレアにはムニマロが。
「むむっ！　この小型アラガミたちは、まさか希少種っ!?　アバドンと同じく滅多にお目にかかれない珍しいタイプのアラガミかっ！」
『ナゾ？　ナゾナゾ？』
ルルの下にはナゾメイクが。
三人の女性神機使いに三体の小さなアラガミたちが追従する。
『さあ、みんなっ！　歌うんだっ！　その小型アラガミたちがみんなに力を与えてくれるっ！　絶望に立ち向かうんだっ！　自分自身の、生まれたままの感情を隠さないでっ！　生きることを諦めるなっ！』
フィムのヘッドギアアバドンから女性メンバーたちに語りかけるオロチノカラサビ。
「……この声は、オロチノカラサビ？」
「アバドンから聴こえる、のか……？」
「歌う？　不思議なメロディがこの子たちから伝わってくる？　これを歌えばいいのね？」

このまま絶望に手を拱いていてはならない。闘わなければ。
そして意を決した彼女たちは歌う。
声高らかに。

〜〜〜〜ザ　ロア　オブ　ザ　ファラウアナンガ
Te（テ）　Awhiorangi（アフィオランギ）　tron（トローン）〜〜〜〜
優しい温かな慈愛に満ちた聖詠を紡ぐ女リーダー。
白いアバドン、アモルが輝き淡い緑光の粒子となり、クリサンセマムの鬼神を包み込む。
長い白銀糸の髪が緩やかにたなびき、一糸纏わぬ生まれたままの裸身となり、豊満な肉体美を曝け出す。
緑樹色のメタリックガントレットが掌から腕に装着され、逞しくも艶やかな脚先からメカニカルなバトルレガースが組み上がる。
括れた華奢な腰回り、母のような温もりを持つ女性的な双丘を緑色のプロテクターが覆い、背中から枝幹のようにバーニアユニットが装着される。
『Ｓｙｓｔｅｍ　ＡＲＭＳ　”Ｔｅ　Ａｗｈｉｏｒａｎｇｉ”ｃｏｎｖｅｒｔ』
メタルグリーンのヘッドギア、フェイスガード、側頭部に耀葉の形を模したグリーンリーフのウィングライザーが形成されていく。
空間に超巨大な緑黄の両刃のバトルアクスが顕現する。
オセアニア、マオリの神話に語られる大地と森の地母神ターネが天と地をふたつに割った聖遺物。神斧『テアアフィオランギ』。
大樹の幹の如く太く雄々しい両刃の大戦斧をガシリと握り締め、すべてを薙ぎ払うよう豪快に掲げ上げ振り回す女リーダー。

豊穣たる大地の女神を体現する勇美なる戦乙女が誕生した。

～～～～ｓｈｍ（セヘム）―ｈｒ　ｓｇｍｈ（セゲメフ）　ｈｅｄｊ（ヘージュ）―ｕｒ（ウル）　ｔｒｏｎ（トローン）～～～～

クレアが紡ぐ清らな歌声。心安らぐ聖詠。清流のハーモニー。

ムニマロの身体が蒼光の粒子となり、惜しげもなく裸体を晒すクレアの滑らかな曲線を描くボディを覆う。

華奢な腕先から水色のメタルガントレットが装着され、しなやかな肉付きの良い魅力的な脚先をブルーのバトルレガースが纏う。

大きな双ふりの膨らみが弾み、アーマーが支えるように装着される。腰元から丸みある臀部へと蒼いプロテクターが取り付けられていく。

『Ｓｙｓｔｅｍ　ＡＲＭＳ　”ｈｅｄｊ―ｕｒ”　ｃｏｎｖｅｒｔ』

フェイスギア、イヤーガードが順次に造られ流れる水が形を得て、アクアブルーのウィングライザーが頭部に添えられる。

空間に遍く大量の水流が激しく渦を巻いて、それらがひとつに合わさり長大流々な蒼き一式の槍となる。

古代エジプト神話にて、遥か原初の海の一滴より取り出されたホルス神の聖遺物。霊槍『ヘージュウル』。

水色のガントレットが蒼き神槍の長柄を握り、演舞を舞うように華麗に流麗に振るい陣（た）て廻り、勇しき涼やかなる蒼碧の乙女闘士クレア

は構えた。

～～～～gladius（グラディウス） versatilis（ウェルサティリュウス）
lahat（ラハト） haCherebb（ハヘレブ） tron（トローン）～～～～

紡がれるルルの凛々しい歌声。力強い聖詠。燃える魂の旋律。
ナゾメイクの身体が光り輝き紅光の粒子となり、裸体のルルを取り巻き包み込む。
両腕に真っ赤なガントレットが形作られ、両脚にも燃えるようなバトルレガースが覆い武装される。
スレンダーな胸元から腰元まで炎が渦巻き、太陽の如き紅き光がプロテクターとなり纏い、背部にバーニングレッドのブースターが装着される。
『Ｓｙｓｔｅｍ　ＡＲＭＳ　”ｌａｈａｔ　ｈａＣｈｅｒｅｂｂ”　ｃｏｎｖｅｒｔ』
炎の輪郭がメタリックレッドなヘッドギア、フェイスアーマーを創造、立ち昇る火の粉がウィングライザーとなり装着される。
空間に火炎流が車輪の如く吹き荒れ、ルルは迷わず炎を両の手で掴み上げると、二対の刀剣が形を成して引き抜かれ現れた。
創世記の大天使、智天使ケルビムの回転する炎剣にして、バビロニアの軍神マルドゥークが持つ聖遺物。炎の神剣『ラハトハヘレブ』。
二対の燃え盛る神剣を斬り上げ、薙ぎ払い、柄元を合体させ両刃薙

刀に変形させ巻き上がる炎をバックに紅き烈炎の女戦士ルルが堂々と構えた。

四人の戦乙女の装者が一同に集う。
「みんな、変身しちゃった……っ！　フィム、びっくりしたっ!!」
ウォーハンマーを持つ金甲のヘビィーファイターのフィムが驚いた。
「とても強い力を感じる……これがオロチノカラサビの力？」
「確かに凄いパワーだわ……まるで全身が神機になったみたいにオラクルエネルギーに溢れている……」
「……ああ、これならアラガミどもと戦りあえるだろう。しかし、なかなかに際どい格好だな。だが、センスは悪くない」
碧樹のバトルアクスラーの女リーダー、蒼流のスピアランサーのクレア、紅焔のデュアルブレーダーのルル。
彼女たちの周囲を取り囲んでいたアラガミの大軍団が怯み、背後に退く。
それは自分より強い捕食者に怯えた動物のように。
「……これは……いったい……何というエネルギーの輝きかしら……未知のオラクルエネルギー？」
ネルウァがクリサンセマムの女性神機使いたちが様変わりした姿に隠すことなく驚嘆する。
『な、なンでアイツら全員、変身しテるんダヨッ!?　ヤバイよ、お姉ちゃんッッッ』
白獅子ネロはプルプル身を震わせる。

あの人型アラガミの少女でさえ、とんでもない力を持っていた。自分がズタボロになった程なのに、それが三人も増えた。
「……この感じる力は彼女の、オロチノカラサビの力のようね。他者にも己れの力を与えられる、それもなんて規格外。造ったアラガミたちが本能で怯えて……私の予想の斜め上を遥かにぶっ飛んでいる……まったく……ふふ、益々、気に入ったわ。その力、たっぷりと見せてもらいましょう」
『お、お姉ちゃン……』
ネルウァは恍惚とし、ネロはそんな姉に戸惑いを隠せない。

『み、皆さーんっ!! 皆さんからも凄まじいパワーの反応を感知してますっ! どうなっちゃったんですか、これっ!? オペレーションどころじゃないですよっ!!』
エイミーが通信していると、傍から興奮したキースも通信してきた。
『おーい、みんなっ! 無事? 何だかヤバいエネルギー反応たくさん感知したと思ったら、みんなの方もスッゲェヤバかったッ! たぶん、みんなのそれは極限まで高まったオラクルエネルギーと謎のエネルギーがセットになって絶妙なバランスで共鳴してるだっ! この謎の何だか解らないエネルギーは、『フォニックゲイン』て仮称するよっ! ビビッと来たっ! オロチノカラサビと酷似した数値データが観測されたけど、訳分かんない凄いパワーってことは分かるッッッ』
早口で捲し立てるキース。
遠巻きに様子を伺っていたアラガミの軍団が一斉に雄叫び、再び此方に歩みを始める。

「……ッ！　アラガミがッ!!」
「フィムも戦うっ！　お母さんっ！」
「やるしかないようだな……っ！」
「今なら闘える……みんなを守るッ!!」
クリサンセマムの装者たちが武器を構え、迫り来るアラガミの群れに立ち向かう。

美しさと気高さを備えた戦乙女、戦女神。
新たなる『奏者＝装者』たちが奇跡の産ぶ声を今此処に奏で、爆誕した。
戦姫絶唱ッッッ!!!

――運命を切り開け。

31　黒の一閃

新たなる力を得たＧＥたち。
無数のアラガミ、それらを操る謎の敵。
く
一にして全なるモノが死を灯す。
「ウオオオオオオオオオッッッ」
緑樹のプロテクターを纏うクリサンセマムの鬼神のバトルアクスが地上のアラガミの群れを薙ぎ払う。
「タアアアアアアアアアッッッ」
天使な黄金少女フィムのウォーハンマーもアラガミの大群を討ち払う。
「セリャアアアアアアアッッッ」
蒼流の鎧に身を包むクレアがスピアを構えアラガミの軍団に突撃して貫いていく。
「ハアアアアアアアアアッッッ」
炎に包まれた双剣を振るい、次々とアラガミを斬り裂く赤火のプロテクターのルル。
並み居るアラガミが悉く四人の神機装者たちに倒されていく。
『ああっ！　あンなにイたアラガミの大群がドんどん減ラされテルっ！　なんだヨっ！　あの力っ！　チートだッ!!』
「ふふふ……素晴らしい。即席の紛い物とはいえ、あれほどのアラガミをモノともしないとは……もっともっと見せてちょうだい」
ネルウァが手を翳す。
すると、倒されたアラガミが補充されるように新たに創り出され

る。
顔が割れたコンゴウ種『ハガンコンゴウ』
女神像の彫刻面を持つ不気味なアラガミ『プリテヴァマータ』
サリエル神族の男性体『アイテール』
青い海神武装重戦車『ポセイドン』
火炎を纏う紅いシユウ神族『セクメト』
ボルグ・カムランのような外骨格各部に淡い紫色のオーラのようなものを纏っており、手は捕食形態の神機のようなアラガミ『スサノオ』
アルダーノヴァのプロトタイプ人工アラガミ『ツクヨミ』
背中に巨大な双腕を生やした黒豹の姿をしたアラガミ『クロムガウェイン』
密林の原住民じみた派手な風貌を備えており、異様に長い鼻砲を持つアラガミ『カバラ・カバラ』
長い三本の尾と腰から灯される六本のオラクルの炎を持つ狐型のアラガミ『キユウビ』
ウロヴォロスと同形統の超巨大なアラガミ。頭部に当たる部分に女神像に類似した物体がある『アマテラス』
次から次へと瓦礫や廃材、地面すら、あらゆる物質がアラガミと化し、場は、より混沌したものへと移り変わりいく。
「いったいどれだけアラガミを作り出すんだッ！　ハぁアアッ!!」
「アラガミっ！　いっぱいっ！　とりゃあーッ!!」
「でもっ！　この程度ならっ！　イケるっ!!」
「まだまだっ！　まだだっ！　舐めるなっ！　アラガミどもっ!!」
倒しても、倒した側から新たなアラガミが作り出される。
そのアラガミを倒せば、また別のアラガミが続々と湧いてくる。
まさにイタチごっこ。終わらない。このままでは、いくらなんでもキリが無い。されども戦いは止まらず、武器を振るう手が休むことはない。
「ふふふ。さあ、どんどんいきましょうか？　幾らでも小道具は作り出せますよ。踊りなさい、私の舞台で。人形たち。ほら、ほらほらほらほらほらっ！　あはっ、アハ、アハハハハハハハハハハハハ

ハッッッ!!!」
嘲笑うネルウァ。マリオットを操る傀儡師さながらに両手を振るう。
「ぐうううっ!? か、体が重い……っ!?」
「むううぅん〜っ! ま、また、つ、疲れてきた〜っ!」
それまで、優位に攻勢を築いていた神機装者たちの動きが、ぎこちない緩慢としたものになってしまう。
「くっ!? こ、これは……っ!」
「な、なんだ……っ!? 急激に気怠い疲労感が身体全体に……っ!!」
居並ぶアラガミをバッタバッタと倒していたのに、今や迫り来る攻撃を躱し防ぐだけで手一杯の有り様だ。
「……やはり。思った通りね。貴女たちのその力、実に凄まじく恐るべきモノ。でも、長時間は肉体に負担が掛かりすぎて耐えられないようね」
目を細め、動きが鈍くなったゴッドイーターたちを高台から見下ろすネルウァ。
「ザマァみろっ! ズルばっかりしてるから罰が当たったんだっ! お姉ちゃんっ! そのまま、アイツらヤッちゃえっ!!」
いつの間にか人型に戻って、得意満々に隣りで意気込むネロ。
「……仕方ないわね。そろそろ遊びは終わりにして幕引きにしようかしら」
ネルウァが手を翳す。無数のアラガミたちが、女リーダー、フィム、クレア、ルルたちを囲い込み、埋め尽くすように迫る。
ここまでなのか。このまま終わってしまうのか。
そう誰もが思った時――――

〜〜〜Imyuteus(エミュテウス)〜〜amenohababakiri(アメノハバキリ)〜〜tron(トローン)〜〜〜

唄が聴こえた。

「千ノ落涙」

空間から大量の剣が具現化して射出され、アラガミの大軍団を斬り裂いた。

「こ、これは……ッ！」

「アラガミの大群が……ッ！」

防戦一方だった神機装者たちが驚愕する。

「影縫い」

大量の黒塗りの刀身がアラガミたちの影に突き刺さると、アラガミたちの動きが弛緩し、固まり静止する。

「黒ノ一閃」

黒いプロテクトアーマーを纏う影が、宙空より飛翔、超速滑空。

黒鋼のガントレットに持つ大剣が唸り上げ、斬撃を放って所在無さげに立ち尽くすアラガミの大群を横並び一辺倒、鮮やかに一閃。両断。

漆黒のウィングスラスターの排熱口が展開し、エネルギーの余波が放熱される。

爆散、散り逝くアラガミの群れ。

黒鉄の武骨な大曲刀を携え、地上に緩やかに舞い降り立つ全身黒一色の異形の少女。

アラガミたちが一斉に少女に襲い掛かる。

「逆羅刹」

瞬時に片手逆立ち、艶やかな両の脚を回転させ、鎌首状の脚部ブレードで襲い来るアラガミどもを連続的に切り刻む。

「無想三刃」

曲刀を大上段に構えた状態で脚部ブレードのスラスターで勢いをつけ、縦回転しながら手にした大剣と二つの脚部ブレードでアラガミどもを斬り裂きまくる。

「天ノ逆鱗」

空中に高々と軽やかにバックジャンプし投擲した大曲刀が、より巨大化し、スラスターを爆射。たじろぐアラガミたちに向かって一気に極大剣を蹴り放ち、纏めて貫き破砕する。

「黒炎鳥極翔斬」

大曲刀を双剣に分離させて噴き上がる黒炎を放出、自身を巨大な雄々しい黒い火の鳥と化して突進する。けたたましく嘶く煉獄の黒鳥が大翼を広げ、無数のアラガミどもを根刮ぎ焦熱の渦中に呑み干し、尽く塵芥へと変える。

大地を、空を埋め尽くしていたアラガミの大軍団が消失した。
すべて。

「……遅くなってすまない。少しばかり向こうのアラガミたちを掃除していた」

漆黒のプロテクターを纏う異形の角先を持つ少女、オロチノカラサビが、クリサンセマムのメンバーたちに声を掛ける。

「カラサビお姉ちゃんッッッ!!!」

フィムがハンマーを放っぽり出し、勢いよくそのアーマー越しの豊満な膨らみに抱き付いた。
「……フィム。いい子にしてたか？　お母さんたちと仲良くしていたか？」
柔らか微笑みを浮かべ、抱き付くフィムの髪を撫でるオロチノカラサビ。
「カラサビッ！」
「カラサビっ!!」
クリサンセマムの女性メンバーたちが颯爽と現れた旧友に驚きと喜びが混じった声を上げる。

「……オロチノカラサビ……まさかあのアラガミの大群をひとりで片付けて、ここまで来たというの？」
高台から見下ろす顔を蹙めるネルウァ。
「うわっ!?　来たぁっ!?　一番チートなヤツが来ちゃったよっ！　お姉ちゃんっ!!!」
ネルウァのトーガの背後に慌てて隠れるネロ。
「まあな。ユウゴたちやアインさんが開発したアラガミ防壁で時間を稼いでくれたおかげでね。後は、お前らだけだ。覚悟はいいか？　悪戯姉妹」
オロチノカラサビが見下ろす白い姉妹を見上げる。
「……ふ、ふふふっ！　想定外……っ！　私は貴女の力を侮っていたわっ！　オロチノカラサビっ！　貴女に相応しいアラガミは何がいいかしら？　神速種？　侵喰種？　それとも神融種？　神源種もいいわね。侵襲種も捨てがたいわ」
片手を翳すネルウァ。
空間が歪み、禍々しい力が渦巻き辺りの物質を揺らぎ形を変えていく。
「うっ!?」
突如、ネルウァが片腕を押さえて蹲る。
「お、お姉ちゃんっ!?　腕がっ!!」

蹲るネルウァの手から右腕が乾いた粘土細工が壊れたようにヒビ割れ、ボロボロと崩れていくではないか。
「……調子に乗ってアラガミを短期間に作り過ぎたみたいね……やはりまだ完全とはいかないわ」
右肩から先が消失した部分を、忌々しげに眺め立ち上がり、眼下を見やる。
「……とても残念だけど、これ以上は遊んであげることが出来なくなったわ、オロチノカラサビ。またいずれ会いましょう」
そう言って片腕がないネルウァはネロを連れて空間に溶けるように一瞬にして消えた。
後には至る所、虫喰い穴だらけの大地と廃虚が残されただけだった。
「……ああ、嫌でもまた会うさ。近いうちに必ず、な」
黒の少女は天使な少女を抱き抱えたまま、こちらに駆け寄るかつての仲間たちのもとへ歩みを進めた。

終末の、明日も見えない白く濁った世界。
ほんの少しだけ、閉ざされた未来に黒き輝きが差した。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……？